
瞳にうつるモノ

放浪者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瞳にうつるモノ

【Nコード】

N8822B

【作者名】

放浪者

【あらすじ】

十年前の夏に幼いセレンは、ある雄火竜コウに出会った。彼女自身の人生で最も大切な事を学んだ思い出。少しだけ覗いてみませんか？モンハンのようでそうでないような話を……

(2011/08/23)

ひっそりと更新再開しましたが、後半になればなるほど、初期の文体から離れます。こんなモンに付いていけねえ！、と思っっている方は、戻るボタンのクリックを推奨します。それでも大丈夫だという

方は、冷やかしいでに覗いてって下さいな。

プロローグ(前書き)

携帯用の小説ですので、他のよりも短いです。更新は、早めにやっ
ていきたいと思っ
てます。

プロローグ

人々が集まるブレイブシティの西の果てにそびえる山岳地帯。その中腹にその村はある。

村の名は『ヴォイド村』

人口は40人位の小さな村。

100年以上前に村に住み着いた人々が、そこから空を見上げた時、雲が1つも見当たらなかった事からそう名付けられた。

異国の言葉で、『虚空』というそうだ。

その村の外れには、高さ30mの1本の楠の大木が生えており、村人はその木を守り神として崇めている。不思議な事にその大木の周囲には、他の木は生えておらず、芝が一面に生えている。

その更に奥には村の共同墓地あり、この村で一生を終えた者達が安らかに眠っている。

ザッ、ザッ、ザッ

墓地の中を防具で歩く者がいる。

普通は、質素な服で来るもののだが、その者の足取りは、懐かしい故郷を踏みしめているようにも見える。

「ただいま、コウ」

その者が止まったのは、墓地の奥にある大きな盛り土と木製の十字架が刺さっている墓だ。人が埋葬されるにしてはかなり大きな墓である。

「はい、これが街から持って来た香木」

懐から取り出した香木に火を着け、祭壇に備えた。

「いい匂いでしょ……」

サワサワサワ……

「あのね、はなしたい事がたくさんあるんだけどね、ちょっと、急ぎ、すぎたみ、た……」

寝転がった衝撃で頭部の防具が外れた。

長めの金髪に整った顔に残る小さな傷跡。このあどけなさが残っているこの少女が、この話の主人公『セレン』テイラー』だ

プロローグ（後書き）

まだまだ若輩者ですが、どうか飽きずに読んでやって下さい。感想お待ちしております。

第二話・出会い（前書き）

どんどんいきますよ〜

第二話：出会い

セレンとその竜が出会ったのは、今から10年前の夏。平野部や海岸には灼熱の太陽が照り付け、人を含めた全ての生き物がばてる時期。そんな時こそ野菜を食べると、ばてないと言うのだが……山の夏は、比較的涼しく、そんな事とは、全く縁もないだろう。

その日、齢10歳のセレンは、母親からお使いのようなものを頼まれて、森の畑に来ていた。そこには、テイラー家が代々耕してきた畑があり、今収穫時のキュウリや茄子が丸々と太って、枝にぶら下がっている。

「えっと、茄子を4つときゅうりを4本と、まあいいや」

籠の中に入っていく旬の野菜達。しかし、セレンは、きゅうりの畑から余分に2本もぎ取り、近くを流れる川の浅瀬まで行き、籠ごと水の中に浸した。

「200数えたらいいんだっけ？」

セレンは自分にそう言い聞かせ、のんびりと数え始めた。

100秒が過ぎると、段々と眠気が幼い彼女を襲う。

ドオオン、バキヤバキヤバキヤ

突然、黒い影が頭上を通りすぎ、穏やかな川を突風が襲う。それに続き、木々が何かに薙ぎ倒される大きな音がした。

その音でセレンの体に纏わりついていた眠気が、全て吹き飛んだ！

「何！？今の音……」

セレンの後方の林にあったはずの木々は、全て薙ぎ倒されて、そこからは赤黒い鱗で覆われた尻尾が顔を覗かせていた。

『絶対に近付いちゃダメ！絶対に！』

自分に何度も言い聞かせるセレン。しかし、幼い子供の好奇心は、湧き水のように溢れてくる。

『ちよっとだけなら……』

唾をゴクリと飲むと、その尻尾の方向へゆっくりと歩き始めた。

一步、また一步と歩み寄る事で大きくなる鼻息。そして心臓の鼓動。その距離残り5m。

『イ、夕……イ』

ふとセレンの頭に響く低い男の声。

「えっ？痛いのか？怪我でもしてるのか？」

怪我をしているそう認識した頭より早く、体は、そのモノへと走りよる。

茂みを掻き分け、幼いセレンの瞳に写った姿は、大の大人が10人いても足りない飛竜であった！

第三話・大きな鳥さん（前書き）

それでは第二話をどうぞ

第三話：大きな鳥さん

『逃げなきゃ……食べられる』

体の全細胞は、そう警告している。しかし、自分の目の前には、全身の赤い甲殻が出血で更に赤くなった飛竜が横たわっている。

「大きい鳥さん……」

恐る恐るその飛竜に近づくセレン。

ガアアアア！！

「！！！」

突然、その飛竜がセレンを丸飲みできるような口を開けて咆哮した！驚いた反動で尻餅をつくセレン。

グルルルル……

警戒している飛竜に、再び立ち上がって近付き、手が届く距離に至る。じつと瞳を見続けるセレンと飛竜。

そして……

「痛、くないの？」

震えた声で問いかけるセレン。

グルルルル

爛々と輝く瞳に写るセレンの姿。痛みで襲わないのか、警戒を解いたから襲わないのかは、わからない。ただ、この飛竜はセレンを襲おうとはしない。

そつと頭部の傷に触れるセレンの手。

ポオオオオ

セレンの手が微かに輝き、開いていた傷が少しずつ塞がっていく。

セレンの手が離れると、飛竜は痛みがなくなった事に気付いたのか、鋭い目を丸くした。

「へへ、昔からこんな事ができるんだよね……小さな傷ぐらいしかできないけど」

次々と小さな傷に手を重ねていく。

「少し痛いかも……」

翼の関節部に開いた深い傷。

グガアアア！

輝きが増すと苦痛の叫びを上げ、尻尾を動かす飛竜。その行動に驚き、手を退ける。

セレンの顔は汗だらけだ。

『ナ……ゼ』

「鳥さん、喋れるの？」

再び響く謎の声。だが、最初の時よりはつきりと聞こえる。ふと目の前にいる飛

竜の瞳を見るセレン。

『キ……コ、エル？』

「さつき、鳥さんは喋ったでしょ？痛いって、それであたしは」
ベロン

「ひゃああ」

突如、生暖かい舌がセレンの顔を伝い、全身が鳥肌を浮かべた。

『マズイ……』

そっぽを向く飛竜。

「え？」

全細胞が警告音をけたましく鳴らし、背筋にはしる悪寒。

「えっと……そろそろ帰らないと、おかあさんに怒られる」

さっと、後ろに退く。

「バイバイ」

声が裏返り、全速力でセレンは走った！

川で冷やしていた籠をとり、家までの道を。

今の彼女には誰にも追いつけないだろう。なんたって森の中で大きな鳥さんに出会ってしまったのだから……

第四話・ちよつと休憩（前書き）

ごめんなさい。今回は600文字を割ってしまったので、後半が空欄です。

では、ごじぞ。

第四話：ちよつと休憩

その夜、帰りが遅くなり、飛竜の咆哮に勝る母親の長い説教を受けたセレン。

母親の怒りが和らいだ所を見図り、父親の書齋へと潜り込んだ。古書と仕事の書類が山積みになっている父親の書齋。

その中から飛竜に関する図鑑を引っ張り出した。この本は、一ヶ月前に父親が街の本屋で買って来た本であり、この世界に住まう飛竜達の生態などを記したものだ。

「えつとどんなのだったかなあ？」

まだ真新しい本をおかまいなしに捲っていくセレン。

「あつた、あつた！」

ちよつと中間辺りにその飛竜の事は、記されていて、見つけるや否やセレンは、その生態に関しての部分を読んだ。

「主に大陸の全域に生息。巨大な翼で飛行し、各地を移動。肉食。

甲殻や鱗は、装飾品の素材となり」
パターン……

「あたしには、難しすぎ」

脳内の糸が何重にも絡まり、図鑑を閉じるセレン。とりあえず理解出来たのは、名はリオレウスで肉食だという事のみ。

「さてと、今日は早く寝よ」

そつと父親の書齋を抜け、いつもより早く布団の中へと潜り込んで行った。

「明日は楽しくなりそう」

この飛竜との出会いがセレンを大きく変えるなんて、幼いセレンには知るよしもない。

第五話・朝の家（前書き）

第五話です。

それでは、どつど。

第五話：朝の家

日の出と共に鳴き始める鶏。

いつもなら布団の中に眠っているのだが、今日だけは別だ。

「よし！」

布団の中から勢いよく飛び出すセレン！

ムギユツ

「へ？」

まだぶかぶかの寝間着の裾を踏みつけてしまい、そのまま朝の床へダイブ！

ビタアアアン！

鈍い衝突音。おそらくその場にセレン以外がいたら誰もが目を瞑っている光景だろう。

「ち、ちよつとはりきり過ぎたかも」

ぶつけて赤くなった顔を擦り、独り言を呟く。

気を取り直して台所に行くと、日の出にも関わらず、母サラ＝テイラーがせつせと朝食を作っていた。

「あら、どうしたの？こんな朝早くに」

昨晚の説教の時とは、正反対の顔。

「怒ってないの？」

「怒ってなんかないわよ、ただちよつと昨日は言い過ぎたわね……」

「ごめん」

「全然平気だよ。でも何でこんなに朝早いなの？」

「セレンが起きてくる前にお隣さんが来てね……」

「??????」

ひたすら疑問符を浮かびあげているセレン。そのセレンを心配そうな顔で見つめる母親。

「今日は外に出ないで、家にいなさい」

「何で？あたしは行かなきゃなんない」

「どうして？」

母親も疑問符を浮かびあげた。

「森の大きな鳥さんに会いに行くの」

「大きな鳥さん？」

「怪我をしてるの、だから」

ポウウ

掌を光らせるセレン。その手をゆっくりと握る母親。

「いい？これは怪我を治す事も出来るけどセレンの体への負担が大
きいの、だから無駄に使っちゃだめなのよ」

コクリと頷くセレン

「じゃあ、大きな鳥さんに伝えたら帰ってくるのよ」

「はい」

そう言うと、セレンは外にある井戸へと走って行った。

この村の各家庭には、必ず井戸が一つある。時には人を傷付ける山
に貯水された豊富な地下水。それを村の人々は大切に使っているの
だ。

カラカラ、ガン……パシヤ

縄で結ばれた桶を井戸へ放り込むと、威勢の良い音をたてながら水
面へと落下。

「ふんぬ！」

小さな腕に全身の力を込めて縄を引っ張る！水が入り重くなった桶
は、水を溢しながら上へと上ってくる。

「ふい……疲れる」

引き上げた時、桶に入っている水の量は半分。それでも2キロある
から子供にとっては重労働だ。

その水を別の桶に移し変え、よたよたと家の中まで運びこみ、水甕
へ流し込む。

これが毎朝の仕事だ。

良い具合にセレンの鼻を擽る良い匂い。

「セレン、御飯よお」

待ってましたと、言っつかの様に胃から上がる抗議の声。

「今、行かう！」

第六話：怪しい影

「ごちそうさまでした！」

少し早い朝食を食べ終わると、セレンは早々と自分の部屋へと戻った。

ガラガラ……

部屋に戻ると、埃まみれの物置をあさり、1つの小さな桐箱を引きずり出した。

そして、その蓋をゆっくりと開けると、透き通ったオカリナが顔を出した。

「綺麗」

セレンが10才になった時の夜、珍しく帰って来た父親が、セレンに手渡したものだ。何でも、白水晶を加工して作ったという珍しいオカリナとセレンの父親は言っていた。

そのオカリナを懐にしまい、玄関へ向かおうすると……

ガシッ

「ふえっ！」

足が地面から浮き、宙ぶらりになった。

「御約束は何だっけ？」

その華奢な体つきでセレンを片手で持ち上げている母親。

「鳥さんに伝えたら帰って来る……」

「よろしい、それとこれ」

すると、片手で持てる缶詰のような物を二つ手渡した。先には丸い輪がついている。

「何、これ」

「お母さんが昔に作った物。万が一、襲われたら丸い輪を抜いて相手の前に投げなさい」

「投げたらどうなるの？」

「もの凄い光が辺り一面を埋める。セレンも投げたら目をすぐに瞑りなさい」

「はい」

「それじゃ、気を付けて」

やっと地上に降るされたセレンは、皮製のブーツを履き、バケツを手につつすらと朝霧の立ち込める村を駆け抜けていった。

「……大きな鳥さんって、クックク？」

サラの頭の中に浮かんできた疑問。

「ないない……アレが人に寄ってくるなんて、ない！」

そのイメージを振り払うかの様に、朝から頭を激しく振るサラであった。

軽い足取りで森への道に入ったセレン。朝の森は村よりも朝霧は濃かった。

タツ、タツ、タツ（トツ）、タツ

すると、後方から微かに足音が聞こえた。

「ん？」

後ろを振り返っても誰もいない。

再び走り出すセレン。

タツ、タツ（トツ）、タツ（トツ）

足音に重なる様に接近して来る何か……

「誰なの？」

川の近くまで来たセレンは、立ち止まり問いかけた。

朝霧せいで背の高い影しかわからない。

ガサツ！

突然、左側の林から何かが飛び出して来た！

ザウ！

「キヤアアアアア！！」

左肩に痛みと強い衝撃によりセレンは、ころげた！

「いったあい……」

涙を浮かべ、声を押し殺したセレンが、顔を上げると、その先には
鋭い爪と牙を持ったトカゲの様な生物が、セレンを見下していた。
そして……また別の声が響く。

『サテ、ドコカラタベヨウカ』

第七話・林の中から（前書き）

どんどん、行きますよ。

では、さようなら。

第七話：林の中から

吹き飛ばされたセレンは、何度も動こうとするのだが、転ばされた時に足を捻り、動く事が出来ない。

ギヤア、ギヤア、ギヤア！！

突然、目の前にいたトカゲが吠え出すと、周りの林から更に2匹が出て来た！

「同じのが増えたあ！」

シユウ……………

ふと腰の辺りから音がする。行きに母親に渡されたアレの1つがひしゃげている。

「あれ？もしかして」

急いでひしゃげた缶詰のピンを抜き、トカゲ達に向かって、ぶん投げる！

カツ！

乾いた破裂音と共に臉の上からでも感じられる閃光が辺りを飲み込む！

ギヤピイイ！

3匹のトカゲが奇妙な悲鳴を上げ、その場でのびた！その間にセレンは立ち上がり、一気に川の方へと走った！

川辺に出たセレンは、昨日の場所へと向かおうとする。妙に左肩が熱い。

「痛ッ！」

左肩に触ったセレンは、痛みで反射的に手をひく。その左肩は、転ばされた時に土が付いたのか、痛々しく化膿していたのだ！

「うう……………我慢しろって言われても……………」

傷口が深く、風に晒されるだけで傷口はビリビリと痛む。

我慢出来ずに右手を傷口に当てようとした時……
ギヤア！！！！

のびていたはずのトカゲ達が追って来たのだ！
その声に気付き、セレンは川沿いを逃げ始める！

双方の距離は全く縮まらない。だがセレンのスタミナは、無くなる一方！

「はぁ……はぁ……最後の、1個！！」

最後の1個を腰紐から外し、輪状の栓を抜くと、トカゲ達の前方へ放りなげた！

カッ！！

2回目の閃光が辺りを真っ白に塗り潰した！瞼を開けると、その場は煙が埋め尽くしている。

スタミナの尽きた体を無理矢理に動かし、その場から離れるセレン。だが何か引つ掛かる点がある。

……悲鳴が聞こえない

『シネ』

何故かセレンは、振り向いてしまった。

そのセレンの瞳には、鋭い爪を振りかざして飛んで来る1匹のトカゲが写っている。

無論、セレンにはもう逃げる体力はない。

「助け……」グシャアッ

セレンが叫ぼうとした時、目の前にいたはずのトカゲは、林から出て来た生物によって噛み砕かれていた。

『……小物ハマズイナ』

ポイツ

下半身が噛み砕かれて絶命したトカゲを川辺に向かって投げ捨てる。残りの2匹は、仲間の死を前にして、林の中へと消えていった。ぐるりと首を回し、セレンを見る飛竜。

「と、鳥さんも……あたしを食べる気？」

恐る恐る聞くセレン。

『何、食事八済ンダ』

こうして、セレンは助けられた……

第八話・名は……（前書き）

それでは、どうぞお楽しみを

ヨ（一）ヨ

第八話：名は……

朝の川辺で起こった騒動。

昨日の飛竜に助けられたセレンは、腰を抜かしその場へたりこんでしまった。

『奴ら、少シハ懲リタヨウダナ……』

「ひゃ！……」

突然問いかけられ、セレンの声は裏返る。

『ドウシタ？改メテ、見ルト怖イノカ？』

「えっ、あ……う、」

確かにその事は否定できない。その鋭い目に血で赤く染まった牙。

それに生まれて初めて、それも目の前で生物が死んだのだから。

『マア、ドチラデモ良イカ……』

ズウン…ズウン…

鈍い足音と共にその巨体が姿を現した。

「大きい……」

改めて見ると、その大きさには驚くものがある。初め、大人10人分の大きさと見ていたのだが、頭から尾の先までは20m近くはある。

ザアアア

巨体がいなければ、いつもと変わらない川辺の景色。飛竜は頭を突っ込み、豪快に川の水を飲んでいる。

手を肩に傷が塞がる程度に光を当てるセレン。

ズウン、ズウン

水が飲み終わったのか、飛竜がセレンに向かってくる。そして来ると、セレンの傷口をジッと見る。

『人間ノ治癒術ハ、相変ワラス便利ダナ』

「ちよっと！人間って、アタシにはセレンっていう名前があるのよ

！」

『フツ、我が知ツタ事力』

鼻で笑うと、林の中へと戻って行く飛竜。

「じゃあ、鳥さんの名前は？」

「……………聞こえるのは鳥のさえずりのみ。

「ねえつてばあ！」

依然変わらない。

スウ……………

「鳥鳥鳥鳥鳥鳥い！！！」

林に向かって、『鳥』と連呼すると……………

『ヤカマシイ！』

林の中から首だけがヌツと出て来て、セレンに大きな口を開け、吠えた！

『鳥ト言ウ事ハ我等ヲ愚弄スル言葉ダ！我等ハ真ノ飛竜ダ…鳥デハナイ！』

カプツ

「ふえつ！？」

軽く服を噛まれ……………

ヒヨイツ

「あだつ！！！」

乱暴に背中に乗せられる。

グオオオオン！！

朝の川辺に飛竜の咆哮が轟き、鳥達は恐れてその場を離れる。

『人間ヨ、振り落トサレルナ！』

「えっ、ちよつと……………き」

ドオオオオン！

目を閉じセレンは悲鳴を上げたのだが、その声は爆音に飲み込まれ、朝の川辺を猛烈な突風が襲う。

「んっ……………」

重力から解放された様な不思議な感覚……………

正面から感じる風。

閉じていた目をセレンは開けた。

「うわあああ……………」

セレンの瞳にうつったモノ、それは邪魔される事のない天空から見下ろす地上と、彼等の住まう空の世界。

景色に見とれているセレン。

『コウ…………ソレガ我ノ名ダ』

「コウ…………よろしくね!!」

第九話：密林の怪鳥

コウの背中に乗ってからどの位が経つたのだろう……

景色に夢中だったセレンはふと思った。

何となく分かるのは、もうすっかり太陽が昇った事ぐらい。

「ねえ、今何処に向かっているの！」

コウの背中に乗っているセレンが叫ぶ。

「……オマエガ言ツテイル鳥ヲ見セル」

「お前って言わないで！」

『ヤカマシイ!!』

キイン!

「うわっ」

頭にコウの声が響く。

「……じゃあ、鳥ってどんな鳥なのう！」

『叫バンデモ聞コエテル!』

「はうっ」

更に大きな声が頭に響き、頭を押さえるセレン。

『……ソロソロ奴ラノ生活圈ダ』

「ん……森？」

セレンの目下には、青々とした葉が生い茂っている森が広がっている。村の森とは比べようのない程広い。

『マダ人ガアマリ入ラナイ密林ダ』

その密林上空を旋回するコウ。

『降りルゾ……』

着地する場所が見つかり、その場へと徐々に降下する。

「川だ……」

コウが着陸しようとしている場所は、少し濁った川の川辺。

コウの羽ばたきで水面は激しく揺れている。

ズズウン……

着地で数枚の木の葉が落ちた。

『降り口……モウスグ奴ラノ食事時ダ』

初めての密林に興味深々のセレン。

『オイ……』

「あつ、降りるんだっけ」

トツ……

軽やかにコウの背中から飛び降りるセレン。しかし、そこには……

ベシヤツ

「うわっぶ」

ぬかるんだ泥が待っていた。

「ぺっ、ぺっ……何よおこれ！」

泥だらけになったセレンの叫び声。

『泥ニマミレル方ガ良イ、才前ノ臭イモ無クナル』

「だから……」

『ソナニ名トハ良イモノナノカ？』

文句を読まれた。

「良いに決まってるじゃないの！」

尻餅をつきながらむきに答えるセレン。

『何故？』

「そ、それは……そのう……」

言葉が詰まるセレン……

「あ、あたしは、飛竜さんとか呼びにくいし、名前があるなら、そ

ちで呼んだ方が……」

『人ニトツテ名トハ、ソウイウモノナノカ』

そう言うと、その場に腰を下ろし、のんびりと対岸を見つめるコウ。

コウの見つめる方をじっと見るセレン。

ザアアアア……

密林の川辺で対岸を見始め30分。湿気が多い密林が大量の汗を吹き出させる。

『此処二入レ』

コウが翼を広げ、隠れるよう告げる。

「え〜……」

ただでさえ暑いのに更に暑くなる事を考えると、あまり入りたくはない。

ビュオオ

その上空を黒い影が通りすぎ、対岸に何かが着地した。

「アレが……鳥？」

第十話：密林に響く悲鳴

その姿はまさに鳥。体表は桃色の鱗に覆われ、大きな嘴と耳が特徴。クエ、クエ……

大きな耳を広げ、辺りを見回している。

目が会いそうになると、セレンは素早くコウの下に隠れる。

体温で暑いコウの下。だが目の先にいる鳥を前に暑さは、あまり気にならない。

『怪鳥イヤンクック……奴ラガ鳥ダ』

「ふ〜ん……」

翼の間からその光景を見ているセレン。

ザクツ、ザクツ、ザクツ

その大きな嘴を何度も地面に打ち付けるクック。

「何してるの？」

『奴ラノ主食デアルミミズデモ食ベテルノダロ？所詮、鳥ダ奴ラハ』

「いいい……」

ミミズと聞いた瞬間、セレンの全身に鳥肌が立つ。

『……』

下のぬかるんだ泥を掘りかえすコウ。

何かを見つけると口にくわえて……

ポトツ

セレンの目の前に投下。

「イヤアアアアアッ！……！」

密林一帯に聞こえるような甲高い絶叫を上げた！

瞬きしながら素に驚くコウ。

「来ないでえええつ」

驚くのも無理はない。セレンの目の前に落とされたのは、大きさもぬめりも一級品のオオミミズなのだから。

『クッククック』

思わず笑いが漏れてしまったコウ。
ふと対岸の方を見ると、耳を広げて気絶しているクックがいて、おかしさが増す。

『見口、才前ノ声デノビ…』

『ミミズウウウー!!』

目から涙を滝の如く流し、パニックのあまりに聞く耳持たず。
その落としたミミズは、すでにぬかるんだ泥に逃げてしまったようだ。

『ミミズハモウイナイゾ』

バチンッ

セレンがコウの甲殻を平手で叩いた。

『コウのバカア』

涙目でコウの瞳を睨むセレン。

『コウイウ場合、我ハ何ト言エバ良イ…』

『謝れええ!!』

キーン!!

先程の悲鳴と同じ位の罵声。

『謝ル?』

『そう!!』

コウの目の前に立つセレン。

ジッと、瞳を見続けるコウ。

『……ス、スマン』

『ごめんなさい。が、普通でしょ!?!』

いつの間にかセレンに権力は移っている。この光景が常人の目にはどう写るのだろうか……
グウッ

なんとも府抜けた音が響く。

『我ラモ食事時ダ……』

この音を逃さずコウは、セレンを背中に乗せる。無論…無理矢理。

「こらあ、ご飯の前に謝…」

最後の言葉は出ずに宙へと舞い上がり、元の川辺へと進路をとる。

それからまもなく、悲鳴を聞いて気絶していたクックが我に帰った。
クエエエエ！！

昼食を邪魔された事が余程、腹立たしかったのか彼もコウとセレンを追い始めた。

第十話：密林に響く悲鳴（後書き）

とりあえず、十話まで更新させていただきました。これからも【瞳にうつるモノ】を宜しくお願いします。

第十一話・空の戦い（前書き）

どんどん、行きますよお
それでは、どつどつぞ

第十一話：空の戦い

飛びたつてから数分が経過。

太陽は大空高く昇っている。

「こらあ、先に謝りなさいよお！」

平穏な空に罵声を轟かすセレン。

『ダカラ叫ブナ』

その罵声を必死に耐えているコウ。

「謝れ謝れ謝れええ！」

『スマント言ツテオルダロ！』

「心がこもってない！」

『又ウ……………』

その時、草食竜の集まる水辺へと繋がる川を見つけた。

グンツ

そしてこのままでは埒が明かない……………そう感じたコウは、姿勢を下へと下げた。

段々加速していくコウ。近づく水面。

「ち、ちよつと、ぶつかるうう！」

コウの体に必死に張り付くセレン。

ドオオオン！

水面ギリギリの所で体勢を元に戻し、急停止したコウ。その後を突風が追い抜いていき、水しぶきが舞い上がる。

「助かったあ……………」

『……………見口』

そしてセレンが見たのは……………

「虹だ……………」

そこには、舞い上がった水しぶきが作り出した虹がかかっていた。

「綺麗……………」

その光景に目を奪われているセレン。

『ドウダ心ガコモツテイルダロ?』

虹が消えると、得意気に鼻を鳴らすコウ。

「もう一回」

セレンは人指し指をピンツと一本立てる。

『ナツ……モウ一回!?!』

言葉が出る前に呆れるコウ。

「コウなら何度も出来るでしょ?」

そう言つて、セレンはコウの背中を叩く。

『……少し疲レタ、マタ今度タ』

「ええ」

不満げに背中を叩くセレン。

ヒュオオ……

風向きが変わつた。

「……ん?」

全神経で周囲を警戒するコウを見る。

『捕ま……!?!』

コウの語尾は聞こえず爆音と共に消えた。

「ど、どうしたの!?!」

急上昇したコウの背中に捕まるセレン。

クエエエエ!!!

密林で聞いた様な鳴き声。

『オノウレエエツ!!!?!』

頭に響く別の声。

ガッ

それと同時に視界が激しく揺れた……のではなくコウの体勢が不安定になつたのだ!!

『グツ……』『きゃっ……』

体勢を立て直したコウは、上空へと過ぎて行つた物体を睨みつける。

「今度は何!?!」

状況を把握出来ず混乱するセレン。

『才前ノ悲鳴ヲ聞イタ鳥ダ……』

「何で!?!」

『ソナモノハ奴ニ聞ケ!!』

上空へ飛び上がるコウ! 前方から吹き付けて来る風でまともに目を開けない!

ドガッ!!

鈍い音と共にまた激しく揺れる!

『コノ下級飛竜ガアア!!』

「ち、ちよつと! 落ち着いて!!」

怒りを剥き出しにしたコウは、セレンを乗せているのを気にしないかの様に速度を上げてゆく!

第十二話：空の救出劇

ガアアア！！

天空を駆け巡り争う2頭……

「落ちるうろう」

と若い少女1人。

ドオン、ドオンドオン

幾つの火球が小さな影へと襲いかかるが、未だ当たり無し。

クエエエ！！

寧ろ逆に攻められている。

「コ、コウ、落ちる落ちる！！」

必死にしがみつくとセレンのだが、腕の筋肉は疲れ果て、何度もくる激しい衝撃によって、更に力が入らなくなる。

ガンッ！！

「あっ……」

遂に翼同士がぶつかった時にセレンの腕が離れた！！宙に投げ出されたセレン。もう上も下も何もかもがわからない……

ただ悲鳴を上げる事しか、今の彼女にはできない。

『シマツタア！！』

風の中で微かに聞こえた悲鳴を聞いたコウは、セレンを追いかける！
クエエエ！！

その後ろを追うクック。

その翼を畳み一気に速度を上げる！！

狭まるコウとセレンの距離……

コウは口を開き、セレンを捕まえようと……力加減を誤れば、セレンの皮膚に牙が食い込む。

「コウオオオ！！」

回転しながら必死にコウの名を叫ぶセレン！

『チイツ！！』

ゴオオオ！

体が大きいおかげで、前方から吹き付けて来る風がコウの邪魔をする。

あと少し……もう少し……

だが、地面も物凄い勢いで近付いてくる！

カプツ

『掴ンダ！！』『わっ！！』

遂にコウがセレンの服を掴んだ！だが気付いた時には、衝突を回避する限界点を越えていたのだ！

『グツ』

巨大な翼を広げ、膨大な揚力を得たコウは、一気に減速！その後ろを追っていたクツクも翼を広げ、揚力を得ようとするが、その貧弱な翼では満足に得る事は出来ない！！

グシャアアアツ！！！！

揚力を得られなかったクツクは、地面に叩きつけられ、不気味な音を周囲に響かせた。

「頭がクラクラする……」

宙ぶらのセレンは頭を押さえる。

『……ソノ前二礼ヲ言ウノガ筋ダロ』

「だって、落ちたのはコウのせいだよ……」

『又ウ……』

低く唸るコウ。

「……この体勢辛い」

『暫ク我慢シロ……モウすぐ降りル場所ダ』

「ええ〜!?!」

不満げに声を上げるセレン。

『少し我慢トイウノヲ覚エタラドウダ?』

母親に良く言われる言葉をコウに言われて、セレンは頬を膨らます。

『見エタゾ……彼処ダ』

清らかな水が流れて、多くの草食竜が群がっている広大な平原。

「おつきい……」

セレンがコウに連れられて、様々な光景を見た。その中で驚き、感動し、まだまだ沢山の事が起きるのだと……セレンは目を輝かせていた。

第十三話：食事時

のどかに草を食んでいる草食竜達。

そこはいつもと変わらない風景が広がっていた……

「?????」

その中の数匹が妙な気配を感じとり、顔を上げる。

バサア…バサア…

鳥ではなく、もっと大きな生物の羽ばたき。彼等の頭の中である言葉が見つかる……

「飛竜」

それにしても、羽ばたきの中にあるまた別の気配が気になる。

ズズウン……

すでに走りさった奴らの所に飛竜が降りた。あの空の王者が……

いつもなら逃げさっているのだが、今日は妙な気配が気になって逃げる事を忘れ、凝視する。

「降りて良いの？」

その空の王者の背中からひょっこりと、姿を現した正体……そう人の子供だ。

「イイカラサツサト降り口」

明らかに奇妙な組み合わせ。

「見てえ！荷車の竜があんなにい！」

王者の背中から降りた子供が平原に響く。

「彼等ハアプトノス」

第三者から見ると、子守りの様に見える。

「空の王者も名が堕ちたな…人ごときに」

バガアアン！！

それを凝視していた草食竜の意識は、ここで途絶えた。

突然響いた音に周囲の生物は驚き、セレンも尻餅をつく……

コウとセレンの視線の先に横たわる草食竜

「し、死んじゃったの？」

恐る恐るコウに問いかけるセレン。

『アア……食事ダ』

平然に答え、ゆっくりと草食竜の死骸に近づくコウ。死骸からは血と肉の焦げる臭いが混じった臭いが漂う。

グチャツ……

セレンは反射的に目を閉じたが、生々しい音が耳から聞こえてくる。

「うっぷ……」

その下にしゃがみこみ、吐き出すセレン。

「気持ち悪い……」

ドシャツ

口に苦い風味が漂う中、後ろに何かが落とされた。

「……何ようこれ!!」

セレンの目の前に落とされたのは、まだ新鮮な生肉の塊。コウがセレンのために、むしりとったのだらう……

『昼食ダ、食エ』

セレンはコウの方を見たが、その口元は、血で染まり、血生臭い空気が吐き出されている。

「嫌っ!!」

『何故? 旨い部分ダゾ』

コウは、その肉塊を見つめつつ、唾液を垂らしている。

「そんな気持ち悪いのなんて、食べたくない!!」

『気持ち悪い? 言ツトクガ、セレンガ日頃食べテイル肉モ元八、コ
ンナ感ジダゾ……』

薄く目を開け、肉塊を見るセレン。

「……」

『食べナイナラ我が食ベルゾ……』

その肉をくわえあげるコウ。

ガツ、ガツガツ

巨大な肉塊は、コウの口の中へと消えていった。

「……………何で平気なのよ」

セレンは小さく呟いた…

聞こえない様に小さく…

第十四話：自然の摂理

『腹が減ツタカラ食ベル、ソレダケダ』

聞こえない様に小さく呟いたはずなのだが、コウの耳には、はっきりと聞こえていたようだ……

「だからと言って、殺すの!？」

『ハア……』

深い溜め息を吐き出すコウ。

「何よお！」

溜め息を聞いて、怒鳴るセレン。

『自然ノ摂理……強イ者ハ生き、弱イ者ハ死ンデユク。我ハソノ頂点ニ近イ所ダ』

「それが何な……」

『分カラヌダロウガ、人モ我等ト同等ノ位置ニイル……セレンモ成長スレバ分カル』

最後の言葉を言う前にコウは、答えた。

「私は……」

『セレンガ、ソウ言ツテモ成長シタラ我等ヘノ見方ガ変ワルカモシレナイ……』

「だから……私は」

コウの問いかけに困るセレン。

『モシ我等ノ仲間ガ、セレンノ親ヲ殺シタラドウナル』

セレンの瞳が大きく見開かれた……

「何で、そんな事言うのよ!？」

悪い冗談では済まない事を次々と、吐き出すコウにセレンは、怒鳴った。

『我ノ親ハ人ニ殺サレタ……』

「えっ……」

コウの一言にセレンは、言葉を失った。

『我が幼キ頃、我ノ目ノ前デ……』

翼の根本にある傷を見せるコウ。

セレンが初めて治療したあの傷痕を。

『コノ傷ハ必死ニ逃ゲタ時ニ負ツタ。放ツテオケバ死ヌヨウナ幼童ノ我ニ奴ラハ!!』

ギョツ……

怖い。セレンの頭にはその言葉以外は見つからない。目の前にいるコウの湧き上がる怒りと憎しみが、セレンの胸の中へと入り込んでくる様だ……

「で、でもコウは自然の何かの頂点何でしょ？コウに勝てる者なんていないでしょ？」

震えた声で話すセレン。

『イヤ、人デモ賢イ奴ハ我ヲ殺ソウトスル。我ハ何度モ戦イ勝ち、傷付キ、ソシテエ!!』

コウの瞳が一気に開く……

禍々しい瞳で睨みつけられたセレンは、震えきっている。

『……スマヌ、子供相手ニ熱ガ入ツテシマッタ』

コウから禍々しい気がフツと途絶えた。

「はあ……はあ……」

体は冷や汗が大量に吹き出し、恐怖のあまりに呼吸もまともにできない。

震えた体でコウの顔に抱きつくセレン。

「……て……ほしい」

『ンツ??』

心の中で呟いた様な本当に小さな声。

「コ……コウには……あたしの事を……信じてほしい」

『我モセレンノ今ノ心ガ変ワラナイト信ジタイ……コノ先ズツト』

暫く抱きついているうちに、セレンの震えは止まり、その間コウは考えていた。

『何故、神八我トコノ少女ヲ会ワセタノカ…一
体何ノタメナノカ』
……と

第十五話：誰かの視線

日が天辺から傾き始めた頃、コウはセレンを乗せて、元の行き道
を辿る。

セレンは大人しくなり、周りの景色に見入っていた。

「ん……誰??」

急にセレンが、周りを見回しながら呟く。

『ドウシタ?』

「……誰かが見てる」

周囲には、コウとセレン以外の生物はいない。だが、ただ一人だけ
……セレンは感じていた。悪魔が見つめている様な視線を…

『何モイナイゾ……気ノセイダロ』

ドクン…ドクン、ドクン

鼓動が段々速くなっていき、全身から嫌な汗がドツと吹き出して
く…

「何だか気味が悪い……コウは何か気付かないの?」

『何モ……疲レタノカ?』

首を横に振るセレン。

『オカシナ奴ダナ……』

「おかしくない!!」

キーンツと頭に響く罵声。

『ワカッタカラ叫ブナ……』

コウが速度を上げ、セレンはしがみつく。

弾丸の様に飛んでいく景色。しかし遠ざかるにつれて感じる視線は
強くなる。

ギョツ……

怖さのあまりにセレンの腕に力が入る。

それを感じとったコウは、疑問符を浮かべる。何故ならどんなに研

ぎ澄ましたとしても、自分には感じとれないのだから。
グオオオオオン！！

急にコウが吠えると、反射的にセレンの体がはね上がりかけた。

「な、何！！！」

ついに何かを見付けたのかと焦るセレン。

『イヤ、タダ吠エタダケダ……………』

「もう！！真面目に怖いのよお！！！」

風で流されない様な大声でセレンは叫ぶ。

『ツデ、消エタカ？』

コウは減速するとセレンに問いかけた。

「真面目に答え……………って、あれ？」

彼女が感じていた視線は既に消えていた。

『ソノ様子ジャ消エタ様ダナ……………』

「何で！だ、だってさっきまでは……………」

『信ジテヤルカラ静カニシテロ』

話を切る様に答えたコウ。

「……………本当に信じてる？」

『アア』

何処か生返事なコウ。

「本当に？」

釘をさす様に再度セレンは問いかける。

『……………落トスゾ』

しつこかったのかコウの機嫌は下降気味。

「ごめん……………」

気を落としてしがみつき直すセレン。

しかし、彼女の頭からその謎の視線の事は、消えなかった……………その
帰り道中ずっと。

第十六話：約束

いつしか太陽は西へと傾き、辺りをオレンジ色に染め上げている、
「んう……（何だったんだろう）」
セレンは低く唸っていた。

コウからは気のせいだと言われていたが、どうしても気になって仕方がない。

その一方コウは、セレンと初めてあった場所に近付きその辺りを旋回し始める。

もちろん低く唸っているセレンが、気になるのだが完全に諦めモード。

『降リルゾ』

元いた場所を見つけ、ゆっくりと降下するコウ。
ズズウン……

コウは無事に降下する事が出来た。

『着イタゾ』

セレンに声をかけても返事がこない。

『オイ、セレン』

「…んあっ！もう着いたの？」

途中までのコウの話の話を全く聞いてなかったようだ。頭の中で糸が絡まる様な思いのコウ。

トッ……

コウの背中から飛び降りるセレン。

「無理矢理に連れてかれたけど、面白かった……初めてみる事もあったし」

『トリアエズ我八鳥デハナイ…良イナ』

「じゃあ、あたしは帰るね」

クルッと振り返り駆け出そうとするセレン。

「あつ……」

何かを言い忘れたかの様に声を上げる。

『何ダ……マダ何カアルノカ?』

コウの第六感が警報を鳴らす。

「また、明日も来ていい?」

『ハツ!?何故』

笑顔で答えたセレンにコウは驚いた様な声を上げる。

「だってまだまだコウの事、よく知らないから私はもっとコウの事を知りたい!それに……」

セレンの最後の言葉を溜める。

『……ソレニ何ダ?』

何拍か置いてコウが問いかける。

「コウは寂しくないの?友達とかいなくて……」

『トモ…ダチ?』

コウの頭に浮かぶ不思議な言葉。

「そう、仲良しな…飛竜さんとか」

『幼キ頃カラ独リダ、ソナナ物ハイラン』

「コウがいらなくても、あたしはほしいの!」

『セレンノ所ニハイナイノカ?ソレハ』

コウは聞いてから後悔した。

「いても皆、親の自慢話ばっかだし、あたしは話に参加できないから…つまんない」

『……ヤレヤレ困ツタ奴ダ本当ニ……明日モココニイテヤル、続キハマタ明日ダ』

「やったあ!!」
スッ

右手の小指を立て差し出すセレン。

「約束だよ、コウ」

『約束スル……ソウダ』

コウが首を回すと、翼の鱗を剥がしセレンに差し出す。

『約束ノ証ダ、誰ニモ見セルナヨ』

暗くて良く見えないが、丁度セレンの手に収まる様な小さな鱗だ。

「ありがとう!!」

その鱗を握り締め林から飛び出すセレン。

『フウ…明日八何が起キルンダカ』

………本当に何が起きるんだろう

第十六話：約束（後書き）

また時間を空けて更新したいと思います。

これからも「瞳にうつるモノ」をよろしく願います。

第十七話：無事に帰宅？（前書き）

どうも、放浪者です。

少し間が空いて申し訳ないです。

それでは、第十七話どうぞ。

第十七話：無事に帰宅？

セレンは、駆けていた。

先程までオレンジ色に染まっていた空もその半分は、夜の暗闇に包まれ始めている。

タツタツタツ

行きよりも軽やか……いや半分は焦っている様な足取りという方が正解だろう。

「ハア…ハア…（まさかまた来ないよね）」

明日、また同じように来ても良いと、言われてもまたトカゲ達に襲われるようじゃ、命が何個有っても足りない。

それと、出る時に母親と約束した時間が過ぎているという事……何と言えば良いのやら……

ただ無心に村へ向かって走るだけ。

今のセレンの頭には、それしか考えないようにしている。

「み、みえたあ！」

やっとセレンの視線の先に村の門が見えた！

その門の両脇に竜を象ったトーテムポールをくぐりぬけ、中心部に位置する酒場を右に曲がって行けば、セレンの家に着くのだ。

暗くなつた村の道を全速力で駆け抜けるセレンと擦れ違う人は、何事かと思いつながらセレンを見つめるのであった。

ザザアアア！！

セレンは、一気に減速。1m程のブレーキ痕を残し、家の扉の前に着いた。

「ひい…ふう……つ、疲れたあ！」

休みなしで動かされた足の筋肉は、限界を超えたのか痙攣を起こし、心臓は物凄い速さで鼓動している。

ガチャツ……

外の物音に気付いたか家の扉が開く。

「ただい……」

最後の言葉が吐き出される事はなかった。ただ無言で立ち尽くすセレンの母サラ。

しかし、その全身からは母親とは思えない様なオーラが吹き出している。

「ご、ごめんなさい……」

一歩ずつ近付く母親を見て、ゲンコツを覚悟したセレンは、カ一杯目を閉じた。

「ちよつと、どうしたの!？」

「へっ?」

服が破け、体が泥だらけのセレンを見たサラは、怒る事を忘れ、体のあちこちを触る。

「途中で藪にひっかけちゃって……」

助かったと思いつつ言い訳を並べるセレン。

「それにしても汚いわねえ……臭うし、早く体洗って来なさい!」

鼻をひくつかせたサラは、セレンに風呂に入るよう急かせる。その後、セレンは風呂場へと向かった。

風呂場に着いたセレンは、さっさと服を脱ぎ中へと入る。セレンの家の風呂は、この村のどの家庭が使っている五衛門風呂だ。

ザバア……

湯船から直接湯を取りだし、頭から浴びるセレン。丁度良い温度で湯と共に体から疲れが流れるようだ。

後は適当に手拭いで体を洗い、湯船に入るだけ。

湯船に入ると、セレンの体積だけの水が勢い良く溢れ出る。

「ふう…疲れたつと」

第十八話：父の帰宅（前書き）

どんどん行きますよ

第十八話：父の帰宅

「セレン、ご飯よお」

ザバアツ

「はい」

湯船から出たセレンは、温まった体が冷めないよう、さっさと着替を済ます。

まだブカブカの寝巻を引きずりながら、夕飯の並んだ食卓へとセレンが走った。

その食卓には、ウオーミル麦の頑固パンと煙を上げたアプトノスのステーキ、砲丸レタスと自家菜園から採れたキュウリのサラダが並んでいた。

昼からまともに食べていないセレンの胃からは抗議の聲が上がる。

「すごおい……いただき」

「あい、ちよつと御預けよ」

フォークが肉に突き刺さり、肉のエキスが溢れでた所でセレンの腕が止まった。

「ええええ!!どうしてなのお!?!」

その言葉に思わず、叫んでしまうセレン。

「ちよつと、周りを見なさいよ」

サラがそう言い、セレンは食卓を見回す。

「……一人前多い?」

そう……普段は母親とセレンの分しか並んでないのに、今日は三人分が並んでいる。

三人分〃一人余り

「もしかして、帰ってくるの!?!」

頭に浮かんだ式の答えを理解したセレン。

コンコン……

家の玄関から乾いたノック音。

「噂を言えば何とやら……セレン」

胃からの抗議を抑えてセレンは、玄関へと走った。

ガチャツ

「ただい」「おかえりい!!」

玄関が開くと同時にセレンは、その人物に飛び付いた!!

「うおっ!!……って、セレンか」

少し年期的に入った白衣を纏った男は、開けると同時に胸に飛び付いてきたセレンを、何とか抱きとめた。

「おかえり、父さん!!」

うつすら色のついた眼鏡を直しながら、セレンの頭を撫でている「の男が、セレンの父親のクロウ・テイラーだ。」

「んう……いい匂いだなサラ」

セレンと同じように鼻をひくつかせるクロウ。

「当たり前じゃない!あなたが帰って来るのだもの」
ぐうう……

父・クロウの胃からも抗議の声。

「ほらほら、二人共席に着きなさい」

「サラ、外の荷物はどうする」

「そんな物は後よ、あ・と・!!」

「へ〜い」

白衣を椅子の背もたれにかけ、クロウは手を合わせた。それを見てサラもセレンも手を合わせる。

「それでは……」

三人は大きく息を吸う

「……いったつだつきまあす!!!!」「」「」

第十九話：腕の痛み

やんやと色々な話に花が咲く食卓。つい数分前には、豪勢な食べ物が並んでいたが、それはすでにたいらげられていた。

パン、パン

「それじゃ、後片付け」

食事を終えて楊枝をくわえていたサラが 軽く手を叩いた。

「もう少しゆっくりしないか？」

同じく楊枝をくわえているクロウ。

「片付けが終わったらよ、私は貴方の荷下ろし手伝うから……セレ

ンは、食器洗いよ」

「はい」

セレンは、いつものように返事をする、食卓に残った食器を洗い場へと運んでいく。

そのセレンの姿を見て感心するクロウ。

「まあ、何処かの誰かさんとは大違い」

クロウを横目で見ながら答えるサラ。

「誰かさんとは何だ！」

「あら、失礼」

父親が帰って来ると、母親の性格が変わる事にはもう慣れているセレン。

シャコ、シャコ……

脂やら何やらで汚れた食器が、積み重ねられている洗い場。セレンは、スポンジを片手にせつせと洗っていた。

「痛ッ……」

突然、右腕に痛みがはしり、腕を押さえつけるセレン。その頭の片隅に母親のある言葉が浮かぶ。

『セレンへの体の負担が大きい』

しかし、初めてコウと会った時の事を思うと、使わずにはいられなかった。

「大丈夫、痛くない…痛くない」

そう自分に暗示をかけながら、セレンは食器洗いに戻った。

その一方、クロウの荷下ろしを手伝っていたサラは……

「ねえ、クロウ」

「ん？」

「何か……私に隠し事があるでしょ？」

ギクツ

頭の中でそう効果音が鳴り響くが、クロウは何とか平静を保った。

「何でだい？」

何事もなかったかのように話すクロウ。

「私の勘」

「最近は昔みたいに当たってないぞ」

「ねえ〜クロウ〜」

サラの甘い吐息がクロウに迫って来る。

「お互いに隠し事は無しでしょ〜」

じりじりとクロウに迫るサラ。

「隠し事なんかない！」

そう言い放つても徐々に近づくサラ。クロウの保っている平静の糸が、少しずつ緩み始める。

「早く荷下ろししないと、明日の仕事が出来ないからさあ………ね？」
吐息がかかる位の距離でサラは止まる。

「ちえっ、わかったわよ」

サラから吹き出していた、甘いオーラがフツと消えた。その傍らクロウは胸を撫で下ろしたのだった。

第二十話：飛竜・古龍学者クロウ

サラの甘い尋問を潜り抜けたクロウは、積み上げられた書類で、一種の山脈が構成されている書齋に最後の書類を運び入れた。

「ふう、荷下ろし終了つと……」

常人が見たら絶対に掃除したくなる。そんな部屋が学者であるクロウの書齋だ。

クロウが専攻しているのは、絶滅した飛竜と現存する飛竜の生態に関する飛竜学というもの。クロウ自身が努力家であったため、その努力が認められ、今では「飛竜学と言えばクロウ」とまで言われるようになった。

最近になってからは、飛竜よりも強大な力を持つとも言われる古龍の研究にも手をつけ始めたクロウ。

「ちと汚いな……」

クロウ自信も流石に汚いと思い、床に散らばっている書類やゴミをゴミ箱に放り込んでいく。

「いる……いない……んう、いらんな」

みるみるうちにゴミ箱から溢れかえるゴミの山。それに混じって真新しい一冊の本が床に落ちていた。

「あれ？しまつておいたぞ……コレは」

そう言つてその本を拾い上げると、床に座り込みページを開いている。

「あらら……ボロボロ」

乱暴に開かれた本は、ページの途中で折れていたり、若干破れてもいた。少しずつ補修しながら、脳内では犯人探し。

「犯人は……」

あるページからは、全く捲られた形跡がない。そして、一本の長い

金髪を発見。

「セレンだな…こりゃあ」

深くため息をつくクロウ。それと同時に1つの疑問が生じた。

「リオレウスか…」

その問題のページがリオレウスのページ。

挿絵からしても女の子にとっては、あまり好きになるとは限らない。かといってクツクのページは他のページと変わらない。

「…とりあえず、サラに聞いてみるか」

ボタンと本を閉じたクロウ。

「残りは明日…だな」

クロウは、もう一度振り返り、一通り見回してから部屋を後にした。白い山脈となっていた書類が、山になったただけだが、クロウにしては上出来だったのだろう…

第二十一話：飛竜・古龍学者クロウ その二

「よっこいせつ！！」

ズン！！

サラが勢いよく下ろすと、その箱は鈍い悲鳴を上げた。中身を確認すべく箱を開けると、中から何個にもまとめられた書類の束が顔を覗かせる。

「クロウの奴：何、やってるのかしら」
パラッ

そのうちの1つを抜き出し、おもむろにページを捲りだす。

「んっ？」

サラは一瞬、老眼かと思いきや目を擦る。

「うひゃゝ、何よコレ！」

だがその視界に見えたのは、表などはおろか挿絵などは存在せず、小さな紙に溢れんばかりの文字が、所狭しとひしめく世界。

「読みにくっ……」

しかも、1つの事を延々と書き続けるうえに、その文章は学者達の間には通じない様な暗号文。

「おゝい、サラ」

書齋の整理に追われていたクロウが来た。

「ん？なあに、クロウ」

何とか理解しようと論文と睨みあうサラ。

「……何しとる」

「読書……」

「お前にわかるかねえ」

暫く沈黙の時間が流れるが……

「だああ！！読みにくいわよ、コレ！」

サラは匙を投げる様に論文を叩きつけた！

「そりゃ、まだまとめてない論文だ。まあ、まとめても分かりづら

い論文になるけど」

その論文を拾い上げ、元の箱にいれ直したクロウ。そして、その箱の中から別の論文を取り出し、サラに差し出した。

「風翔龍？」

その論文にはそう題名が記されている。

その論文を読み始めるサラ。

先程の論文とは違ってかわり、その生態や分布図やらが表にされていて、大衆向けにまとめられた。

「黒龍??」

その姿は、黒龍を縮小した様な感じ。

「ちと違うな……分類は、古龍種。最近になって沿岸部や雪山で発見されたんだ。その時に書士隊の一人が風を自在に使う事から風翔龍……そう名付けたんだ」

「こつちには来ない……よね？」

恐る恐るクロウに問いかけるサラ。

「さあ？彼らの事はつい最近になって、研究され始めたんだ。それに観測所によると、毎回移動しているから、来ない可能性がない訳じゃない」

他人事のように平然と話すクロウ。

「来たらどうするの？」

「その前にギルドへ要請する。村の奴じゃ力不足だろ」

サラは、ムツとした顔をする

「じゃあ、私が……」

「ダメだ」

サラの言葉を最後まで言わせず、言葉を遮るクロウ。

「……冗談よ」

「冗談で済むか……また騎士達に追われたら洒落にならない、だからダメだ」

クロウのその言葉に制止されたサラ。

「また明日話すよ……」

クロウは論文を取り上げ、書斎へと消えた。

第二十二話：大人の暇潰し

「何よ、冗談で言ったのに……」

居間にあるソファアーに足を投げ出し、転がっているサラのヘソは少し曲っていた。

「母さん……」

又ッ

「うわっ!?!?」

ソファアーに寝転がるサラの視界に、セレンが現れ、驚いた拍子にずり落ちたサラ。

「大丈夫?」

心配そうにセレンは、顔を覗かせている。

「いったぁ……どうしたの?」

ぶつめた頭を撫でながら起き上がるサラ。

「えっと……食器洗いが終わったから」

「いい子ねえ、ご苦労様」

涙目だが母親らしい笑顔で、サラはセレンの頭を撫でた……っが、右腕を押さえているセレンの行動が気になる。

「腕、痛いのか?」

サラが聞くと、セレンは腕を下ろし

「だ、大丈夫……おやすみなさい」

トトトトッ

聞かれたら困るかの様にセレンは、早足で寝室へと消えたのだった。

「変なセレン……」

セレンは寝室へ。せっかく帰って来たクロウも書斎へと籠ってしまい、孤立してしまったサラ。

ふと窓から見える夜空を眺めると、小さく輝く星が夜空を鮮やかに演出していたのだ。

「そうだ!!」

サラはソファアールから起き上がり、台所へ向かいマットで隠れている床の一部を外した。

その下には食材やら何やらが保存されている冷暗所。サラはそこに手をつ込んだ。

「えっと、アレは……あつた!」

その中から引つ張り出した大振りの瓶。

【厳選純米酒・龍の涙】

そして、棚の中から透明のガラスのコップを取り出し、ソファアールに再び座る。

キュポンツ!!

景気の良い音をたてながら開き……

トクトクトクツ

澄んだ液体が静かにコップへと注がれる。

「乾杯」

サラは、周りには聞こえない様に小さく囁き、注がれた酒をゆっくりと飲み干す。

米から作られたはずなのに、程よい香りが鼻を突き抜け、熟した果実の様に甘い。

「一人酒も中々いいものねえ……」

その後も酔いで頬を赤らめながら、一日の疲れを癒すサラであった。

第二十二話：大人の暇潰し（後書き）

第二十二話、いかがでしたか？

これからも精進して参ります。

では

第二十三話・苦痛の朝（前書き）

久々の更新です。

第二十三話、どろどろ

第二十三話：苦痛の朝

それまで空に浮かんでいた月は沈み、沈んでいた太陽がまた一日の始まりを告げる。

「ふああ……もう朝」

昨日と同じ位の時刻にセレンの目は自然に覚め、寝ぼけ眼を擦ろうとする。

「ビキイ！！」

「痛ッ！！」

今まで味わった事のない痛みが、セレンの右腕を襲う！

右腕を押さえたまま、体をくの字に折り曲げて痛みを堪えるセレン。だが、心臓から全身へと血液が送り出され、脈打つたびに痛みが激しくなっていく……

過剰に力を使った代償……

コレがセレンを苦しめる原因だ。

【治癒術】

今や閲覧禁止となった竜操術についての文献にはそう記されている。力が弱くとも軽い傷の治癒は朝飯前。例え深手であろうとも力を強くすれば、どうって事もない。しかし、それは訓練をした者のみ。

何の訓練をしていない者が使えば、激しい激痛を伴う危険な術だ……

「はっ……はあ……はあ」

痛みが引いた頃には、全身は冷や汗で濡れ、酷い倦怠感がセレンを襲う。その上、汗をかいたせいなのか、喉が砂漠のように渴ききっている。

「水う……」

なんとか寢床から這い出て、フラフラと台所へ向かうセレン。

数分後……

やっこの思いでリビングについたが、妙にソファ一付近が荒れている。そして、何よりも気になるのが……

「臭い……」

そう……前日にサラが冷暗所から引き出し、バカ飲みした酒のおか
げでリビング中に異臭が籠っているのだ。

スウ……スウ……スウ

その当人は、気持ち良さそうにソファ―に身を投げ出して眠ってい
る。

だが、セレンはそんな事を気にせずに水甕へと向かう。

水甕の前に着くと、左手で水甕の蓋を開け、傍に据え付けてある柄
杓を持ち上げた。

甕の中の水は澄んでいて、セレンの疲れた顔を鏡の様に写している。
ピチヨン……

蓋に溜まっていた一滴の露が、甕の中の水へと落ち、その顔を打ち
消すかの様に波紋が広がる。

そして、水甕の水を掬いとり右腕へ。

「冷たっ!!」

痙攣した右腕を伝う水は、キンキンに冷えきり、痛みを一時的に忘
れさせてくれる。

次に掬いとった水を口に運び、静かに飲み干す。カラカラに渴いた
喉が恵みの水で満ちていく……

「……大丈夫……」

痛みが完全に引いた訳はないが、自分にそう言い聞かせ、水甕の蓋
を閉めるセレンであった。

第二十四話：父親、クロウ（前書き）

どうぞ、お楽しみ下さい。

第二十四話：父親、クロウ

「体がダルい……」

右腕を押さえつけ、覚束ない足取りで自分の部屋へ戻ろうとするセレン。

「あ……疲れた……!!」

出会い頭に父親と遭遇したのだ。

ダルさで朦朧としたセレンの意識が、パツと繋ぎ止められる。

「おはよう、父さん」

セレンは、咄嗟に押さえていた左腕を外し、感づかれないように明るい声を出す。

「おはよう。早起きさんだな、セレン」

目元にくまを作りながら、セレンの頭を撫でるクロウ。

「ビキィ!!」

再び右腕に激痛がはしり、セレンは右腕を押さえつけた。

「どうした？腕が痛いのか？」

突然、セレンが右腕を押さえつけた行動にクロウは驚き、心配そうにセレンの顔を覗き込む。

「大丈夫、少し痛いだけ……」

脈打つたびに激痛が駆け巡り、今にも意識を失いかけている。しかし、心配させないためにも平静をセレンは保とうとしていた。

「大丈夫そうには見えないぞ！おいで」

クロウに引つ張られ、書齋に連れ込まれるセレン。クロウは、机の引き出しから白い錠剤の入った瓶を取り出し、その一粒をセレンの口に含ませた。

「口の中で砕くんだ……少しは楽になる」

ガリッ……

意を決して、その錠剤を噛み砕くセレン。

苦味が口に広がると思うセレンだが、不思議とその薬は苦くはなか

った。

体の中からダルさが流れ出す様に消え、右腕の痛みも収まったのだ

……

「良かったあ……大人用だから副作用が出ると思ったよ」

セレンが元気になった様子を見て、クロウはやっと安心した表情を浮かべる。

「痛く、ない…何で？」

「ははっ、それは秘密だよ。ひ・み・つ」

子供の様に人差し指をピンと立て、笑うクロウ。

「手、出してごらん？」

言われるがままに手を開くセレン。すると、クロウは10粒程入るような、小さな白いケースをセレンの手の平へ。

「コレは？」

「いつも父さんが持ち歩いている薬入れ。また我慢できなくなったら、飲むといい……でも飲みすぎるとダメだよ」

「は〜い」

そのケースを握りしめ、書齋を出ていくセレン。

「んう〜……何か忘れてるような」

セレンが書齋から出ていった後、クロウは何か忘れていた事に気付いた。

「何だっけ……えっと」

クロウの悪い癖は、肝心な事を忘れる所。

努力家とはいえ、しばしばこんな事があると、只の頼りないおっさんになる。

「まあ、いつか……その内に思い出ささ」

最も悪い所は……まあ、言うまでもないか……

第二十五話：クローウの心配（前書き）

どうぞ、お楽しみ下さい。

まだまだミジンコに毛の生えた放浪者ですが、

甘口、辛口な感想をお待ちしております。

返信は遅くなる事が多いかもしれませんが、

予めご理解を……

第二十五話：クロウの心配

クロウから薬入れを貰ったセレンは、部屋へと戻り、私服に着替え
ていた。

「今日は何処に行くのかな？」

先程の疲れは完全に忘れ、頭に音符を浮かべながら服を着るセレン。
昨日のトカゲからの襲撃、怪鳥の観察等から、少し汚れた白いノー
スリーブ、畑仕事の時に着る動き易い作業用の青いズボンに、茶色
の革で出来たポーチを腰に巻いていた。

見た目は、寝癖の残る長い金髪を除けば、村にいる少年と然程変わ
りはない。

「よし、着替え完了！」

それに……

「ふえっ!？」

ビタアアン!!

朝から床へダイブするようなドジな少年なんかいないだろう、ドジ
な少女ならいるけど……

「何だ?今の音……セレン、平気かあ」

朝から騒がしい音を聞いたクロウ。

「らいじょうぶう……」

何だか弱々しいセレンの返答。

「あつそう……じゃあ、良いか」

一方、セレンに薬入れを渡したクロウは、まだ寝ているサラを起こ
そうとしていた。

「サラ〜起きろ〜」

「zzzz……」

幸せそうに寝息をたててるサラ。

「ぐう、じゃなくて朝飯は？」

ビッ!??

「うおっ!?!」

突然、サラの腕だけが上がり、台所にある棚を指差した。要するにそこに朝食があるということだろう。

「起きてるなら口で言っつてよ……!」

ぶつくさ文句を言いながら、サラの指差した棚を覗き込むクロウ。

そこには、頑固パンがただ置いてあるだけ……

「……新手の嫌がらせか?」

ちなみに頑固パンは、名前の通りその外側が異常に固い。だが顎の強化にはなる。

「父さん、母さんは?」

棚の中の頑固パンを睨んでいるクロウは振り向く。畑仕事の時に近い身なりをしたセレンが立っていた。

「寝てるよ……どうしたんだい、畑でも行くのかい?」

パンを取り出し、台所の引き出しから取り出したナイフでパンを切り分けるクロウ。

「森へ友達と遊びに行くの!?!」

冷暗所から猛牛バターとマーマレードを取り出し、机に並べているセレンは言った。

「でも危ない所には行っちゃダメだよ」

パンを手渡し、心配そうな顔でセレンに忠告するクロウ。

「大丈夫。コウが守ってくれるよ!」

しかし、セレンは満面の笑みでクロウに答えた。この笑みを見て、クロウは一安心……

「それじゃあ……いただきます!」

「いただきます!」

柔らかいパンの表面にバターを塗り付け、ほんのり甘いマーマレードを重ねたパンにかぶりついた二人であった……

さあ、今日は何処へ行くのかな?

第二十六話・再び森へ（前書き）

それでは、お楽しみ下さい。

長くなるかもしれませんが……飽きずに読んでやって下さいな。

第二十六話：再び森へ

朝食が済んでから数分後、セレンは玄関で柔らかい革で出来た靴を履いていた。

「よし、準備完了!」

いざ森へと行くこととするセレン。

「ああ、セレン」

すると、クロウがセレンを呼び止め、あのオカリナを手渡した。

「御守り代わりになる。はい」

本来、白水晶は宝飾品として扱われる事が多いのだが、地方によっては魔除けとして使われる事もあるという。

「ありがとう。じゃあ、行って来ま〜す」

腰のポーチにオカリナを詰め込むと、セレンは森へと走り出した。

そんなセレンを送り出したクロウ。

「んう〜……セレンもそんな年頃か……」

ちなみにクロウは、セレンが森にデートへ行くと勘違いしているようだ……

ピー!!!

「鷹便か……」

鷹便がセレンと入れ違いに来た。足についている小さな筒を外し中の紙をみるクロウ。

「……ははっ、やつぱりな」

その紙をくしゃくしゃに丸めると、白衣のポケットにしまい、書斎へと姿を消した。

タツ、タツ、タツ、タツ

夜も明け、柔らかな陽光が木洩れ日となり林を照らしている。セレンは森へと続くその林道を駆けている。

「んっ?」

すると先から竜車が姿を見える。セレンは邪魔にならないよう端へと寄る。

ガラガラガラ……

草食竜に荷台を引かれ、煩い音を立てながらセレンの横を通り過ぎるはずなのだが、竜車は止まった。

「ねえ、ねえ、君！」

「ふえっ？」

その直後に若い男の声がセレンを止める。

その男の胴と腕には、昨日の鳥に似た色合いの防具が装着されていた。

「僕らこの先にあるヴォイド村を目指しているんだけどこの道かい？」

……コクリ

ただ無言に頷くセレン。

「ありがとう」

再び動き始める竜車。

「あっ！！言い忘れたけど、森には行っちゃダメだよ。怖い飛竜がいるから」

荷台から上半身を乗り出して、大声で叫ぶ青年。

「引っ越してきた人？」

首を30°程傾けて、セレンは考える……

「まあ、いつか……コウが待ってるし」

何かが頭に引っかかるのだが、セレンはその竜車を背に再び駆け出したのだった。

第二十七話：コウの好きな場所……

「えっと……あつた、あつた！」

セレンは何時しかあの場所に着いていた。

コウと初めてあつたあの場所に……

「コウ！お待たせ！」

森に向かって叫ぶセレン。だが、返事が返って来ない……

「コウ……！」

『……奥ニイル、ソノママ入レ』

遅れて返って来たコウの返事。セレンは周りを気にせず奥へと進む。そして、木々が薙ぎ倒された場所にコウはいたのだ。

「いるなら返事しなさいよ！」

若干、ヘソを曲げているセレン。

スンツ……スンツ……

頻りにセレンの体を嗅ぎまわるコウ。

『セレン……？』

大きな瞳で体を見回しながらコウは言う。

「そうよ……どうかしたの？」

『一瞬、誰カト思ツタ……』

ホツと溜め息を着いたコウ。どうやら、セレンが誰なのかわからなかったようだ……

「あはっ、綺麗すぎたかしら」

クルリと回り、自分の体を見るセレン。

コウは呆れて物が言えない様子。

ズンツ……

その巨軀を持ち上げるコウ。

コウの体が持ち上がる事で、薙ぎ倒された木々は踏みつけられ、辺りの木々の葉が何枚か、振動で落ちる。

『サア、今日八何処へ行コウカ……』

首を屈め、セレンの顔を見つめるコウ。

「コウの好きな所!!」

カブツ、ヒョイツ!

「きゃっ!!」

服を噛まれ、背中に乗せられるセレンだが、着地に失敗し、短い悲鳴を上げた。

『ナラ早く行カネバ見エヌ…シツカリ、ツカマツテイロヨ』

文句を言う暇を作らせないコウ。セレンは文句を言いたいのが山々だが、捕まりやすい甲殻を見つけてしがみついた。

ザアアアアア!

コウの力強い羽ばたきにより、周りの木々達の葉を舞い上がらせる。すると、コウが身を屈めた。セレンの腕に力が入る……

ドオオオオオン!!

爆音にも似たような音と共にコウの体は、朝日の照らす天空へと舞い上がった。

何度も力強く翼を羽ばたかせるコウ。上昇気流を掴んでもまだ羽ばたく。見る間もなく地上との距離が離れていく……

ポフウン!!

空に浮かんでいた雲に突っ込むコウ。厚い雲なのか視界が悪い。

「つくしゅん!!……寒っ」

上空が想像以上に冷えているため、くしゃみが出るセレン。

『コノ上ハモツト冷エテイル…平気カ?』

念を押す様に問いかけるコウ。

「多分……我慢する」

『ソウカ……』

震えながらもセレンは必死にしがみつく。

『モウジキダ!!』

……ポフンツ

遂に厚い雲から抜け出した!!

『着イタゾ……』

第二十八話：空の海……

『寒クナイカ？』

雲から抜け出したコウは、その厚い雲の上で静かに翼を広げていた……なぜなら、コウは上昇気流を掴み、もう羽ばたかせなくとも、自然と上昇するのだから……

「……平気」

雲の上は地上と比べ、かなり気温が低い。コウのような飛竜は、体が鱗に覆われているためあまり気にはならないのだが、セレンは人の子だ。

『見エルゾ……』

セレンは、コウの視線の先に集中する……

薄暗かった雲が少しずつ明るくなっていき、太陽が顔を覗かせた時だった！！

「わぁ……」

寒さを忘れ、その光景を目に焼き付けているセレン……そのあまりの美しさに誰もが心を奪われる景色。

『雲海ダ……』

【雲海】遙か昔、天に最も近いと呼ばれた山に登った詩人が見た目からそう名付けたそうだ。

名前の通り、雲は優雅に天に横たわり、まるで海原の様に時折波打っている。

『戦イデ疲レタ時ニコレヲ見ルト、何故力心ガ安ラグ。故ニ我八好キダ……』

鼻を高くして、セレンに問いかけるコウ。

「……」

だが、セレンから返事はない。

ピトッ…ピトッ

すると、水滴の様な物が、甲殻に落ちた感触をコウは感じた。

『セレ、ン?』

「ごめん……凄く綺麗だったから」

顔を伝った涙を腕で拭いとり、セレンは答えた……

『何故……泣クノダ』

泣く理由がわからず、コウは首を傾げる。

「綺麗だからよ……すつごく」

コウの問いかけに笑って答えるセレン。

『綺麗ダカラ、カ……フツ、人ノ感情トイウノハ全クワカランモノ
ダナ』

涙で視界がボヤけていて、ハッキリとはしないが、一瞬……ほんの
一瞬だけ、コウの顔が笑った様にセレンは見えた。

「ふえ、つくしゅん!!!!!!」

静かな雲の海原に響くセレンのくしゃみ。

『サア、降リルゾ……』

「もう少しだけ……ねっ?」

両手を合わせてコウに話しかけるセレン。

『ナラン……病ニナルト我が困ル』

少しづつ高度を下げ始めるコウ。

「あたしは元気だ……つくしゅん!!」

『フツ……ソウ言ウナラバ、鼻ニ下ツテイル物ヲドウニカスルンダナ』

コウが笑う様に話す。

「ふえっ!?!」

セレンは慌てて鼻を触ると、大きな鼻水が垂れていたのだ! ああ、
何てはしたくない姿……

「むうっ……」

恥ずかしさ、悔しさ半々な思いでセレンは頬を膨らます。だが、そ
んな姿も数秒後には雲の中に入って見えなくなってしまった。

第二十九話：竜は空で丸くなる……

コオオオオ

再び厚い雲の中を飛行するコウ。

行きと違って帰りは、うつすらと雲の中に光が指し込んで、雲海とは別の幻想的な世界が広がっている。

『セレン』

「……何？」

今日は珍しくコウから話しかけてきた。

『行く場所がナイナラ、我方決メテモ構ワナイカ？』

「コウの行きたい場所？」

『アア……会ワセタイ龍ガイルンダ』

「会わせたい龍？」

いつもの様に疑問符を浮かべるセレン。

『我ノ……唯一ノ相談相手ダ』

「んうくと、何て名前なの？」

『老爺……我ハソウ呼バセテモラツテル。我ノ父親ノ様ナ龍ダ』

そう言うと、何処か遠くを見つめる様な顔をするコウ。どうやら会うのは久々らしい。

「何処にいるの？」

セレンは老爺の容姿を想像して、胸を高鳴らせている……何せコウの父親代わりだから……

『今ハ南東ノ大地デ昼寝シテルサ』

面白いのか声のトーンが上がるコウ。

「じゃあ、行こうよ！！老爺の所に！！あたしも会ってみたい！！」
グンツ！！

コウが進路を変え、一気に加速した！！

『老爺ガコンナ我ヲ見タラ驚クダロウナ』

「どうしてええ」

突然の加速に対応しそこねたセレンは、コウの大きな背中を這いつくばっている。

『人嫌イノ我が、人トイルカラサ』

「つて、その前に落ちるうう!!」

最早、セレンはしがみつくのが精一杯：

『アア！スマヌ！嬉シサノアマリニ、セレンノ状態ヲ氣ニシテナカ
ツタ……』

そう言つて、速度を落とすコウ。

「怖かつたあ……落ちたらどうするの!!」

『無論、拾イニ行ク』

コウは、鼻息をフンツと吹き出す。

「落ちてからじゃ遅いの!!」

キイイイイン!!

『ノワツ!?!』

セレンの甲高い叫び声が朝の空に響く。

「ごめんなさいは？」

謝罪の言葉を待っているセレン。

『ス……ゴメ、ンナサイ』

渋々と謝罪の言葉を言うコウ……

飛竜が人……しかも子供に謝る姿はあまりにも滑稽だ。いや普通はあり得ないだろ……

「わかればよろしい……」

満足したセレンは改めて座り直す。

『……（飛竜ノ恥ダ……）』

「何か言つたあ？」

『!?!……何モ言ツテハオラン』

「あつそう……」

コウは心の中で呟いたつもりだったが、セレンは何か感づいたようだ……

『ハア……』

もう余計な事は隠せないな……そんな思いを抱き、コウは老爺のいる方角へと飛行する。

そんな彼を一日を告げる朝日は、優しく照らして慰めたのだった……

…

第三十話・クロウご乱心（前書き）

今日は此処までです。

べじぞ、お楽しみ下さい。

第三十話：クロウご乱心

カリカリカリカリ……

所変わって、ここはクロウの書斎。

今は論文をまとめるべく、クロウは羽ペンを右手にひたすら動かしている。

ピタッ……

だが急にクロウの腕が止まる。

すると、自分の目の前にある書きかけの論文を手に取り、一気に丸めてしまうクロウ。

ベリベリベリバリ

丸まった物を力の限りに引き裂いて

「腹立つううう！！！！！」

パラパラパラ

自家製紙吹雪の出来上がり……って、本人はソレが論文なのかわかってるのか？

彼が勢い良く書斎を出ると、ばら蒔いた論文の破片達も書斎前の廊下に落ちる。

そして、台所。

ガチャン……ガチャン

彼もまたサラ同様に冷暗所で何かを探している。まあ、大抵探し物は想像つくが……

「あつた」

彼が取り出したのは小振りのウイスキー！

ガリッ！

金属で出来た栓を開けると、無謀にもそれをラツパ飲みする！

「ケヘッ！ゲホッ、ゲホッ！」

ちなみにクロウは酒にあまり強くはない。

「あらあゝ、貴方にしては珍しいわね……」

先程まで爆睡していたサラが起きた。

「たまには良いだろ、ケホッ！」

余程きつかったのか咳き込むクロウ。またそれを流し込もうとする……

ヒョイツ

サラに酒瓶を取り上げられた！

「こらっ、返せ！」

それを取り返そうと、クロウは躍起になるが、紙一重で避けられてしまう。

「ダメよ。そんな気持で飲んじゃ、美味しいお酒も不味くなるわよ」

まだ酔いが残っているのか、頬を赤くして笑うサラ。

「そこに座ってなさい。グラス用意するからさ」

あれだけ昨夜飲んだはずなのだが、サラはそれを感じさせない様な軽い足取りだ。

「わかったよ……」

渋々と食卓に座るクロウ。

酒瓶を持ったサラは、棚から大きめのグラスを取り出し、また冷暗所から何かを取り出した……透明な水晶の球体？

カラーン

約6cm程の球体が心地いい音を奏でる。

「お待たせ」

その球体が入ったグラスをクロウに渡す。

「何だ、コレ？」

「何って……水晶石よ」

ケロツとした顔で答えるサラ。

「大丈夫よ、食用に削られた物だから」

トクトクツ

それにウイスキーを注ぐサラ。それと共に薄い茶色で満たされていくグラス……

「綺麗だなあ……」

そのグラスにクロウは見とれてしまう。

「お酒を飲む時はね、五感で楽しむ……これが最高のよ」
そう呟きグラスを突き出すサラ。

「乾杯」

クロウもまたグラスを突き出す。

「乾、杯……」

第三十一話：除席通知書

セレンが森に出かけてから二時間が経とうとしていた……

いつ以来だろうか……

夫婦二人きりでこんな酒盛りをしたのは。

カラ〜ン、カラ……

クロウの頭の中でそんな疑問が浮かんでいた頃、グラスの中にあつた酒が無い。

「久々ね。こう、二人きりで飲むの」

クロウと同じ様な事を考えていたサラ。

「暇な時がないからな、俺が……」

「ククッ……」

手で口元を押さえて笑いを堪えるサラ。

「何がおかしい」

「だって、貴方が俺っていうと合わないんだもの、ククッ……アハハハハッ」

遂に笑いを堪える事ができなくなり、口を開けてサラは大笑いをする。

「だからって、そこまで笑うなよ……」

トクトクッ

空になったグラスに酒を注ぐクロウ。

「あつ、言い忘れたけど……セレンが朝早く森に行ったぞ」

「ええ！？ 止めなかったの!?!」

食卓の机に乗り出して叫ぶサラ。

「うわっ!?! 何かコウって子がいるから平気かな?っと思ったからさあ……」

「コウ?聞いた事ないわよ、そんな名前」

「まあ、楽しそうな顔だったから、そこまで心配しなくても……」

クロウはグラスを傾け、酒をちまちまと流し込む。

「昨日の話、聞いてなかったの!？」

驚いた様な声を出すサラ。

「えっ……昨日の話って、何？」

「言っただじゃない!一昨日辺りに森で飛竜が出たって!」

「ご、ごめん……全く記憶にない」

クロウは申し訳なさそうに肩を縮ませる。

「学者ならもっとしっかりしなさい!」

「ひい!」

酔いのせいなのか、サラの頭からは二本の角が生えている様に見えるクロウ。

コン、コン……

小さなノック音。

「誰だろ?僕が見てくるよ」

「あっ、こら!!逃げるなあ!!」

クロウは逃げる様にドアへと向かう。

ガチャッ

ドアを開けると郵便用の鞆を下げている黒猫が立っていた。

「クロウ・テイラー博士に郵便だにゃ」

そして蟻で封のされてる手紙を渡された。

「ご、苦勞様……」

その表にはこう記されていた。

【飛竜種生態調査学会】

この学会は飛竜学に関しての研究者の集まりであり、飛竜学を学ぶ者は誰もが憧れる場所。

パリッ

すでに凝固している薄い蟻が剥がされ、書類……いや通知書を取り出した。

【この度の貴殿の学会での失言に対し、我々学会は誠に遺憾に思っている。君が……】

只でさえ学会の要人から嫌われていたのだから、この先は読まなくとも理解できる。

「無期限の除席、か……」

第三十二話：理由

正直、処分内容が分かっていたとはいえ、クロウの元気は下降気味

……
「はぁ……」

ため息しか出ないクロウ。

「あなた宛の手紙だった？」

「うわっ!？」

クロウが放心状態だったのか、サラが近付いていた事に気付かず、短い悲鳴を上げる。

その驚いた拍子に通知書が落ちてしまった!!

「……学会からの手紙？」

「返せっ!！」

クロウは急いで取り返そうとするが、紙一重で避けられてしまう。

「あれ？お互い隠し事は無し、でしょ？」

「無しって言ってもそれは……ああ!？」

ばつが悪そうにしているクロウをよそ目に通知書を開くサラ。

この時、クロウは一秒が、こんなにも長いものだとは思わなかった

……

「ちょっと、クロウ!!学会から永久追放処分って、どういう事よ!！」

アルコール入りのサラは、声を荒げてクロウに詰め寄る。

「いやっ、だから……えっと」

何とか退路を考えているクロウだが、時間が経てば経つほど、彼女の怒りに油をかけるだけだ……

「クロウ!！」

これ以上時間稼ぎすると、身の安全すら危ういと感じたクロウは観念した。

「話すから……座っててくれないか？」

「逃げたら承知しないわよ……」

真っ直ぐなクロウの瞳を見るサラ。

「大丈夫。逃げないよ」

クロウは口元に笑みを作ると、自分の書齋へと姿を消した……

片付けたとはいえ、相変わらず山脈を連ねている書類達。

学会で認められた仲間達の論文。

クロウ自身が書き記した過去の論文。

「出来れば触れたくなかったな……」

埃を被っていた幾つかの論文を退けて取り出したのは、赤字で【閲覧禁止】と記された数冊の本。

「あの薬も、だな……」

それらの本を抱えて、机の隠し扉から取り出した物……

そう、セレンに渡した錠剤の薬瓶。

もう薬の量もそう多くはない。

「そろそろ仕入れ時かな？」

その瓶を白衣のポケットに突っ込み、書齋を出たクロウ。

その瞳の先には、自分の秘密、隠し事を全て話しても良いと決めた愛妻サラの姿。

「お待たせ……」

片付いた食卓の机に書物と薬瓶を置く。

「話す前に聞くけど、今から話す事、全てが極秘だ。仮にバレたらギルドが動く」

今までにない真剣な顔で話すクロウ。

「……消されるって事ね」

黙ってクロウは頷く。

「ありがとう。あたしとセレンの事、気遣って……」

そのクロウの口から信じられない言葉が飛び出す。

「そのセレンの事だ……あの子が危ない」

サラは一瞬耳を疑った。

「……嘘でしょ」

第三十三話：南東の大地

その頃、セレン達は南東の大地に着々と近付いていた。鬱蒼とした森の広がる村周辺の景色とは一変し、なだらかな平原が広がる外の世界。

コウは距離をとって飛んでいたが、その途中でで目にした幾つかの街、小さくなつた道行く人々。

その時のセレンといつたら、瞳は好奇心で満ち溢れていて、コウの呼びかけにも気付かない程……

「……………」

はしやぎ疲れたのか、大人しくなつたセレン。

「ひ……………つくしゅん!!」

大粒の鼻水を飛ばすセレン。

『ヤハリ風邪デモヒイタノカ?』

くしゃみをしたセレンを心配するコウ。

「誰かが噂してるのよ、平気。コウは大丈夫なの?」

『何故?』

「だって、休まないで飛んでるし……………」

セレンが心配する事にも理由がある。なぜならコウは、この二時間、一度も降りずに飛び続けているからだ。

『我八平気ダ。コノ位ノ距離ハ、イツモ飛ンデイルシ、風モ掴ンデイル』

「一番飛んだ時は?」

セレンの次なる質問。

「ムウ……………大陸ノ端カラ端マデダナ」

「??????」

大陸の端から端まで……………そう言われてもあまり分からないセレン。

『ハハツ、セレンニハ難シスギタナ』

いつもより多く疑問符を浮かべてるセレンを思い、コウは小さく笑う。

「遠かった？」

「遠イヨウデ遠クナイ……我自身モヨクワカラナイ」

「んう……」

小さな脳味噌をフル稼働させるのだが、最早何が何を意味する事すら分からない。

『難シイ話ハヤメニシヨウ。モウスグ、南東ノ大地ノ入り口ダ……』
飛行する事、約二時間。

なだらかな平原は此処いらで終わり、目下には広大な森林地帯が広がり、遙か先に大小の山々が姿を現した。

「これが老爺のいる所……」

『マダマダ入り口ダ、ヒトマズ降りヨウ』

段々と高度を低くするコウ。すると首を頻りに回して、何かを探している。

「何、探してるの？」

『湖ダ……久々ダカラ覚エテナイ』

湖……父親が前に話してくれた。

父親曰く、大きな水溜まりらしい。（無論、クロウが分かりやすく説明したもの）

「何か暑い……」

セレンの体から汗が滲み出始めた。

山の夏に慣れているセレンにとって、平原の夏は暑い、おまけに此処は南東。

『アツタゾ』

コウの言葉に反応し、前方を見るセレン。

「……わあっ」

四方を森で囲まれ、水面は照り付ける太陽光を乱反射させて輝いている大きな水溜まり……コレが湖。

そして、コウが高度を下けている間、セレンの口は閉じる事はなか

つ
た。

第三十四話：暫しの休憩

『セレン』

「……………」

湖の浅瀬付近に降りたコウ。

『聞こエテルノカ？』

「……………」

依然として、セレンから返事はない。

『????？』

柔軟な首を回してセレンを見るコウ。そのコウの瞳には、ただ目を輝かせ、開いた口を閉じていないセレンが映っている。

口をすぼめて一吹き。

「わっ！！」

突然の風に驚いたセレンは、そのまま地面に落下。何ともいえない悲鳴が上がる。

『ダ、大丈夫カ？』

足をゆっくりと退けて、コウはセレンを見つめる。

「ねえ……………遊んでもいい？」

『別二構ワンガ……………痛クナイノカ？』

いつもなら謝罪の言葉を述べさせられているのだが、今のセレンはそんな所ではないのだろう……………

「平気、平気い！！」

セレンは飛び起きると、湖の水際へ駆けて行った。

『……………サツサト用デモ足スカ』

すると、コウは器用に足を使って、土を掘りおこす。次に頭で少しずつ広げていくと、最終的に4m四方、深さ3m程の穴が完成。其処に尾を向けると……………

水と何が排泄される音。

『フウ……………』

気持ち良さそうに用を足し終えたコウは、掘り返した土で穴を塞ぎ踏み固める。

それを終えると、コウは巨体を揺らし、セレンの所へと向かった。

「あはっ！冷たくて気持ちいい！！」

靴を脱ぎ捨てて、はしゃぎ回るセレン。

『随分ト楽シソウダナ……』

頭に響くコウの声。

「だって、冷たくて気持ちが良いんだもの！！コウも入ろうよ！！」ズボンが水で、ずぶ濡れになりながら、満面の笑みを浮かべるセレン。

『生憎、ココ八魚竜ノ縄張りダ。アマリ長居スルト、奴ラガ怒ル……』

……

「……じゃあ、足だけは？」

泥だらけの足をセレンは指差す。

『又ウ……』

「ほら、早くう！！」

『足ダケダゾ』

ゆっくりと湖へと足を入れるコウ。

照り付ける太陽光で暖まった体を走り抜ける冷氣。確かに心地が良
い……

その心地良さ故に口が水面へと伸びる。

一回、二回、三回とコウの喉仏が動く。

それを見たセレンも手で水を掬いとり、喉へと流し込む。

「ぶはあ！！」『ゲフウ！！』

気持ち良さそうに顔を上げるコウとセレン。

「……くくっ、あはははは！！」

『フハハハハハ！！』

お互いが顔を見合わせて、大声で笑う……

何が可笑しいのかという理由もなく……

ただ、楽しいだけ……

お互いに傍に
いるだけで……
心が安らぐのだ……

第三十五話：老爺（ラオ爺）

『サア、老爺ノ所へ行クゾ』

「ええ、もう行くのお？」

不満気に声を出すセレン。

『アア……… 奴等毛痺レヲ切ラス頃ダ』

コウは、湖の方を見る。

「あつ………」

そのセレンの視界には、水面を動き回っている翠色の鱗が見える。

「あわわわ」

大急ぎでコウの背中に乗るセレン。それを確認し終えると、コウは再び大空へと舞い上がった。

「ありがとねえ！！」

湖に向かって叫ぶセレン。

『……… 何故、礼ノ言葉ヲ述ベル』

「母さんが、人の物を使ったら返す時にお礼を言わなきゃダメだつて、言つてた」

『又ウ……… 良ク分カラン』

山岳地帯の方へと進路をとったコウ。

『セレン』

「何？」

『……… 寝ルナヨ』

まるで信用してない様な声。

「大丈夫、寝ない……… と思うけど」

『ナラ落ち又様ニ掴ツテオケ』

「はい」

うつ伏せにしがみつくとセレン。上から照り付ける太陽光とコウの暖かい体、それを中和するかの様に前から吹いてくる風が妙に心地よい。

段々と重くなつていく暇。

セレンを優しく包み込む睡魔。

「ちょっと……一、休み」

そして、いつしか夢の中へ……

『ホラ、言ワンコツチャナイ……』

全く、世話のかかる人間だな……コウは、頭の中でそう思う。今ならバれないし……

『……オヤスミ、セレン』

そう小さく呟いたコウは、静かに飛ぶ。

その背中に小さな友達を乗せて……

数分後

山岳地帯を目指していた、コウの視界にある物が入る。

一見、只の森にある山にしか見えないのだが、ゆっくりと動いている。

『起キ口、セレン!!』

まだ気持ち良さそうに寝息を立てているセレン。

『仕方ナイカ……』

無理に起こす事を諦めたコウは、その動く山へと近付いていく。

『老爺!!』

歡喜の声を上げるコウ。

すると、山の動きが止まった。

『ンツ? 何ヤラ久シイ声ガ聞コエタ気ガ……儂モ年ダナ』

重々しい質の音が響き渡る。

『我ダ、老爺!!』

森の中からヌツと現れる長い首。そして、ゆっくりと空を見上げる。

『コウ……マア、儂ノ背中ニデモ止マレ』

年期の入った赤い甲殻に長年、知らぬ間に住み着いた緑色の苔達が共演した老爺の大きな背中。

その背中に着地するコウ。

『懐カシイ感触……元氣ソウデ安心シタ』

まだコウが幼かった頃、コウは老爺の背中で良く遊んだものだった。

『ナアニ、マダマダ死ニハセンヨ』

豪快に笑う老爺。

「んう……」

周りの騒がしさに気付き、セレンが起きたようだ。

第三十五話・老爺（ラオ爺）（後書き）

本日は此処までです。

段々、最新話まで近づいて参りました。

これからも暖かく見守ってやって下さい。
では

第三十六話：心を読む龍

《心を読む龍》

「なあに……もう着いたのお？」

たかが数分間寝ただけなのだが、セレンは眠たそうに目を擦っている。

『何ジャ？ オ主ニシテハ珍シイモノヲ連レテキタナ……』

コウよりも更に低い質の音が、辺りに響き、セレンの眠気が吹き飛ばぶ。

「誰っ!?!」

セレンは辺りを見回すのだが、コウの父親らしき姿は見えず、赤黒い棘の様な岩がちらほらとしか視界に入らない。

『ホツホツホ……オ前サンノ下ジャヨ』

「下あ!?!」

セレンは驚いた口調で、コウの背中から体を乗り出す。

「地面が喋ってるの？」

そのセレンの瞳には、赤黒い土の様な物に緑色の苔達が群れている姿しか見えない。

『コウヨ……コノ人ノ子ハ、イツモコンナ感ジナノカノオ?』

『……イヤ、イツモハモツト酷イ』

『ジャロウナ……ホツ、ホツ』

そんなセレンの姿を笑う二匹。

「笑うなあ!」

コウの背中をセレンは拳骨で乱打する。

『オイ！ 叩クデナイ!』

『全ク、コウハ変ワツタナ……サテ、ソロソロ自己紹介トヤラヲスルカノ。コレ以上、地面ト呼バレタクナインデナ』

セレンとコウの光景を見ていた老翁は、ゆっくりとその首を覗かせ

た。

セレンの瞳にうつる赤黒い鱗で覆われ、鼻から長い角が聳え立ち、何処かと憎めない顔の老爺の姿。

『儂が老爺ジャ、人ノ子ヨ』

「あつ……えっ？」

驚きを隠せず、あたふたと慌てるセレン。

『ドウシタ、セレン』

コウが心配そうに顔を覗かせている。

「だって、あたし達は、お山の上にいるんじゃないの？」

『コノ山自体ガ老爺ダ』

「……ええ！？」

数秒遅れて驚いたセレン。

「老爺つて、お山みたいに大きいんだあ……んっ？」

その大きさに驚いていたセレンが感じる視線。ふとその方向を見ると、人の頭以上ある様な老爺の瞳がセレンを捉えていた。

「何、どうしたの？」

『イヤ……チヨイト、才前サンノ心ヲ覗カセテモラッタノジャヨ』

「……心？」

またしても幼いセレンには難しい語句。

『左様。儂ハ相手ノ心ヲ読ム事ガ出来ルノジャ』

「それじゃあ、今のあたしはどんな感じなの？」

その老爺へ興味津々に話しかけるセレン。

『溢レル好奇心デ満タサレ、何モ澱ンダモノヲ知ラヌ心。ト言エバ』

良イカノ？』

「????？」

やはりセレンには難しすぎるようだ。

『老爺……モウ少シ分カリヤスク説明デキナイノカ？』

すかさずコウが入り込む。

『……ナラ儂ノ頭ニ連レテ来クレンカノ？』

『ムウ？』

その言葉にコウは疑問符を浮かべた。

第三十七話：心の中へ

『何故ナンダ、老爺』

コウは未だに老爺の言葉を飲み込めない様子。その背中にはセレンが乗っている。

『ソレハ、才前ト話シテイル姿カラ、直接、コノ子ノ心ニ儂ノ心ヲブツケタ方ガ早イト思ツタノジャ…………』

『ナルホド』

老爺の背中から離陸したコウは、老爺の顔のある地面へ、ゆっくりと舞い降りた。

『大きな顔…………』

大人二人を縦に並べても足りない様な老爺の顔面。その大きさに驚き、口をあぐりと開けるセレン。

『人ノ子ヨ…………儂ノ顔ニ、才主ノ頭ヲツケテクレンカノ？』

『んにゃ？』

獣人の様や声を上げたセレンは、静かにコウから降り、老爺の口元へと近付く。

口の隙間から吹き付ける息。

その度にセレンの髪はヒラヒラと揺れる。

そして、セレンは額を老爺の顔につけた。

『目ヲ閉ジテ、カヲ抜クノジャ』

『はい』

瞳を閉じ、全身の力を抜くセレン。

突如、その場を包み始める一陣の風。

『又ツ？』

その光景に驚くコウの声を最後にセレンの精神は光の中へと吸い込まれた。

『んっ…………此処は？』

目を開けると、そこにあるのは柔らかな陽光に包まれた様な世界。その所々には様々な色の水晶が浮かんでいた。

『此処八儂ノ心ノ中ジャ……………』

「ひゃっ!?!」

突然の声に驚くセレン。

「び、びつくりしたあ……………」

『ホツホ、スマンノオ……………ツデ、ドウジャ? 儂ノ心ノ中ハ』

「んう……………不思議な所」

右人差し指を頬にあて、セレンは答えた。

「ねえ、あの綺麗な玉は何?」

そう言つて、セレンは宙に浮かんでいる水晶を指差す。

『アレハ、儂ガ今マデ旅シタ地デ集メタ人ノ心ジャ』

「心?」

『左様。赤八怒リ、青八哀シミ、黄二八喜ビ、白八希望ガ入ッテオ
ル』

「へえ〜、黄色に触つてみても良い?」

『構ワンヨ』

「ありがとう!」

嬉しそうな声をあげると、セレンは黄色の水晶へ走り寄る。

柔らかな陽光を発している水晶の大きさは、丁度両手で抱え込める位だ。

それをそつと抱きしめるセレン。

輝きが一層増す水晶。

>あはっ、ウフフツ……………<

幸せそうな笑い声。祭りの音楽。様々な人の喜びが束となって、セレンの体の中に流れ込んでくる。

「あつたか〜い……………」

まるで春の太陽の下で寝ている様だ。

『喜ビ八正ノ気ジャカラナ……………』

「あっ……………」

抱きしめていた水晶が突如飛散した。

『彼等ノ思イガ天ニ昇ルノジヤ』

水晶の粒子となり、静かに昇っていく……

本当の安息につくために……

第三十八話：人の闇

天へ静かに昇っていく粒子を見守るセレン。そして、いつしかその粒子達は、天へと帰って行ったのだった……

「ねえ、老爺。あの後はどうなるの？」

『粉々ニ砕ケタ水晶ノ事カノ？』

セレンはゆっくりと首を縦に振る。

『天ニ昇リ永遠ノ安息ヲ得ルノジヤ』

「えいえん？」

『ワカリヤスク言エバ……ズツトジヤ』

ずっと……幼いセレンにソレがどの位長いのかは、あまり理解出来なかった。

ただ、老爺の言葉が何処か寂しく響いた。まるで二度と会えないの様に……

助……け、て

ふと頭に響く女性の声。

「うわっ!？」

その声に反応し振り返ると、其処には夜の闇よりも深く、海の底よりも暗い様な漆黒の水晶が浮いていたのだ。

『ソレニ八触ラナイ方ガ良イ……』

老爺が制止する様に話しかける。

「でも……助けてって」

『……』

黙ってしまった老爺。その漆黒の水晶は、未だセレンの近くをさま迷うかの様に浮いている。

「老、爺？」

『ソノ水晶ニ八人ノ闇ガ詰メ込マレテオル……触レレバ計リ知レナイ苦シミ、痛ミガ主ヲ襲ウ』

我々を……助け、て

頭に流れ込んで来る不自然な声。
自然と伸びてしまうセレンの腕。

『人ノ子ヨ、ヨセ!!』

老爺の忠告等、今のセレンには聞く耳持たず……

「あたしはセレン!!」

遂にセレンの腕が漆黒の水晶に触れてしまった。老爺の声が遠くなると共に自分を包み込む暗闇と冷気。

ギヤアアア!! 苦しい……誰かあ!!

頭に流れ込んでくる叫び声、他人へ助けを請う声。

「痛っ……」

突如、背中にはしる激痛。

ひい……ゆ、許しつぎゃああ!!

自分の目の前に許しを請う男性と騎士の服装をした人物が映し出され、セレンの目の前で斬り倒された。

助、け……

立ち尽くすセレンに助けを請う様にして絶命する男性。

「っ!!」

即座にその男から目をそらすセレンなのだが、振り向いた先には、焼け野原と化した村、そして……

「いやっ……」

その瞳に映された十字架に磔られた女、子供の死体。傍らにいる飛竜種を象った紋様をつけている騎士達の姿。

オマエモコッチニコイ。

セレンは逃げようとするが、体が動かない。そのセレンへ伸びてくる無数の腕。

「きゃああああ!!」

甲高い悲鳴と共に崩れゆく漆黒の世界。

崩れ去った世界の破片は、粒子となり、静かに天に昇っていった……

ありがとう。

震えるセレンに粒子達は語りかけた。

彼等なりの感謝を込めて……

第三十九話：人の闇・二

「はあ……はあ……」

痛みと恐怖で震えあがったセレンの体。ただそれと引換に漆黒の水晶は粒子となり、天に昇る事が出来た。

『大丈夫か？』

朦朧とする意識の中で聞こえる老翁の声。

「あたしは……平気」

『ハア……』

弱々しく答えたセレンに返ってきた返事は短いため息。それと同時にセレンは現実世界へと戻された。

体にはしる鈍い衝撃。

『ドウシタんだ、セレン！』

薄れた視界に心配そうな顔をしたコウの顔が映る。

「コウ？ 何、で……逆さなの？」

『セレンが倒レタんだ……』

冷や汗で濡れたセレンの顔を舐めるコウ。

「やだっ……くすぐりたい」

微妙に冷たいコウの舌を振り払おうと、セレンは試みるのだが、全身から力が抜けて、思うように力が出ない。

『チヨット待ッテロ』

舐めるのをやめたコウは、そう言い残し、その場から飛びたった。

「はっはっ……変なコウ」

そのコウらしくない行動に笑うセレンに老翁の顔が近付く。

『コウハ主ノ事ヲ心配シテオルノジャ』

「えへへ……大丈夫なのに」

ダルそうに体を起き上がらせるセレン。

『……人二八閻ガ必ズ存在スル。ソノ苦シミガ強ケレバ強イ程、閻ハ成長シ、人ヲ蝕ンデイクノジャ』

セレンが触れた人の闇について話す老爺。

「やみ、つて無くならないの？」

「人ガ人デアル限り無理ジャロウナ……」

「????」

またもや意味不明な言葉。

「主ニモイズレワカル時ガ来ル。主ガドンナニ拒絶シヨウトモ……」

「????」

何度聞いても分からない言葉ばかり。

「セレン！」

上空から聞こえてる羽音の中に混じるコウの声。地上に降りたコウの口には、夕焼け色の実が四つぶら下がった木の枝。

「何、それ……」

「我が良く食べテイル実ダ、体力ガツク」

木の枝を差し出され、その内の一つをセレンはむしり取る。

「……」

外見はトドブラリンゴに似ていて、両手で収まる大きめの木の実に、鬱蒼と茂る木々の木漏れ日で、淡く照らされている。

歯切りの良い音。

口の中で果肉が転がるや否や、外見からは想像出来ない様な酸味の風味が広がる。

「すっぱいいっ!!」

あまりのすっぱさに果肉を吐き出してしまふセレン。

「モツタイナイ」

コウも一つ舌で絡めとり、口の中に運んだ後、更にセレンが出してしまつた果肉に舌を伸ばし放り込んだ。

「だつてえ……」

平然と食べているコウをセレンは涙目で見つめている。そんな光景を夏の太陽は静かに見つめていた。

第四十話：動き出す齒車

「しゅっぱあいー!」

『我満シロ』

相変わらず、あまりの酸味に顔をしかめているセレン。コウも我満させて食べるようセレンに言い聞かせている。

『ホツホツホツ……』

常人から見れば、奇妙奇手烈な風景なのだが、老爺から見れば、それはまるで兄妹の様に映し出されている。

何処で道を踏み外したかは知らないが、こんな光景を古の民は、永久に続く事を望んでいたに違いない。

遙か昔よりこの世界を見つめ、放浪する事を天命付けられた老爺が、本当に見たかった光景。

動き、出す……

老爺の頭にだけ響く威厳のある女性の声。

『又ツ……』

首を高く上げ、天を見上げる老爺。

『ドウシタ、老爺』

「んっ?」

その奇妙な行動に疑問符を浮かべるコウとセレン。暫く天を見上げていた老爺が、静かに首を下ろす。

『今日八良イ天気ジャト思ツテナ……』

神はまだ無邪気な子供に何を求める……

神は時として残酷な運命を突きつける。老爺はソレが心配でならなかった。

「ねえ、老爺……」

『何ジャ?』

「老爺が今度、旅する時っていつなの?」
唐突なセレンの問い。

「……時が来レバ、儂八動き出ス」

「じゃあ、老爺に行く気がなかったら？」

「例エソノ気がナクトモ、儂八動き出スヨウ天カラ命ジラレテオル」
「断れないの？」

「そもそも天命を理解してないセレン。」

「天命ト言ツテノ……誰ニモ変エラレン」

「ただそれだけしか答えられない老爺。」

「ひたすら疑問符を浮かべているセレン。」

「主ニモイズレワカル……イズレ、ナ」

「あたしには」

「風に混じる木の枝が折れた微かな音。」

「体の細胞と積み重なった経験が警笛を鳴らし始める！」

「コウ！ セレンヲ連レテ、大地カラ離レルノジャ！」

「何故？」

「急に騒がしくなり、殺気を醸し出した老爺にコウは慌てて聞く。」

「人間ガ儂等ヲ観測シテイタヨウジャ……一生ノ不覚……！」

「大きな口で猛烈な歯ぎしりする老爺。」

「セレン！ 掴マレ！」

「ふえっ!？」

「突然の事に素つ屯狂な声を上げるセレン。」

「アア！ ジレットタイ！」

「無理矢理、セレンの服を噛み、自分の背中に乗せると再び天高く舞い上がるコウ。」

「どうしたのお!？ ねえ！」

「説明ハ後ダ！」

「今の状況を全く理解できず、しがみつく事しか出来ないセレン。
ただわかると言えば、コウが今まで以上に焦っているという事だ。」

「森で動く怪しき影。」

「今のは餓鬼、か？」

「一先ず、撤収だ」
運命の齒車は動き出した……

第四十一話：拒絶・一（前書き）

これが最新話です。

更新は遅いですが、暖かく見守ってやって下さい。では、ごきげん

第四十一話：拒絶・一

セレンとコウが南東の大地から離れている時。テイラー邸内は、時が凍り付いた様な静寂に包まれていた。

「そんな……信じられないっ！」

静寂を破るサラの声。

サラの座っている机の上には閲覧禁止、と烙印を捺された書物、論文の数々が連なり、錠剤が三分の一程入っている薬瓶が置かれている。

「サラ……分かつ」

「嫌よっ!!！」

クロウの言葉を遮る様なサラの罵声。

頭を抱えてうつ向いているサラ。

クロウは、その肩に手を置こうと試みるが、後一歩っという所で退いてしまった。

まだ新婚の頃に交わっていた約束を、クロウは最初から破っていたのだから……

そんな自分に彼女を慰める権利すらない。

「サラ……」

ただクロウは見つめる事しかできなかった。部屋に飾られている小さな人形のように……

そもそも、何故、そんな状況になってしまったのか……

それは、時を数時間程、遡る。

数時間前。

「そのセレンの事だ……あの子が危ない」

セレンが森へ出かけてから二時間が経とうとした頃、書斎から色々な書物を抱え、机に乗せたクロウの口から出た言葉。

「嘘でしょ？」

サラの顔からは血の気がひいている。

「嘘じゃない……」

「な、何で、あの子が危ないのっ?」

サラは驚きを隠せない。

「……あの子の特異な能力」

外見は至って普通の子供。しかし、一つだけ特異な能力をセレンは持っていたのだ。

「まさか！ 傷が治る……アレ?」

浅い傷なら立ち所に治療してしまう不思議な能力……治療術。

「それは、大陸中探せば何人も出てくる。私が言ってるは……滅びし古の秘術」

「竜操術……」

サラの口から自然と吐き出された言葉。

クロウは黙って頷くと、積み上げた論文の中から二組の論文を取り出した。

【竜操術の軍事転用】 【古の民の技術】

二組の論文はそう題名がふられているが、その題名の上から赤いインクで【閲覧禁止】と捺されている。

「何よ……コレ」

「ギルドの知り合いから譲り受けた……」

普通、論文という物は大衆へ向けて刷られる前に原本を王宮の審査会に送り、吟味され、許可がおりてから出版されるもの。

許可がおりなかった論文の大抵は、原本は学会に送り返される。しかし、閲覧禁止となると原本はギルドが押収。

機密書類を管理する中でも特に厳重な場所に保管され、大衆の前には姿を現さないはず。

だが、ソレが目の前にある。

「流れた……のね」

クロウは静かに頷いた。

第四十二話・拒絶・二（前書き）

ようやく出来ました。

それではどうぞ〜

第四十二話：拒絶・二

閲覧禁止となった論文が流れた。

ソレが意味するモノ……

「ギルド内部の人間が売ったのね……」

手元にある製本された論文を手にクロウを睨みつけるサラ。

「ああ……」

因みに閲覧禁止となった論文は、闇市場で法外な値段で取引される。その論文自体が学者によって記されたモノだから、仮説とはいえ、恐ろしい事件を引き起こす引金となる。

近年、闇市場で売られた論文が引き起こした事件の中には、飛竜種の体の一部を人間の体に移植され、犯人に拉致されたと思われる女性、子供を含む十六人の死亡が確認された凄惨な事件が記憶に新しい。

「何でコレとセレンが関係してるのよ」

「それは……」

言葉が詰まるクロウにサラは、睨みを更に効かす。

「私に古の民の血が流れているんだ」

クロウの一人称が変わる。ソレは同時にサラへ真実を突き付けるモノだった。

「……」

あまりの事に動揺を隠せないサラ。

それは無理もない。古の文献にしか記されおらず、現代は血を継承する者すらいないという【古の民の末裔】今では、その言葉自体が禁忌的存在となっている。

「正確には私の母方の家系が、古の民の末裔だったんだ。遙か昔に血は絶えたはずなのに今の今まで生き残っていた」

一息もつかずにクロウは話を続ける。

「その家系は、古の民の中で非常に強力な治癒術の血が流れていて

ね、時を経てでも廃れる事がなかったんだ」

絶えず脳内へ供給される情報。

「その論文を見る……それで何故、セレンが狙われる事になるのか
が記されている」

サラが手にしている論文を指差すクロウ。

サラは震えた手で論文を開こうと試みるが、冊子に触れてから、手
が動こうとしない。

「開けない……開きたくないっ」

頭の中では必死に情報を全否定している。しかし、手元にある論文
を開いてしまえば、全てが現実味を帯びてしまう。

溢れ落ちてしまう無数の涙。

「サラ……」

慰めようとクロウは手をさしのべるのだが、サラは受け入れずに振
り払う。

「クロウの嘘つきっ！ あの時、貴方が血で汚れたあたしにかけて
くれた言葉も最初から嘘だったのっ!？」

「あの時、サラに言った言葉は紛れもない真実だ信じ」

「嫌あ!！」

クロウの話す事全てを否定し、耳に入れない事で知る事を拒絶する
サラ。

クロウはこの彼女に何処か覚えがあった。

そう……悲しみという名の殻に閉じ籠った昔の彼女に……

第四十三話：拒絶・三

人には【殻】というモノが存在する。

他者からかかる極度の重圧、自ら犯した罪を責める事で生ずる自責の念、頼れる術も経たれ、最後に行き着くのが【殻】

自分にとって都合が悪い事、全てを拒否し、感情を押し込める最後の砦。

今のサラは此処に閉じ籠ってしまっただけ……

孤独な最後の砦に……

「なあ、サラ」

「……」

恐怖に怯える少女の様に震えるサラ。

「サラ……分かつ」

「嫌よっ!!」

そして、耳に入る事全てを否定し、拒否する事を繰り返す今の状況に至ったのだ。

自分が初めから約束を破っていた事は、確かに悪い。しかし、可愛い我が子の危機が迫っているのにも関わらず、この状況が続くのは悪い。

ただ自分は、サラの持っている心の闇、暗い過去を温かく包み込み、幸せという最高の処方箋を与え

いや……

それはただ自分の知られたくない秘密を隠すための行為。自分も幸せだという仮面を被り続ける事で、サラと同じ様に事実から目を反らしていたのかもしれない。

「いい加減にしろ……」

それはサラに対してだけでなく、今まで逃げ続けていた自分への言葉。

そんな自分への苛立ちはいつしか殺気と化し、気付かぬうちにクロウは、包まれた。

歯ぎしり。

握り締めた拳はわなわなと震え、食い込んだ爪により、赤い液体が机に滴り落ちる。

「クロウ」

ヒビが入る殻。

その異変に気付き、顔をクロウへと向けるのだが、啞然とするサラ。殺気。

拳を握り締め、肩が震えているクロウの体半分を覆っているどす黒く禍々しいモノ。

返り血の様に体へこびりついているのだが、着実にクロウの体を侵食している。

「クロウ？」

恐る恐る手を伸ばすサラ。

血の滴り落ちている腕を掴むと、クロウの顔が上がり、瞳と瞳が向き合った。

刹那。

反射的に掴んでいた手が離れ、何かのしかかる様な感覚に襲われるサラ。

「はぁ、はぁっ」

薄茶の色がかつたレンズ越しにも関わらず、呼吸さえも乱してしまふ人の物でない瞳。

「りゅう、がん……」

【竜眼】

大型飛竜種、古の民のみが持つと語り継がれ、見る者を畏怖させ、力で平伏させる瞳。

しかし、クロウの両目に刻み込まれた竜眼には、禍々しいナニかが渦巻いている。

「っ」

意識を失い、倒れるサラ。

倒れた衝撃で積み上げられていた書物も激しく落下し、その音と同時にクロウは我に返った。

「……サラ！」

第四十四話：剥がれた殻

「んっ……」

額に冷たい何かが乗せられると、ゆっくりと目を覚ますサラ。

「大丈夫？」

先程まで異様な殺気を放っていたクロウからは、殺気は消え去り、いつもの様に色眼鏡をかけている。

「……あっ」

そして、自分がソファーに寝かされている事を数秒遅れて理解した。すると、透明な水で満たされたグラスをサラに差し出すクロウ。顔は笑っているのに対して、瞳には憂いを漂わせている。それを黙って受け取り、静かに喉へと流し込むサラ。

「あの話はやめようか……」

そう呟くと、クロウは机に積み上げられた書物、薬瓶を片付け始める。

辺りを包み込む静寂。

「……」

少しだけ水の残ったグラスを持ち、片付け始めたクロウを虚ろな瞳で見つめるサラ。

その脳内で駆け巡る記憶。

今まで隠していた秘密。

古の民の末裔の血を継ぐ者、クロウ。

その後者により、導き出された遺産の事。

「よいしょ」

持って来た論文を胸に抱き抱え、書齋へ戻ろうとするクロウ。

血で汚れた自分を救い出し、どんなに迷惑をかけても、どんな些細な理由でさえ言う事を拒んでも、クロウはいつも優しく笑っていた。

更に遡る記憶。

【大丈夫。もう一人じゃないから…… 僕が全部…… 一緒に受け止めてあげるから】

人殺しが公的に許され、不浄なモノを肅清する組織、ギルドナイト。
通称：騎士。

ギルドに毒を盛られ、騎士達に体の至る所を引き裂かれた自分をク
ロウが、身を挺して守った時に呟いた言葉だ。

「クロウっ」

無意識のうちにクロウの名を呼ぶ。

「んっ、どうした？」

不思議そうな顔で体を捻り、クロウは振り向く。

【一緒に受け止めてあげるから】

頭の中で響く言葉。

「お願い……」

今までクロウに甘えて来た。

いつまでも甘えちゃ駄目。

なら今度はあたしが受け止める番。

「さっきの話、続けて」

意を決したサラ。

「良い、のかい？」

書齋から引き返して来たクロウが呟く。

サラは首を縦に振る。

抱擁。

「ありがとう……」

近付くや否やクロウは、ギョツとサラを抱擁する。ちょっと贅肉のついた胸板。

頼りなさそうに思えるが、それはサラの殻を壊すには充分過ぎる力を秘めている。

「クロウ？」

「ごめん……暫くこのままが良い」

離そうとしないクロウの肩が微動している。

そんなクロウの頭をサラは優しく撫でた。

子供をあやす様に優しく……

優しく……

第四十五話：真実（前書き）

長らくお待ち致しました。

これからはもう少し早く仕上げるよう精進して参ります。
それでは、どうぞっ

第四十五話：真実

「良いかい……話すよ」

身に纏っていた白衣の袖で顔を拭くと、再び論文を持ち出し並べるクロウ。

「ええ……」

静かに頷いたサラを確認し、年期の入った論文の一つを開いた。

『古の秘境と存在した文明』

著：ヴィクター・パジエス

そう題された表紙を捲ると、幾つかの地域がインクで囲まれた大陸全体の地図が現れた。

「これは、十数年前に出版禁止にされた論文だ…… この論文には、遙か昔に滅んだ古の民の秘境があったと言われた地域、そして、この著者が突き止めた古の民の技術が、ほんの一部だけ記載されているんだ……」

遙か昔、古ノ秘境二竜ト人ノ樂園アリ

古ノ民、コレヲ彼ノ地ト呼ブ

ソノ秘境ノ民『人ト竜ノ仲介者』也

地図の下に記載された古めかしい言葉。

「彼は王立書士隊に在隊していた時の知識、地位を利用し、大陸中を駆け回り、滅び去ったと言われていた文明の破片を見つけた」

王立書士隊とは、未発見の種を見つけるために各分野に精通している人物を集め、組織されたエリート集団の事だ。

すると、クロウはあるページを開き、サラの前へと差し出す。

「飛竜と、人？」

そのページには数枚の壁画が模写され、竜に乗った人々が空を駆け回る様子を描いた幻想的な壁画が大きく記されていた。

「そう……大陸南部の遺跡で発見された外界の民が、古の民を描いた壁画。最初にみたあの文もこの遺跡にあった古文書から解読されたモノさ」

次々に捲られるページ。

クロウの学者らしい解説。

その度に脳内へ放り込まれる記憶。

「一番見てほしいのはコレだ」

また一枚の壁画が大きく模写されている。

傷だらけになった竜に寄り添い、手を傷口に当てている人間。手からは太陽光の様な光の描写が傷口へと注がれている。

「コレが……」

論文を奪い、壁画の模写を凝視するサラ。

「そう……治療術だ」

クロウの言葉を聞き、サラは貪る様に目を通す。

先程とは違い、著者の考えがが異様に長く記されており、その仕組みまでもが推測されている。

【治療術とは、体内の気を治療力に変換し、照射する事により、細胞の治療能力に直接干渉する術である。使用すれば、どんな深い傷も癒える代物である。だが、術者によっては、使用した場合にかかる体への負荷が重く、術者自身が命を落とす危険性を伴い、軍事転用には……】

論文に目を通すサラの唇が震える。

「軍事、転用……」

確かにそう記されていた。

第四十六話：真実・二

何度読み直しても、そこには確かにそう記されていた。遙か昔より人間が利のみを追求し、繰り返してきた愚行。

「当時、国は他国家との外交関係が悪化していてね…… 彼はその事に目をつけ、その論文を著したんだらう。仮に国が興味を示せば、天文学的な額の研究資金と、それ相応の環境が与えられるからね」

「……」

最早、言葉などは出ない。

「当時の審査会もこの論文には驚いたと思うよ。なんたって、禁忌的存在であるはずの古の民の技術の軍事転用するのだからね……」

まあ、審査会の重鎮であった議長が断固として反対。出版禁止は勿論の事、原本をギルドに管理させ、著者であるパジェスを拘束。危険思想者として地下に幽閉する事で、この件を解決したんだっ」とすると、空になったグラスを手に取り、台所へ向かい、別のグラスと共に冷えた水を注ぎ足した。

「ねえ……クロウ……」

「どうした？」

突如発したサラの問いかけに、クロウは神妙な顔で振り向く。

「もし、仮にだよ……古の民の技術を軍事転用したら、どうなるの？」

「……幾つもの国が滅ぶだらうね」

その問いかけにクロウは、険しい表情を見せながら答える。

「っ!？」

「古の民達自身でさえ、自らの持つ技術、力に怯えていたんだ……」

外界より半世紀近く進歩した技術を投入するなんて、火器に短剣が挑むようなものさ」

机にグラスを置くと、並々と注がれた水が溢れ落ち、染みを作る。

「サラ。サラがまだ、私と出会う前にさっ……【鉄騎】って聞いた

事あるだろ？」

「鉄騎って……騎士と並んで、実力者達が集まった団体の事でしょう？」

騎士結成の数年後に設立され、騎士と並んで対にあるとされている、謎の多い団体。通称：鉄騎。

「その【鉄騎】はな……竜操術の軍事転用を目指している傭兵軍」

「ちょっと待ってっ！ 竜操術を軍事転用するって……飛竜種を兵器にする気なの!？」

クロウの言葉に割り込む様に貫くサラの怒号。

「すると言っても、今の彼らには飛竜種と言葉を介する事なんて出来ない!」

「でも、竜操術が出……つまさか!」

脳内が導き出した答え。

描き出される子供の姿。

「もし、セレンが見つければ騎士が動き出す……あの子には、普通の生活を与えてやりたい……大人の汚いモノから遠ざけたいんだ」

悲痛な叫びを唱えるクロウ。

「二人で守る……セレンを」

握り締められた拳に重なるサラの手。

歯車は回る。

定められた刻を刻みながら……

第四十七話：忍び寄る危険

セレンとコウが南東の大地を離れてから、どの位経ったのだろうか

……
『スマンナ、セレン』

漸く落ち着きを取り戻したコウの声が、セレンの頭に響く。

「ふい…… いきなりどうしちゃったの？」

急上昇、急加速、急旋回と、激しいコウの飛行にしがみつくと事で精一杯だったセレンは、冷や汗にまみれた顔を向ける。

『老爺ノ言ツテイタ通り、我等ノ姿ガ人間ニ觀察サレテイタノダ』

「あたし達以外にい ふえう」

体勢を立て直そうと、重い頭を上げたセレンを襲う強烈な目眩と不快感。

「うえつ、気持ち悪う……」

『返事ヲシナクテモ構ワンカラ、聞イテイロ。良イナ』

コウの背中で気持ち悪そうにしがみついているセレンに問いかけるコウ。セレンは青い顔色で、口元を押さえつつ、耳を傾ける。

『サツキモ言ツタ通り、アノ場ニハ我等以外二人間ガイタ…… 人間ハ定期的ニ、ハンターヲ雇ツテハ、老爺ノ觀察ヲサセテイタ。不幸ニモ今日ガ、ソノ日デアッタノダロウ』
ふと、セレンの脳に浮かぶ疑問。

何で、あんなに慌てないといけなかったの？

『人間ハ老爺ノ動キヲ氣ニシテイル。何故ナラ老爺ガ一度動キ出セバ、幾ツモノ街ヲ破壊スル厄災ト化スノダカラナ』

でも老爺は動かなかった。何で？

『ダガ今回ノ觀察デ奴等八重大ナ発見ヲシテシマッタ…… ソレ
ハ、飛竜トジャレアウ人ノ子』

もしかして……あたし？

『アマリノチカラユエニ滅ビシ竜操術…… ソノチカラサエアレバ、
飛竜ヲ平伏サセ、飛竜サエモ操リ兵器ニデキル…… 欲シイ、ソノ
子供ガ欲シイ、ト……』
前半はさっぱりわからないが、最後の言葉がセレンの背筋を凍らせ
る。

「……」

怖い。

しがみつく力が強くなるセレン。

『大丈夫ダ。南東ノ大地ト、セレンノ村ハ随分ト離レテイル』

「ホン、トに？」

『アア…… 迂濶ニ飛ビ回レンガナ』

安心させるようなコウの言葉にセレンは明るくなるが、釘をさすよ
うに言うと、表情が残念そうになる。

『ソウ暗イ顔ヲスルナ、セレン。暫ク我慢スレバ良イノダ』

「ええっ！」

母親に似て、我慢が苦手な顔をしかめるセレン。

『我慢ヲ覚エル良イ機会ダナ』

「ど、どうゆう意味よおっ！」

セレンは顔を赤くして、怒号を上げる。

『気が短イノモ直リソ』

「コオオオオオッ！！」

空で吠える少女を横目に日は傾き始めていた。喧しい少女の怒号、
長く聞いてもいたくないかの様に……

第四十八話：密談

セレンとコウが南東の大地を離れてから、一時間が経過しようとしていた頃……

街の外れにある荘厳な造りの屋敷には、飛竜生態学会理事長、騎士長、鉄騎の総帥が円卓に腰掛け、ただ沈黙を貫いていた。

「さてと……」

白い羽が添えられた赤い帽子を被った一人の騎士が立ち上がり、辺りを見渡す。

「ご多忙の中、お集まりいただき」

「さっさと始めろよ……」

身に纏っていた燕尾服のボタンをだらしなく開き、机に荒々しく足を乗せる鉄騎の総帥。

「おやおや、コレは礼儀と言うものですよ。あつ、教養の少ない傭兵様には些か難しいモノでしたかな？」

「んだあと？」

癪に障ったのか、総帥は鋭い眼光で騎士を睨みつける。

「集めておきながら、互いの揉め事は困りますな……騎士長殿」

騎士と鉄騎は昔から対立していると裏世界では有名だ。互いの目指す目標、思想の違いが主な対立原因だと考えられている。

現時点において、竜操術を持たない鉄騎に対して、挑発的な言動を吐き散らし、鉄騎からは嫌われている人物だ。

「これは失礼致しました、飛竜生態学会理事長様
総帥を横目に恭しく礼をする騎士長」

「では簡潔に申し上げます。先程、老山龍代理観測の依頼を受けていたハンター二名が、竜操術を使う子供を発見致しました」

暗がりの部屋に渦巻く微かな動揺。

「ほお…… まだ古の民がいるとはな」

「発見したと言えども、何かと虚言の多い荒くれ者どもの証言ですから、些か信じられませんかね……」

仄かに殺気の籠った冷たい眼光が、パイプを吹かす理事長を射抜く。「事実でなければ、その二名を消す事で済むはずだ。殺しは貴様等の十八番だろ？」

「我々も暇ではないので…… アレを」

側に待機していた別の騎士が、二人の前に差し出された一枚の誓約書。

「今回の件につきましては他言無用です。失礼ですが、その誓約書に署名を……」

「子供を見つけたらどうするのかね？」

早々と理事長は署名を済ませた。

「ちよつと実験をした後に身柄はどちらかへお譲り致します。鉄騎側にせよ学会側にせよ、メリットはありますよ」

署名を洩る鉄騎。

メリットがあるとは言え、対立関係にある騎士に貸しを作るのだから……

「ちっ」

総帥は殴り書きながら署名した。

人間とは欲の深い生き物である。

自らの利を第一に考える彼等にとって、生物は只の道具にしか過ぎないのだから……

それが例え幼い子供であつても……

第四十九話：偵察者

太陽は覚束ない足取りで歩み、水平線を目指して進んでいた。太陽が沈んでいくにつれ、辺りの景色は夕焼け色に塗り潰されていき、その隅では、まだかまだかと、夜の闇が出番を待っている。

「そろそろ着くでしょ？」

背中にしがみついていたセレンは、眼下に見える川を見て、コウに問いかける。

『アア……セレンハ、疲レテナイノカ？』

「全然疲れてな」

情けない胃の抗議音。

『セレンノ……鳴キ声カ？』

冗談半分でセレンを茶化すコウ。

「違っつ！ お腹が」

また胃からの直談判。

恥ずかしさのあまりに声が出ないセレン。更に茶化そうとしたコウも、早々と着陸の準備にとりかかっていた。

朝とは別の顔を見せる夕方の森。

燦々と太陽光を浴び、満足そうな木々達が、夕焼けの木漏れ日を引き込み、森を鮮やかに彩っている。

「……」

その中で一層、目を惹かせる者がいた。

乱雑に整えられた金髪。何処か哀愁を漂わせる表情。その頭部を除

き、淡いピンク色の甲殻で構成された防具を身に纏い、林道へ差し込む夕方の木漏れ日が、その鮮やかさを更に引き立てている。

「ゼン……直上から一匹降りて来るぞ」

その顔から似つかない様な強い口調。

仕事の時に邪魔ではないよう、短く整えられた赤銅色の髪。

全身を赤黒い甲殻、鱗で包まれた防具を纏い、左耳からは鈍い輝きを放つ水晶のピアスを下げた女性が【ゼン】と呼んだ男に近寄る。

「わかった……遭遇したらどうする？」

「着いた矢先から仕事なんて、俺は願ひ下げだ。お前もカツとなつて突っ込むなよ、自信家さん」

そう皮肉を言い放ち、その女性はさっさと先へ進んでいく。

「ふう……顔に似合わず可愛くな」

鈍痛。

「可愛くなくて失礼だったな……」

鼻から熱い物を垂らし、咄嗟に鼻を押さえたゼンは、漸く自分に石が投げられた事を理解した。

「っでえ……石を投げる事はないだろ、東方の剣士さん」

「ユウキだ、俺の名前は……」

【ユウキ】と名乗った女性は、鼻血を押さえるゼンを無視する。

その黒い瞳は直上から舞い降りようとする一匹の飛竜を静かに見据えていた。

第五十話：偵察者・二

夕焼けに染まった大空。

それに照らされ、淡い夕焼け色に彩られているコウの赤黒い鱗。

その巨体から巻き起こされる羽ばたきにより、木々達からは木の葉が自由を求めるかのように舞い上がっていく。

着地。

「御腹ぺこぺこ……」

コウの背中で低く唸っているセレン。

昼食抜きに、あの猛烈な酸味の効いた果実しか食べていないセレンの胃からは、今にも暴動を起こすような勢いの音が木霊している。

『声ヲ出スナ……』

「御腹の音は無理い……」

背中に乗っているセレンを隠すように、その巨大な翼を畳むコウ。

丸太のように太い首を目一杯伸ばし、辺りに感じる気配の元を辿っている。

一方、ゼンとユウキは、河原の対岸に生い茂る藪の中で、息を潜めていた。

「デかかったよな……」

「銀冠、いや金冠級の体長はあった……」

夕焼け色に染まり上がった天空から舞い降りた巨体に啞然とするゼン。

しかし、ユウキは村周辺の地図に小さく削った木炭で大きな丸を記していた。

「ちっ…… 双眼鏡でも見えねえな」

「此処の森は、ギルドからの情報よりも深いみたいだ。だから、あ

の巨体を隠すには都合が良い」

ゼンは自前の双眼鏡を片手に、ユウキはギルドから支給された小さなメモの束を片手に、何かを書いている。

「おい、さっきから何を」

枯れた枝を踏む微かな音。

「しまっ」

『其処カッ!!』

轟音。

対岸から放たれた灼熱の火球は、二人の隠れていた側の木に当たり、粉々に爆散。

その熱風が二人襲いかかる。

「くそっ……気付か」

「御前のせいだ、バカゼンツ……」

自分の犯したミスを誤魔化そうとするゼンをユウキは冷たく一喝し、直ぐ様その場から撤退する。

「て、てめえっ!」

ゼンもそれを追うかのように夕焼け色に染まった森へと姿を消した。

灰かに香る木の焼ける匂い。

「人？」

『ソレモハンター……面倒ダナ』

セレンの問いにコウは素早く答え、それと同時に難色を顔に滲ませる。

「コウも……狙われ」

『セレンハ心配シナクテイイ。安心シロ』

コウの静かな返答。

「う、うん……」

緊張のあまりに空腹がおさまったセレンは、コウに背中から降ろしてもらい、河原の方へ出ようとする。

「あのさあ、コウ」

昨日のように出る直前で止まるセレン。

辺りを見回すコウが首を向ける。

「何でもないっ、今日もありがとね」

そしてセレンは、まだ何か言い足りなさそうな顔で林を後にした。

第五十話：偵察者・二（後書き）

どうも、作者の放浪者です。

携帯小説で執筆中の作品ですが、やっと五十話までたどり着きました。

これからも頑張って参りますので、どうか完結まで見守ってやってください。

第五十一話：村の異変

その日、村に着いたセレンは、ある一つの異変に気付いた。

普段は物静かな風景に、次々と帰って来る村人、そして、家々から夕飯の支度を知らせる煙が煙突から出ているはず。

しかし、今日は軒先に出では、行き交うご近所同士が、何やら不安そうな顔で井戸端会議をしている。

「何かあつたのかなあ……」

その異様な風景を横目に自宅の道を駆けるセレン。

家に近づく度に脳へ滲み出す空腹感。

森でのアレで大人しかつたセレンのお腹も、運動により我慢が出来ないとばかりに啼いているのだ。

自然と速くなる足取り。

不思議な事にセレンの息は、家に着いても尚、上がらなかった。

「たっただいまあつ！」

慌ただしい音を奏でるちよつと古い玄関。

乱雑に脱ぎ捨てられる革のブーツ。

「手洗いなさあああいつ！ 直ぐ夕飯よ！」

「は〜いつ」

その音に負けじと声を張り上げる母親。

返事をしたセレンは、自室へ外した腰のポーチを投げ入れる。

間髪を入れずに、汗まみれの服も着替えもせず、いい加減に洗った手で夕飯の並ぶ食卓へと駆け込んだ。

「うわあ〜……美味しそうっ！」

駆け込んで来たセレンの視覚、嗅覚へほぼ同時に送り込まれる一般

的な夕飯。

しかし、空腹のセレンにはこの上ないご馳走であり、口元から垂れそうな涎を慌てて引き戻す。

「おかえり、セレン」

「……おかえり」

夕飯を前に涎を我慢するセレンをまた違和感が襲う。村人が不安そうな顔で話し合っている様子と、何処となく似たような……

悲鳴を上げる胃。

優先順位的一位が食事と認識されているセレンには、深く考えさせる思考など、コレっぽっちも持ち合わせていなかった。

「それじゃ……」

クロウが手を合わせると、サラもセレンも同じように手を合わせた。

「……いただきま〜すっ」「」

三者三様に箸が動く。

色々と会食擬が多く、行儀の良いクロウ。

ハンターの荒々しさが残るサラ。

空腹を満たすため、行儀もへったくりもなく、無我夢中に頬張るセレン。

いつもの食事風景に見える其処には、太陽が地平線へ沈んでいくと同時に現れる漆黒の夜が、少し欠けた月に照らされた様に少しだけ闇を落としていた。

いつしか夜は更けていく。

ある時は安息を与え、またある時は不安を与える深い夜の漆黒。

だが、人の闇は夜の漆黒より遙かに汚い。

夜空に宝石の様に輝く星も、見方を変えてしまえば、闇の中でっ

めく欲望なのだから……

第五十一話：村の異変（後書き）

お待たせいたしました。

第五十一話が無事に完成。

只でさえ鈍速なのに、執筆中の小説（携帯のメール自体）を誤って削除する等、作者のドジが重なり、読者の皆様には、大変長い間待たせていただき、申し訳ありませんでした。

九月以降になってしまいますと、私情により、また間が空いてしまいます。

完全に執筆停止ではないので、最後まで見守ってやって下さい。

第五十二話：村の異変・二

翌朝、未だ疲労困憊状態のセレンは、さながら東洋の菓子【饅頭】の様に丸まり、深い眠りに就いていた。

小鳥のさえずり。

熟睡中のセレンを起こすかの様に、窓辺に止まった小鳥がさえずりだす。

「んう……もう少しだけえ……」

その声に反応するように、饅頭がうごめき、籠った声が絞り出される。

静寂。

あっそと、呆れた様に小鳥は小さな翼を目一杯広げ、大空へと舞い上がる。

今日、生きている事を神に感謝の意を捧げるが如く。

また、この先も平和が続くよう願うが如く歌いだすために……

「……んにゅ？」

饅頭の中から頭だけを突き出すセレン。

その頭は寝癖のついた髪が無造作に跳ね上がり、寝相の悪さが伺える。

「ふああ……」

寝ぼけ眼に降り注ぐ朝陽に顔をしかめ、大きな欠伸を一つ……

「あゝあゝ あっ！！」

だいぶ昇ってしまった太陽を目にし、周囲を震わせるような声を上げ、急ぎ寢床から飛び起きるセレン。

騒音。

だが、朝からの騒々しい音に、母親サラからの怒号が珍しく飛んで来なかったのだ。

次に部屋の何処からか自分の櫛を発掘。盛大に跳ね上がった髪を解かした。

「ああ！ どうしよあつ……こんなに寝坊しちゃってえ……」
乱暴に解かす度に悲鳴を上げる櫛。

そんな事お構いなしに、脳内ではコウへの言い訳作り。

「……森には近付くな、と」
ふとセレンの耳に聞こえた父親クロウの声。

「そうだ。此処二、三日の辛抱だ……」
今度は何処かで聞いた事のある男の声。

抜き足、差し脚、忍び足。

櫛を片手に部屋の扉を開け、少しだけ顔を覗かせるセレン。
そこには、真剣な顔つきの両親と、村の若首長の姿があった。

「やっぱり、飛竜なんですか？」
母、サラの問いかけに若首長は静かに頷く。

「昨日来たハンター達が、飛竜の居場所を突き止めたんだ。コレが馬鹿デかいリオレウスと来たつ。だから」
「やれやれと言った様子で説明する若首長。」

刹那。

この時、セレンの頭にあるページが浮かんだ。クロウが帰って来る前、書斎に潜り込み、見た凶鑑。

小さな頭の中で大量の情報が飛び交う。

「コウ……」

握っていた櫛が力無く落ち、鈍い音を奏でる。その音に気づき、話をしていた三人が、振り向く。

「セレン……」

「おお、セレンちゃん。おは」

にこやかに笑う若首長の声。

しかし、声はセレンの耳に入る事はなく、ただ歪に歪んだ音が反響している様にしか聞こえなかった……

第五十三話：汝、誰がために走る

「セレン、若首長さんにご挨拶は？」

サラは櫛を落とし、固まっているセレンに声をかける。

脳内に駆け巡る想い。

「どうしたんだい？ 固まっちゃって」

目を丸くして、頬を掻く若首長。

「セレン？」

「ふえあっ!?!？」

心配そうにクロウがセレンに近付き、視線をあわせるようにしゃがんでいた。

クロウの声で我に帰ったセレンは、素っ頓狂な声を上げ、目を白黒させてる。

「まだ寝惚けちゃってるのかな？ さっ、若首長さんにご挨拶しようか」

頭をくしゃりと撫で、笑顔を見せるクロウ。

「おはよう……!?!?!」

コウの事が心配でたまらないセレンは、動揺を隠せず、ぎこちなさが香る挨拶。

「はい、おはようさん。それじゃ、他の村民に伝えるんで私はコレで…… セレンちゃんも悪い飛竜さんが退治されるまで、森に行ったらダメだからねっ」

「さて……二人とも、朝食よ」

いつもと変わらぬサラは、食卓へと向かう。

「……っ!?!」

「セレ いでっ!?!?!」

サラが玄関からいなくなったのを見計らったセレンは、傍にいたクロウを突き飛ばし、裸足のまま外へと飛び出した。突き飛ばしたクロウへの謝罪の言葉、剥き出しの地面を踏み出す度に来る痛みさえも、今のセレンには感じる事さえないだろう。

「コウ……コウ！」

道行く人々は、寝間着に裸足で駆け抜けるセレンを丸い目で見つめていた。

誰もソレを止めようとせず、驚きのあまりに声が出ないのだ……

「速くっ……はぁ、速くしないとっ」

そんなセレンを急かすように、森の香りを運ぶ風。その風の中には、灰かに生臭い血と鼻を突く火薬の臭いが混じっていた。

「何、今のお　ってクロウっ!？」

騒がしい音が聞こえ、疑問に思ったサラは、食卓から玄関へ来ると、尻餅をついているクロウを見て、驚きの声を上げた。

「セレンが外へ……いてっ……行き先は森だ……」

玄関を指差し、痛みに涙を浮かばせているクロウ。

また、サラの脳内には昨日の事が浮かび上がり、嫌な汗を滲ませている。

「セレン！」

気付けばサラも走り出していた。

大切な我が子を連れ戻すため……

大切な時間を共に歩むため……

もし、全能の神が存在するのなら、こんな時、こう問いかけるだろう……

『汝、誰がために走る』

第五十四話：汝、誰がために走る・二

「……………又？」

森で深い眠りについていたコウの意識が覚醒する。

「……………昨日ノ羽虫力……………」

ちよつとだけ不快な目覚めを振り払うかの様にコウは大欠伸をすると、その巨軀を重々しく動かし、身を屈めた。

「さてと……………」

「爆薬は、ちゃんと仕掛けたよな？」

腰に吊るしている特注の機械鎧に弾丸を詰めるゼン。だがユウキからは疑念の視線がたつぷり含まれた問いかけが、ゼンの耳をつづいている。

「おいおい、俺を信用……………」

「してるわけない」

即答され、項垂れるゼン。

「バツカじゃない……………」

呆れたようにユウキは小さく呟く。

だが、予想外な事にその口からは、普段のユウキ自身の声ではないような声。

幾ら自分が男と豪語していても、やはり女という本来の姿は隠せないようだ。

そんな微かな呟きを聞き逃さなかったゼンは、意外や意外といった様子でユウキを見ていた。

「……………何か用か？」

視線に気付いたユウキがゼンを見る。

「いや、やっぱり女だなあと思っ……………」

「次言つたら……潰すぞ」

静かな怒りを瞳に灯し、金的めがけて拳をめり込ませたコウキは、悶えているゼンを横目に、ヒップバックから取り出した地図を睨む。

「コオオオオツッ！」

一方、森の中を駆けていたセレンは、必死にコウの名を叫んでいた。「ひあっ!？」

小石につまづき、前傾姿勢で倒れてしまった。着ていた薄い寝間着は、転倒した際に破れ、柔らかな肌に地面が容赦なく牙を剥く。

「ひうつ……えう……」

泣きたい……

でも、コウが危ない……

急がないと……

膝と肘の鈍痛を噛み殺し、瞳から溢れ落ちる涙を拭い、再びセレンは駆け出した。

『セレンッ!』

ピンツと張られた緊張の糸の中で聞こえた微かな少女の声。考えるよりも先にコウの体が動き出した。

「出て来たぞ、ゼン！」

コウキは双剣を引き抜き、漸く痛みから解放されたゼンに怒号を飛ばす。

「のおおおりやあ！」

機械鎚の銃口を火竜に向け、一気に振り抜く寸前に、内蔵されているトリガーを引く。

轟音。

機械鎚から吐き出された無数の徹甲弾が林から飛び出したコウに食いつき、爆音と共にその上鱗と堅殻の一部を吹き飛ばす。

咆哮。

不意に放たれた攻撃にバランスを崩したコウは河原に不時着。着地と同時に無理矢理体勢を立て直すと、視線の先にいる二人のハインターへ雄叫びを上げた。

第五十五話：怒れる深紅の翼

自らの体に傷を追わせ、自らの行く手を阻む者、ハンター。

幼き日、両親を目の前で殺され、逃げ惑う力無き自分に刃が振るわれた忌々しい記憶。

未だにコウの脳内に焼き付いている光景は、染み付いた憎悪の心に刺激を与える。

『憎イ……憎イ、憎イ』

いつしかコウの瞳からは殺意が命を宿す。

大気を震わせる咆哮。

それは、天を駆ける猛々しい覇者。人に命の象徴と崇められ、恐れられた姿であろう。

轟。

空気に触れるだけで燃焼する可燃物質が充満した体内器官、爆炎袋。全てを焼き払う力を秘めたその獄炎は、吐き出す自らの喉をも焦がすほど。

まともに当たれば、命の灯火を吹き消す。

爆音。

水気のある河原に着弾した火球。

周囲の水分は一瞬で蒸発し、河原の石を粉々に粉碎させ、熱風が渦巻いている。

だが、着弾点には二人の姿はない。

『小賢シイッ！』

後方からの微かな気配を察知し、四つの突起がある尾を強く振り下ろす。

「ちっ」

双剣士持ち味の奇襲が失敗したユウキは、不安定な河原を強く蹴り、左翼部へ展開。

『甘イ!』

「!?!」

振り下ろした尾をそのまま時計回りに薙ぎ払うと、有ろう事か、河原を深く抉り、土砂諸ともユウキへ襲いかかる。

しかし、盾など持ち合わせていないユウキは、双剣を構えると、大剣の要領で一気に双剣を振り下ろした。

「破っ!」

凄まじい剣圧により引き裂かれる大気。

鼬の様に素早く駆け抜け、鎌の如く触れる物を引き裂くその現象を人は鎌鼬と呼んだ。

斬。

しかし、超近距離仕様なのか、コウまで風の刃は届かず、土砂を縦に引き裂いただけ。

振り下ろした双剣は、地面に当たり、火花を散らす。

「糞……」

火球の射程圏内で晒された膨大な隙。

無論、この隙を逃すはずがなく、無防備なユウキへ火球が襲いかかる。

「伏せてな」

「うお!」

声と共にユウキの直ぐ傍で風が斬られ、初弾は火球と相殺し爆散。

更にその後方から続く四発の弾丸は、自ら形状を崩し、十六発の小型爆弾をコウへと叩き込む。

直撃。

火球を発射し終えたばかりのコウは、分裂した小型爆弾を何の術もなく受けてしまい、悲痛な叫びを上げる。

だが、無数の炸裂音は、その声をも掻き消し、血と肉の焦げる臭いを辺り一面に撒き散らす。

「危ねえ」

「文句は後だ」

ユウキの抗議をゼンは途中で退ける。

彼、いや彼女の文句を聞いていたら、命の灯火が消えてしまいそうだから……

第五十五話：怒れる深紅の翼（後書き）

どうも。作者の放浪者です。

更新が遅く、読者の方々には大変ご迷惑をかけていて、申し訳ないです。

完結までお付き合いさせていただきたいのですが、一つご連絡を……見ての通り、戦闘描写が皆無に近かった作品ですが、最後に進むにつれて、戦闘描写、暴力的表現を使用するやもしれません。つきましては、十月に『残酷な表現』の警告をつけますので、ご理解のほどをよろしく願います。

また、作者が受験のため、更新が更に遅くなりますので、読者の皆様、どうか気長に更新を待っていただけたら幸いです。

第五十六話：怒れる深紅の翼・二

「どう行く？」

刃こぼれした双剣を構え、赤黒い雄火竜の甲殻で制作した防具に身を包むユウキ。

「俺達がいるのは河原。しかも山の中腹辺りに位置するため、石の大きさはまばらで不安定。下半身が強い俺でも、不利だな……」

それと対照的に他大陸の香りを纏わせる桃怪鳥の甲殻から制作された明るい防具のゼン。

その手に構えられた機械鎚からは、先程の連続発砲により、膨大な熱を纏わせている。その周辺は、膨大な熱量を語る陽炎の如く揺れている。

「……まだアレ撃てるのか？」

「短時間にあれだけ撃ったから、暫く排熱しねえと、機械鎚がお釈迦になっちまう」

咆哮。

二人の会話を遮断するような雄叫び。

「ちっ、林まで退くぞっ！」

鼓膜を強震させる咆哮を我慢しつつ、林へと後退し始めるユウキ。

「俺に命令するなつつの！」

腰のポーチから手投げ弾を取り出し、安全装置を外すと火竜の眼前へ放り投げるゼン。

破裂音。

地面に落ちる寸前に手投げ弾が破裂し、眩い閃光が辺りを白く塗り

潰す。

調査難度D・閃光玉。

材料：光蟲、素材玉。

森に多く生息し、絶命時に眩い閃光を放つ光蟲を、少量の火薬の入った素材玉の中に仕掛けた手投げ弾。

光蟲は、体を覆う甲殻が非常に柔らかい。

そのため慎重に捕獲しなければ、逆に閃光を浴びる事も度々ある。

それ故に、光蟲を仮死状態にして詰める作業は慣れるまでが大変である。

余談だが、地方の狩人養成学校では、入学試験の中に閃光玉の製作が採用されている。

閃光玉の発生させる閃光は、辺りを白く塗り潰す程。その閃光が晴れるまで一秒の時間を必要とする。

だがユウキは、何か違和感を感じた。

それを意味するかのように、第六感の警笛がけたましく打ち鳴らされる。

「ゼンツ！ 逃げ」

轟っ。

白く塗り潰された世界を貫く紅蓮の火球。

目を隠したとはいえ、瞼の上からでもわかる程の閃光をより近くで浴びたゼンは、視界の回復がユウキより若干遅い。

若干といっても一秒を六十分割したうちの半分。ほんの一瞬というこの時間差も、ハンター達にとっては、いわば死の世界の入口。

「ちっ」

爆音。

火球は反応が遅れたゼンを飲み込むと爆散し、ゼンの体を紙細工のように後方へ吹き飛ばした。

雄叫び。

自らの前に平伏した者を見下すその雄叫びは、森一帯を恐怖に陥れた。

コレこそが、覇者の姿也、と……

第五十七話：怒れる深紅の翼・三

火球に直撃し、紙切れの如く吹き飛ばされたゼン。

「ゼンっ！」

「ふう……マジに危なかった……っ」

慌てて近づくユウキを横目に、耐火性に富んだ桃怪鳥の防具を黒焦げにしつつ、いつものように軽い口を叩くゼン。

しかし、その左小手は肘まで粉々に吹き飛んでおり、剥き出しになった皮膚が痛々しくただれていた。

「無茶しやがって……」

ユウキはゼンの横に目を落とす。

それは火球の直撃に耐えたものの、一部が変形、破損し、武器としては到底使い物にならない機械鎧の勇姿。

鈍い地響き。

確実に仕留めるためなのか、一步……また一步と距離を詰めてくる飛竜。手負いとなったゼンが逃げるのは難しい。

「ぐっ……来やがったか」

回復薬で満たされた小瓶の栓を抜き、力無くぶら下がっている右腕に振りかけ、顔をしかめつつも二本目の小瓶を胃へと流し込む。

何故なら飛竜の火球は質が悪く、その炎は徐々に体内を蝕んでいくため、迅速な応急処置を必要とするからだ。

だが、無情にも飛竜は火球の発射体勢へと移行していたのだった。

「!？」

「ちっ、万事休すか……」

応急処置を施したものの思うように動かない体に舌打ちをし、覚悟を決めたゼン。

「ダメええええっ!!」

蒼天に響き渡る少女の声。

「なっ、子供!?!」

「昨日の子供じゃねえか……」

二人の動揺を横目に、村から続く林道から飛び出した少女が、更に河原へと駆ける。

「はぁ……はぁ……」

その小さな体で巨大な飛竜に近づく少女。

息は上がり、その身に纏っている寝間着は泥で汚れ、所々破れた部分からは血が滲んでいる。

「ちっ、間に合えっ!」

少女を助けるべく双剣を引き抜くユウキ。

だが、その動きも直ぐに止まった。

飛竜の前で仁王立ちする少女。

まるで飛竜を庇うように立っている少女の瞳には、少女のモノとは思えない何かが灯っている。

「……」

必死に自分を守ろうとするセレン。

その姿に半ばコウは感心していた。

だが、この場でセレンを連れて行けば、更に騒ぎが拡大するだろう。セレンへの被害を最小限にすべく、コウは痛みを噛み締め、深紅の翼を広げた。

『セレン、暫シノ別レダ』

「えっ?」

突然のコウの言葉に驚くセレン。

慌ててコウの体を掴もうとするが、巨大な深紅の翼が羽ばたく事で発生する風圧により、近づく事さえ出来ない。

『次ノ満月ノ夜、コノ河原ニ立ツテイロ。迎エニ行ク』
何処か憂いを秘めたその言葉を最後に、コウはその場から飛び去った。

「あ、ああ……コオオオオツ！！！」

悲しげに天へと木霊す少女の叫びを、仄かに熱を帯びた焦げ臭い火球の臭いと共に一陣の風が吹き消した。

第五十八話：セレン、倒れる

「いやあ……やだよお」

コウの飛び去った方向に手を伸ばしながら、覚束ない足取りで歩くセレン。その瞳は涙で満ち、頬を静かに濡らしている。

「あ、れ……」

こもった熱が体を包み込むと共に、ぐにやりと混ざり合う視界。歩く度に意識が段々遠くなっていく感覚に、セレンは違和感を覚える。手の甲を額に当て、汗を拭おうとしたその時、セレンの目の前は暗転した。

「つて……子供がぶつ倒れたぞ！」

「んなの分かつてる！」

九死に一生を得た二人は、目の前で起こった出来事を一先ず置き、ユウキは倒れた子供へ駆け寄り、ゼンは懐から取り出した信号弾を打ち上げる。

「おい、しつかりしろ！」

ぐったりとした子供を抱き上げると、ユウキは、直ぐ様その異変に気付いた。

「裸足で此処まで……それにこの熱」

土と血のこびりついた子供の裸足。体から発せられる高熱。

「菌でも入ったのか……」

ユウキがヒップバックを漁り、取り出したのは淡い黄色の液体で満たされた小瓶。

中身は一般的に活力剤と呼ばれ、服用する事で体内の細胞を活性化させ、体力の回復を促す薬剤だ。

それを自分の口に含み、子供の口へ直接流し込む、所謂口移しを行うユウキ。

微かに動く喉。

少しでも飲みさえすれば、自然と身体の回復能力は向上する。しかし、コレはあくまでも応急処置。

質の悪い細菌は、知らず知らず体を蝕む。故に医師の適切な治療を行わなければ、安心は出来ない。

ハンターの世界においても、傷口の消毒、治療を行わなかったために命を落とす馬鹿もいるのだから。

子供を抱き上げ、単独で村へと戻ろうとした時だった。

「セレエエエッ！」

子供と同じように林から飛び出す一人の女性。見た目は三十代半ば。ちよつと汚れたエプロン姿に、鈍い光沢を持ったその金髪は、後ろを銀色の簪で一つに結わえられ、さながら団子……と言いたい所だが、走って来たために髪型は崩れ、銀色の簪が虚しく顔を出している。

「親、だな」

ぐったりとしている子供の顔と女性の顔を見比べるユウキ。

「セレン！」

抱き抱えられている子供に気付き、駆け寄る女性。抱き抱えていたユウキは、その母親にそつと子供を渡す。

「とりあえず、応急処置は施した。もうすぐ荷台を持った獣人の一団が来るから。その一台を村へ急がせよう」

だが、その母親の口からは、思わぬ言葉が出たのだった。

「……獣人なんか待つてられない。私が運びます」

第五十九話：セレン、倒れる・二

「はっ？」

一瞬、ユウキは自分の耳を疑った。

地図上、この場所から村までの距離はそう遠くはないが、近くもない。

しかも、それを走って来た直後にまた走るといふのだから尚更だ。

「応急処置を施していただいてありがとうございます。でも獣人を待つより、私が走った方が早いので……」

そう言うなり子供を背負う母親。

「ちよっ、ちよっとおんた！」

時間を争うはずなのに駆け出そうとする母親に手を伸ばし、止めようとするが、その手は空を掴んだ感触しかなかった。

啞然。

三十代半ばとは思えないような身軽さ。

不安定な河原を平然と走りのけ、子供への振動を最小限に抑えている。

その身軽さは、偉駄天の如し。

「なんつー母親だ……」

開いた口を漸く閉じたユウキ。

ふと、放っておいたゼンの方を向くと、ゼンもまた口をあぐりと開けていた。

その顔が不細工と罵られる毒怪鳥ゲリヨスの顔を彷彿させるため、思わず吹き出してしまった。

「て、てめえ！ 何、笑ってやがる！」

「いや、別にっ。あは、ははははっ」

先程までの殺伐とした空気、緊迫していた空気を打ち砕くようなユ

ウキの笑い声。

その笑い声に怒るゼン。

「あははっ、ふふっ」

どうやらユウキの笑いはツボに入ってしまった、笑いを止める事は出来ない。

むきになるゼンには可哀想だが、止まるまで待つしかないだろう。

「だああ！ だから何がおかし」

車輪の回る喧しい音。

「到着にやつ」

獣人達のひく荷車の音が、ゼンの罵声を掻き消す。

この獣人達は、地域ごとにギルドが派遣し、動く事のできなくなつたハンター達を簡易テントの張られた拠点へ運ぶ事を仕事としている。

無論、運ばれるには契約金の三分の一を支払う事になるので、三回出た所で依頼は失敗と見なされる。まあ、簡単に言えばちよつとした監視役だ。

因みにそれらはマタタビ購入資金となる。

「おみやあら！ マタタビ百個分を運ぶにゃ！」

「……あいにゃああ！」「」「」

マタタビという言葉に目を輝かせ、何やら喚き散らすゼンなどお構いなしに乗せる獣人達。

そして、獣人達とその荷物は土埃を撒き散らしながら林道へと姿を消したのだった。

「さて、俺も帰るか……」

少し刃先の欠けてしまった双剣を鞘に収めると、自分もまた帰路に

就くユウキ。

小さなため息。

だが、彼の頭から今朝の出来事が離れそうにはなかった。

第六十話：その手は何がためにあるか

「早く……早く……」

全身の力を足に集め、地を蹴るサラ。

背負った我が子の体温は上がるばかり……

休憩無しで駆け続けるサラ。

その心臓は、今世紀最大ともいえる心拍数を打ち立てている。

ただ殺戮と快楽に明け暮れた狩人時代。

優しさ、笑いというものには疎遠な毎日。

どうしようもなく、騎士の肅正により、歴史の闇へ葬られるはずだった自分を救ってくれた夫のクロウ。

狩人の世界から離れ、彼との生活で取り戻した『人の感情』

そして、夫婦の契りを結び、腹を痛めて授かった子のセレン。

新たな命を抱き締める事で芽生えた『母』という新たな自分と、渦巻く不安。

『血で汚れた自分が子供を抱いても良いの……かな』

心の奥底で何度も自分に投げ掛けた疑問。

いつもは助言してくれたクロウも、この時ばかりは何も言わなかった。

その時の意味が、漸く分かった気がした。学者である彼の性格を考えれば、きつとこう言ったはずだ。

『じゃあ、その手は何のためにあるのかい？』

そう……その手は愛する人を護るため、そして、大切な子供を抱き締めるためにあるのだ。

罪という永久に消える事のない十字架。

確かにそれを忘れてはならない。

だから、その罪を背負いながら、自分は生きる事、それが、今の自分に出来るせめてもの贖罪なのだ。

「ちっ……」
血の臭いに惹かれたのか、前方に現れた三頭の小型肉食竜ランポス。口からは涎を垂れ流し、目の前に迫り来る晚餐を待ち構えている。回り道すれば、奴等の餌になるだけだ

獯猛な威嚇。

牙を剥き出し前進する二頭。

「……」

長年、心の奥底に封じていた殺気。今一度だけ……我が子を護るため、出せる限りの声にのせ、その呪縛を解き放った！

「邪魔だあああつ！」

森に響く怒号。

全盛期には飛竜さえも怯える程、と称されたその睨み。全盛期には劣るものの、その睨みは未だ健在。猛者に対しては、頗る肝っ玉の小さいランポス。その迫力と恐怖に負け、二頭は踵を返して林へと逃げ帰ってしまった。

甲高い鳴き声。

仲間が逃げ帰っても尚、サラの前に立ち塞がる最後の二頭。恐ろしくとも、久々の獲物を目の前に逃さぬ一心で、その照準を首に定めた！

「ああああつ！」

鈍音。

腹部への強烈な打撃。

人の皮膚より頑強な鱗で覆われ、威力はある程度軽減するはず。だがその拳は鱗を砕き、倍近くある体を軽々と浮かせたのだった。

第六十一話：その手は何がためにあるか・二

腹部への衝撃で強制的に吐き出され、宙を舞う血の混じった内容物。

回転する世界。

しかし、それも数秒後には痛みも感じる事なく闇で閉ざされた。それは、走馬灯さえ映し出す事を許しはしなかった。

「つう……」

生身で鱗を殴ったせいで、砕けた鱗の一部が柔らかい肌に突き刺さり、赤々とした血の雫が地を濡らす。

すぐにも引き抜きたい衝動に駆られるが、今はそんな暇などない。痛み、不快さを噛み殺し、村への道を一気に駆け抜けた。

全身から吹き出す汗。

限界を越え、悲鳴を上げる心臓。

刹那に可能な限り酸素を吸収し、熱と共に排気する肺。

体力の限界を訴え続ける体。

「つくう……」

歪む視界に映る物体は、その体へ鞭を打たせ、最後の力を振り絞らせた。

「つー！」

村の入口にある竜を模した一対のトーテムポール。

その傍を駆け抜け、中心部にある診療所へラストスパートをかける。一陣の風の如く駆け抜けるサラへ、ただ事ではないような視線を向ける村人。

人口の少ない村ゆえに、その顔は見慣れた者も多い。

轟音。

村に一つしかない診療所の扉を荒々しく開け放つサラ。

「すみませんっ！ 子供が、子供が……」

中で順番を待っていた親子、世間話をしにきた老人達の視線がサラに集まる。

「はあ……はあ……」

既に限界寸前状態の足を引き摺り、遂にはへその場に座り込んでしまった。

「せ、先生！」

漸く我に帰り、受付の看護師は奥へとすつとび、若医者を引っ張って来た。

「急患ですか！ つて、こりや酷い…… すぐに傷口の洗浄、奥に運んで！ それと奥さんに水っ」

「は、はい！」

雑菌が入り、炎症を起こしているセレンの足を見るや否や、素早く看護師に指示を与える若医者。

看護師に抱き抱えられ、運ばれるセレン。

「さあ、貴女の腕も治療しますから」

「あの子は……セレ、ンは……」

既に立つ体力すらないサラへ手を差し伸べる若医者。しかし、その前にサラの両手が若医者の肩を掴み、我が子の安否を案じている。

「此方も最善の処置を尽くします。奥さんもよく頑張られました」

「お願い……します、あの子を」

にこやかに答える若医者。それでも尚、有る限りの力、声を振り絞るサラ。

「大丈夫ですか！ おいつ！ 一階の空き病室開け」

急に遠退く意識を必死に繋ぎ止めようとするものの、それは叶う事なく、その場で意識を失った。

第六十二話：迫る黒鋼の悪魔

その同時刻、ヴォイド村から北に数百キロ離れた山岳地帯は、異質な平穏に包まれていた。

全ての生物は何かを恐れるように息を潜め、木々達の囁きさえも聞こえない。

森の一角に横たわる一つの物体。

それは天空の覇者として知られる雄火竜に並び、陸の女王として君臨する雌火竜の見るも無惨な姿。

腸は引き摺り出され、左翼部は有らぬ方向にねじ曲がり、原型を留めている翼爪が、辛うじてその猛々しさを遺しているだけだ。

咀嚼音。

その静寂を破る生々しい音。

さながら、鴉のように死骸に喰らいつく一匹の龍。

天を射抜かんばかりに猛々しく生えた二本の鋭角。その全身を包む黒き鋼の鱗は、森の淡い木漏れ日に反射し、鈍く輝いている。

『何、処……ダア……』

血と唾液の混じった赤黒い粘液が、不気味な音を奏でながら地を濡らす。

刹那。

怪しい光を放つ金色の瞳と共にその地域の空を包むように広がる暗雲。

『生ケル者ヲ怯エヨ……ソノ恐怖コソ余ノ蜜トナリ余ヲ潤スノダ』

咆哮。

その咆哮に共鳴するかの様に天は怒り狂いだし、稲妻は暗雲の中を駆け巡る。

天から大地へ吹き付ける豪雨。

雨に濡れたその漆黒の体は、天駆ける稲妻が放つ雷光により、鈍い輝きが増す。

その地域の様子を一機の気球が観察していた。

各地に研究拠点をもち、未だ謎が多い古龍を専門的に研究する王立特殊研究機関、通称・【古龍観測所】

彼らは、大型望遠鏡、試験段階でありながら、被写体を正確に写し出す撮影機等といった最新鋭の機材をこの気球に積み込み、各地に飛ばしては日々、古龍の生態解明に精を注いでいる。

「おやつさん！ もう無理っすよ！」

メーターやら、レバーの備わった操舵席に立つ青年は、大型望遠鏡を覗く初老の老人に声を張り上げる。

「無理も何も、御前さんの操舵技術次第じゃ……ああ、もうちっと近づけんかの？」

「奴の周囲は嵐並みの荒れ模様です！ これ以上近付けば、お釈迦になっちゃうですよ！」

随分と無理な注文をつける老人に、青年は顔をひきつらせている。

「……しょうがないのお。奴との距離を望遠限界域まで下げるのじや」

「了解っ！」

鈍い機械音。

レバーを押し込むと同時に作動するプロペラ。燃石炭を燃すのにも
関わらず排煙をしないのはまさに技術の結晶とも言えよう。

「……………」
段々と遠くなる彼との距離。

その景色を老人は険しい顔つきで見据えていた。

第六十三話・悪戯に母は笑う（前書き）

大分更新が滞ってしまい
申し訳ありませんでした。

第六十三話・悪戯に母は笑う

「んっ……」

目覚めたセレンは辺りを見回した。

暗がりにつつすらと見える白い壁と、パイプで組まれたベッドが四つ並んだ部屋。

「母さん？」

その隣の寝具には、母親であるサラの姿。

今は、遅いためなのか軒付きの煩い寝息が部屋に木霊している。

「あっ、お月様だ」

窓際に配置されたセレンの寝具からは、真ん丸に太り始めた月が天を指して昇っている様子が見えるのだ。

「臭い」

消毒液の臭いが満ちたような、病院独特な臭いについつい鼻をつまむセレン。

大の病院嫌いのセレンにとって、この臭いは試練に近い。

「うっ、く……」

寝具から起き上がろうとするが、両足にはしる鈍痛に起き上がる事さえままならない。

少しずつ、少しずつ布団を剥くと、セレンの両足には痛々しく巻かれた包帯が視界に入った。

「セレン、起きてるの？」

「にひゃ!？」

驚きのあまりに声が裏返し、振り返ると、サラがいつの間にか目を覚ましていたのだった。

「何が、にひゃよ……お化けを見たんじやあるまいし」

「だって、急に起きてきたんだもんっ」

未だ、ばくばくしている心臓を落ち着かせようとするセレン。

「セレンは三日も寝ていたんだもの。それにさ……」

「ふえ？」

コウが飛び去った記憶を最後に、既に三日も過ぎていたのだった。

「本当に良かったっ」

ゆっくりと寝具から起き上がり、目に涙を浮かばせて、セレンに歩み寄るサラ。

その右拳には、セレンの両足と同様に包帯が巻かれており、少しだけ血が滲んでいた。

「母さ

」
抱擁。

「もう、心配させちゃって……」

心配。その思いが感じとれるような力強い抱擁。小さくセレンは呟いた。

「母さん……苦しいっ」

謝罪の言葉をサラは期待していたようだが、思いもよらぬ言葉を前に、セレンの顔を胸元に埋めさせる。

「まずはごめんなさい、でしょ？」

「くるひい、くるひいつてばあ」

空いている両手で抗議するが、未だ筋肉質なその体は、まだ幼いセレンの手には些か固いようだった。

「ご、ごめんなふあい」

柔らかな感触から顔が抜け、漸く謝ったセレン。そんなセレンの瞳には……

「ふふっ、わかればよろしいっ」

悪戯に微笑むサラの顔が写っていたのだった。

「母さんの意地悪！」

「あらっ。母さんを心配させた罰よっ」

正しい事を言われ、返す言葉がなくなってしまうたセレンは、無理矢理、布団を被りこみ、小さく唸る事しかできなかった。

第六十四話：ギルドに住まう悪魔

竜操術を使う少女の報せから三日が経過しようとしていた。

「君達にしては仕事が遅いな」

小綺麗な書齋で書類に目を通しつつ、目の前で立つ部下に呟く。

「申し訳ありません、騎士長」

「まあ、良い……ギルドの資料科に確認はとれたのかな？」

書類を机の隅に置き、腕を組む騎士長。

「はい。発禁となり、押収した書籍の原本外部漏洩の件に関しましては、漏洩ルートを確認。持ち出したと思われる元騎士は、情報全と引き換えに免罪いたしました」

「なら彼は用済みだ。消せ」

深い闇を秘めた黒い瞳。

その冷酷な瞳で見つめられた部下は、背中に嫌な汗が浮かび出す感覚に襲われた。

「承知しました……」

「ふっ」

いつも以上に殺気に包まれた騎士長の書齋。毎度毎度、報告の度に命を縮める……と話す騎士も少なくない。

その書齋から、一刻も早く出たいと思いつつ、一礼し、扉のノブに手をかけるが、虫の報せというものが警鐘を打ち鳴らす。

「ああ、言い忘れた。君には特別な任務に就いてもらう」

嫌な予感とは的中するものだ。

「自分に、ですか？」

「そうだ。君は情報屋として街に赴き、この情報を売るのだよ【ギルドが竜に乗った子供に関しての情報を欲しがっている】とな」

街の裏世界には、ギルドの騎士と同様に暗躍する情報屋という者がいる。

彼ら独自の方法で、古龍観測所より早く発見した古龍の情報。学者に高値で売れる古文書の埋まる遺跡の情報。

果てにはギルドから漏洩した情報等といった、金になるネタを多く握っている情報屋。

表世界で生きる意味を見失った彼らは、自らの命を危険に晒す事で、裏の世界に身を落とすのだ。

「……しかし、他言は無用と約束なされたのでは」

「たかがガキ一人見つけるのに時間を割きたくないのよね」

「し、承知しました」

部下の正論など気にもせず、氷のように冷えた目で薄笑いを浮かべた。

それに怖じ気づいた部下は、逃げるように書斎から飛び出してしまった。

「それにしても……」

机の精巧な仕掛けにより現れた一枚の紙。

「実に興味深い、実に……」

そう……権力を持った人間は、その力に自惚れ、やがて道を外す。

歴史の闇に葬られた古文書。

一見、古びた一枚の紙は、今の彼にとって、輝かしい地位、黄金より価値を秘めたものなのだ。

何故なら、それは神に最も近くなる禁忌術が記された背徳の古文書であるのだから……

第六十五話：父の温もり（前書き）

どうも。一ヶ月以上更新が停滞してしまい申し訳ないです。
勉強の合間に書くと、ものすごく執筆が遅くなります……
ああ……時間が欲しい、今日この頃。

《放浪者よりお知らせ》

今まで、一話1000文字ちょいで、話を区切っていましたが、此方のサイトでは、今後繋げて投稿致します。

多少、文章に違いがあるかもしれませんが、其処の所はご勘弁を……
…（いずれ修正しますかね……）

第六十五話：父の温もり

その翌朝、入院しているセレンを見舞いに父のクロウがやってきた。

「元気になったな、セレン」

果物の盛られた籠を手に持ちながら、その枕元にある小さな机にそれを置くクロウ。

「そういえば、母さんは？」

「朝起きたら……いなかっ、たっ」

医者 of 許可を得て、病院に泊まっているはずのサラを探すクロウ。

だが、セレンが朝起きた時には忽然と姿を消していた。

その事を伝えようと起き上がるが、足の鋭い痛みで顔をしかめるセレン。

「まだ動いちゃ駄目だよ、ほら」

頭を二、三度撫で、セレンの体を支えつつ、クロウはベッドへ寝かしつける。

「あっ、そういえば、面白いモノを拾ったんだ……」

「面白い、モノ？」

何かを思い出したかのように白衣のポケットをまさぐるクロウ。

「一昨日、家の風呂場に落ちててね」

そのポケットから現れた真新しい鱗。

「クロウからもらったあの鱗だ。」

「っ！？」

「……やっぱり」

鱗を見た途端、動揺し始めたセレンに、クロウは若干肩を落とす。

「だから、あの時、森に向かったんだね。この鱗の持ち主が心配であの時セレンは一心不乱だった。」

そして、自分の前に立ち塞がる物を突き飛ばしてしまった。

父のクロウさえも……

「……」

無言の肯定。

何か言おうとしても喉から言葉が出てこようとしない。

「大丈夫。父さんは、セレンの事を誰にも言わないから」

「あ……………」

「心配して当然だもんな」

動揺して何も喋れないセレン。

しかし、クロウは怒らなかつた。

寧ろセレンの行動を肯定している。

「えっ……………」

「大切な友達が傷付けられていたら、誰だって心配するぞ」

持って来た籠から、トドブラリンゴを取り出し、そのままかじりつく。

心地よい咀嚼音。

その音と共に鼻を擽る甘い香りが、部屋へと広がる。

「んう……………甘いつ」

その美味しさを示す様に口元からは甘い汁が垂れていた。

「叱らない、の」

「叱って欲しいなら叱るよ。特大の雷で」

恐る恐るその顔色を伺うセレン。

しかし、語尾を強調するクロウの答えに首をブンブンと振り、それを拒否した。

「ぶが、うまつ……………セレンも食べる？」

口に頬張っていたリンゴを胃に収めると、新たなリンゴを取り出し、セレンの前へと差し出す。

「今は……………いらない」

「早くしないと、全部食べちゃうよ」

父の気遣い、というモノだろうか……………

クロウは無理に話をそらすようと、果物へと手を伸ばす。

静寂に混じる心地よい咀嚼音。

しかし、その静寂は、セレンにとってはあまりにも不快なモノだった。

バれているのに、隠し続ける事を許されたのだから……

そして、静寂は破られた。

「次の満月の夜、コウに会いに行くの」

「……」

セレンの言葉にクロウの食が弱まる。

だが、それは弱まるだけで、口は世話しなくリンゴを咀嚼し続けている。

「それで……父さんにも、コウに会って欲しいの」

「むがつ!?!」

思いもよらぬ提案に、クロウは目を白黒させ、その反動で胸を勢い良く叩き出す。

「げっほ! セレン、話したく、なければ……んんっ!」

漸く自分を落ち着かせ、改めて向き直る。

「セレン。話したくなかったら、話さなくても良いんだよ。父さんは」

「あたしは、父さんにコウの事を知って欲しい! コウの事を知って、大爺様に言って欲しいの……」

慌てて宥めるクロウを無視し、話を続けるセレン。そして……

一呼吸。

「コウは危なくなんかないっ! だから……だから、コウをいじめないでっ!」

瞳に浮かばせ、セレンは懇願する。

齡十歳のまだまだ幼い子供。

しかし、その瞳には何かを守りたいという強い想いを宿していた。

「……セレンは強い子だ」

「あたし……強くなんか、ない」

くすりと微笑み、優しく語りかけるクロウ。その言葉にセレンは首を振り、小さく呟いた。

「父さんが言ってるのは、力の強さじゃないよ」

何処だろうと疑問符を上げるセレン。

そして、クロウが指差すのはその胸だ。

「まだあたしぺった」

「胸じゃなくて心っ！」

誰がそんなやましい事を吹き込んだのかと、頭を痛める思いのクロウ。

その先の言葉を言わせまいと阻止し、更に話を進めた。

「セレンは自分の事よりも相手の事を考えてる……十歳の子供じゃ、とても考えられない事だよ」

黙ってクロウの言葉を聞くセレン。

「でもね、セレン。あんまり自分の事を放っておくと、自分自身の大切さが分からなくなるんだ。だからさ……」

クシヤッ。

「もっと甘えてよ。父さん、セレンの心が分からないと、困るんだ」

大きくて、ちよっぴり頼りなさそうに見えるクロウの手。

だけど……その手は誰よりも暖かくて、そして、誰よりも頼れる父の手なのだ。

「……っ、ひう」

塞き止めていた涙腺から溢れ出す涙。

溢れ落ちる涙を袖で拭っても、その涙は止まる事はなかった。

「あらら、泣いちゃって……父さんは怒ってないんだよ」

「ごめんなさい、ごめん、なさい……」

謝罪の言葉を連呼しながら、声を上げて泣き続けるセレン。そんなセレンの頭をクロウは泣き止むまで撫でていた。

雑踏。

院内にも聞こえていたのか、若医者に数人の看護婦、何処かへと行っていたサラまでが覗きにやってくる。

ただ、奇妙な事にその顔色は十人十色。

不思議そうに首を傾げる者もいれば、もらい泣きをして瞳に涙を浮かべる者もいる。

そして、サラも腕を組みながら、その光景に見入っていた。

何処か不満げで、何処か優しいといった複雑極まりない表情で……

「まつ、いつか……」

サラはそう自分に言い聞かせるように小さく呟き、いそいそとその場を後にした。

「クロウの奴う、明日は頑固パンだけにしてやる……」

第六十六話：風の消えた村

それから三日後、セレンは無事に退院する事が出来た。

セレンを診ていた若医者も、彼女の回復力には目を丸くし、見送る際さえ、頭に幾つもの疑問符を浮かべていた。

「それじゃ、セレンちゃん。お大事に」

未だ完治という訳ではないセレンの足。

それを証明するかのように、セレンの右足にはまだ包帯が巻かれ、慣れない手つきで松葉杖をついている。

「ありがとうございます」

クロウとサラ、二人に付き添われ、一礼すると、ゆっくりと病院の扉を開いたセレン。

「……んっ？」

セレンが感じる違和感。

それはその場にいる者……いや、村にいる住民、全てが感じ取る事の出来る違和感だろう。

無風。

そう、風がないのだ。

頬を撫でるそよ風、花の香りを乗せた風、風という風がなかった……まるで神が風を持ち去ったかのように……

「やっぱり、可笑しな事かしら？」

「大爺様は御神木が、風を毎日呼んでるって言ってたよ」

松葉杖にやや苦戦気味のセレンが、薄くなった記憶を掘り出している。

山間部に位置するヴォイド村は、年中、風が絶える事がない。

何でも村の中心にある御神木が、村に絶えず風を呼び込んでいるの

だと、大爺こと村の長老が子供達に話しているのだ。

「そついえば、村の言い伝えじゃ……【風が絶えし時、災いの牙は剥かれん】だつていつていたな」

「もつつ、縁起でもない事言わないでよ」

古龍学、いわば考古学を学ぶクロウにとって、迷信や言い伝えは良く耳にする。

故に学者の性さがというべきなのか、ふと頭に浮かんで来た村の言い伝えを復唱するクロウ。

「早く帰りましょ。暑くてたまらないわ」

風があるからこそ、涼しい村。

しかし、無風になってしまった今、厳しい陽光が村にへと降り注ぎ、平野部と同等の暑さになっていた。

「んう……」

「母さんっ、早いつてばあ!!」

万年白衣姿のクロウは唸ったまま。

足早に家を目指しているサラに置いてかれまいと、手を世話しなく動かすセレンであった。

同じ様にその異変に気付くモノがいた。

約束の日が近づくにつれ、静かに移動を繰り返す一頭の雄飛竜。

ヴォイド村から北西へ数十キロ離れた森に身を潜めるコウだ。

『……風ガ怯エテイル』

飛竜にとって風は身近な存在。

そんな風が今日という今日、いや三日以上前から微かに震えているのだ。

その微妙な変化に気付き、天を仰ぐコウ。

だが、その瞳には厳しい陽射しと、雲一つない青空が広がっているだけだった。

第六十七話：盡く欲望（前書き）

これが今年最後の更新となります。

『小説家になろう』に作者登録をして、はや八ヶ月。今年は放浪者自身、色々あった年でしたが、来年の春まで続きそう……
いやあ、気が遠くなるう……（汗）

それでは、残り四時間程の本年。
皆さんも良い年を！

第六十七話：盡く欲望

静寂に包まれた部屋。
様々な書類、古文書、古龍観測所より報告された資料が積み重なる机。

深いため息。

事の次第があまりにもうまくいかない事が腹立たしいのか、指でこめかみを押さえ、深いため息をつく騎士長。

「騎士長、飛竜生態学会理事長様がお見えです」

「……通せ」

明らかに苛立ちを含んだ短い返答。

すると共に一人の初老の男が入って来た。

「おや？ 随分とお困りの様子だね」

ただでさえ苛ついている騎士長を嘲笑うような初老の男。

「何の御用でしょうか、理事長様」

「いや、搜索が捗っていないギルドの惨めな姿を見に来ただけだよ」

騎士長は、紳士的な態度を維持しようとするが、この挑発的な理事長の言葉には青筋を浮かばせ、この短き恥辱を噛み締める。

「……御用がなければ、お引き取り願いたい」

無理矢理、作った笑顔を更に引きつらせ、書類に目を通し始める。

「まあまあ、悪い冗談だよ。私は今日、そんな君に面白いモノを持つてきたのだよ」

「……面白い、モノ？」

皺が刻まれた理事長の不気味な笑み。

その手元の鞆から数束の書類が取り出され、騎士長の目の前に差し出される。

「我々、飛竜生態学会の中にも、今では禁忌とされてきた竜操術に

興味を持った者も少なくない。我々が食事を共にする際、竜操術を主題に話の肴にしたものだ。無論、大多数が竜操術の軍事的転用論の可否を論じているがね」

「それと本件が何の関係がある」と

ただでさえ、膨大な資料に目を通して来たのだ。これ以上、資料が増えるのは正直、堪える。

「読めば分かるさ」

未だ受け取るうとしない騎士長にクスリと冷笑を浮かべ、手に持つ資料を机に無理矢理置く理事長。

その資料を騎士長は半信半疑で受け取った。

「っ！？」

その資料を開くや否や、その瞳の色を変え、騎士長は次々と資料を捲る。

「……私も正直、この資料を見た時は驚いたよ。まさか、古の民の末裔が近くにいたとはね……」

「何故……何故、この資料を早く提示しなかった！ コレさえあれば、時間を浪費する事はなかったはずだ」

顎に蓄えた白髭を指で撫でる理事長に、遂に怒号を浴びせかける騎士長。

「そう怒らずとも良いではないか。我々学者は、誰かと違って、荒事をあまり好まないのね。平和的解決とは、時間を要するものなのだよ」

宥める、というには程遠い言葉。

だが、目の前で殺気を剥き出しにしている騎士長を前に理事長は眉一つ動かさない。

「ちい……」

平和的解決。騎士長にとってこれ程、反吐の出る言葉はない。

両者の利点を考える事等必要ない。

弱者は弱者なりに地べたを這いずり回れば良いのだから……

二回の呼び鈴。

机にある金属製のベルを二回ほど鳴らすと、直ぐ様、部屋の扉が開いた。

「騎士長、何か」

「今すぐ例の資材を整えろ！ 準備が出来次第、ヴォイド村へ向かうのだ！」

入ってくるや否や飛んできた怒号に、騎士は肩をすくませると、体を翻し、矢の如く部屋から退室した。

「あまり人使いが荒いと、飼い犬に手を噛まれても知らんよ」

「噛まれる前に殺せば良いだけの話だ」

こりゃ失敬、と言わんばかりに視線を反らし、部屋から理事長は出ていく。

「直ぐにこの三人のデータを集めろ！ 今すぐなのだ！」

轟音。

資料もろとも叩きこまれた机が悲鳴を上げる。それと共に広がる一人の学者と、笑う妻子の写真。

「忌々しい理事長《老いばれ》め……」

時間差で吹き出す負の感情。

固く握り締められた拳には、爪が皮膚に食い込み、机上に鮮やかな紅の点で彩られる。

「神を侮辱した罪、生きて四肢が存在すると思うな……」

閉ざされた扉を睨み付ける顔。

その血走った瞳には禍々しい殺意が灯り、悪魔と呼ぶに相応しい邪悪な姿となっていた。

第六十八話：無題（前書き）

読者の皆様お久しぶりです。

三月には更新を再開する予定だった放浪者です（汗）

作者の諸事情により、更新がかなり遅くなってしまいました……（涙）

更新再開を待っていた読者様、今までお待たせして誠に申し訳ございませんでした。

しかも、最新話の題名が『無題』とまでなってしまう、重ねて申し訳ございません。

今後は更新を早く出来るよう作者は努力致しますので、どうか暖かい目で見守ってやって下さい。

そして今後も『瞳にうつるモノ』をどうぞよろしくお願い致します。

第六十八話：無題

それはセレンが病院を退院したその夜、夕飯を終えた後の事だった。皆で食事を終え、サラは夕飯の後片付け、机の上にへばっている退院したてのセレンを横目に、クロウは席を立つ。

目指すは、食卓の隣に位置する居間のソファ。ヴォイド村に二人で暮らし始めてから、ずっと使い続けている家具の古株だ。

その上で古書を開き、のんびりと一服するのがクロウの至福の時。

「ふう〜」

座ると同時にソファへ体が沈み、程よい体勢となる。

後はソファの脇にある古書を開くだけ。

そこへ手を伸ばし、お目当ての物を掴もうとしたその時だった……

「……………父さん」

「んっ？」

松葉杖を危なっかしく操るセレンが、クロウの座るソファへ足を運ぶ。

「あの、さあ……………えっと……………」

何か聞きにくい事を尋ねるようにモジモジとしたままのセレン。

「父さんの隣においで。立ったままじゃ辛いだろ？」

古書に伸ばしていた手を止め、隣に来るよう手招きするクロウ。

コクリと頷き、クロウの隣へ座るセレン。

「どうしたの？ 難しい顔なんかしちゃって……………父さんに話して？」
らんっ？」

頭をくしゃりと撫で、優しく諭す。

そして……………

「あと……………あと何日経ったら満月の夜になるの？」

「……………」

病室で告げられたあの話。

その約束の日を表す満月の夜。

やっとこさ喉から出てきたセレンの問いに、クロウは目尻に皺を寄せる。

「やっぱ……………行っちゃ駄目？」

余程怖い顔なのか、顔色を伺うようにクロウの顔を覗き込むセレン。

行かせるべきではない……………

しかし、行かせてあげたい……………

心の中で思いが葛藤し、クロウの目尻へ益々皺が寄ってしまう。

「あら〜、二人で何の相談かしら？」

「「っ！！？？」」

いつの間に二人の背後に立っていたサラに二人の体は反射的に飛び上がってしまった。

「サラっ！ 家で気配を消すなって、言ったじゃないか！」

「二人が話に夢中で気付かなかっただけよ。断じて気配は消してませ〜ん」

薄い笑みを浮かべ、サラはクロウの額を指で小突く。

「目が泳いでるぞ……………」

「さて、何の事かしら〜」

飽く迄、白を切るサラ。

「あう……………」

そんな二人から蚊帳の外に放り出されてしまったセレンは、腕を小さく振っている。

「っで、セレン？」

「ひゃい！？」

母からの急な問いかけにセレンの声が裏返る。

「何の話だったの？」

興味津々に聞いてくる母相手にセレンは困ったように顔で、クロウに助けを求めるのだった……

第六十九話：疑問（前書き）

更新がすっかり遅くなり、大変申し訳ないです……

放浪者自身、更新日を決めようと思いましたが、時間を見つけれない始末。

更新は不定期になりそうです。

そして、前回、同様に二ヶ月空いてしまった事を重ねて御詫びいたします。

第六十九話：疑問

サラに心配をかけないため、あの手この手で誤魔化すクロウとセレン。

しかし、幾ら言い訳を並べてもサラの目を誤魔化す事は出来ず、セレンが口を割ってしまった。

「っで……次の満月の夜に、その飛竜に会いに行くのね」
力無く首を縦に振るセレン。

「サ」

「貴方は黙らっしゃい……」

何かを言いかけたクロウを睨みつけ、無理やり黙らせると、再びセレンとサラは向き合う。

「夜の森は危険なのよ。それは分かっているわよね……」

沈黙。

「黙ったままじゃ何もわからないわ」

語気を強め、鋭い眼光がセレンを射抜く。

「でも……あたしが言っても……母さん、行くの許し」
「許すわけないじゃないっ！」

覚悟はしていたものの、怒号に首を竦め、固まってしまう。

「夜の森は村のハンター、熟知した人も行かないほど危険なのよ！
ましてや子供が行ったらランポスの餌になってしまうわ！」

頭の天辺から角が生やしたように叱りつけるサラ。

いつもの倍に見えるその迫力の怖さに、思わずセレンは涙を浮かべてしまう。

「泣いたら行っても良いって思ってるの」

「サラ……」

涙を浮かべ、嗚咽を漏らすセレン。
そんなセレンに構わず、冷たい言葉を浴びせるサラに対し、クロウがその肩を掴む。

「あなたもあなたよ！ 今、セレ」

「セレン。あとは父さんが宥めるから、部屋に戻りなさい」
掴まれ様にサラは矛先をクロウに向ける。

それを言い切る前に会話を遮断し、部屋に戻るよう促すクロウ。
それに頷き、セレンは涙を拭いながら、部屋へと一目散に駆けて行った。

荒々しく閉じた扉。

「ふええ……いう……」

クロウに促され、部屋に戻ったセレンは、布団に丸まり、声を殺して泣いていた。

「ひう……ひつく……」

言葉を発する事も出来ない余りの怖さ。

目から溢れ出てくる涙は、止まる事を知らない。

「そんな問題じゃないでしょー！」

セレンの耳に響く母の怒鳴り声。

「……聞こ……る」

それに続くクロウの小さな声。

ただその小ささの余りに上手く聞き取れない。

泣きたてでまだ止まらないしゃっくり。

しかし、涙の勢いは既に弱くなっていった。

ひんやりとした床の感触。

ちよつとした興味本意から、部屋の扉に忍び寄るセレン。泣いて火照った体を床の冷たさが、少しずつ冷ましていく。

「……………」
片目で見れる程の隙間が開き、セレンは二人の話に耳を傾ける。

「少なくとも二人には見られているのよ！ 少しは危機感を持ちなさいよ！」

未だサラの怒りは冷めていない。

ただ、セレンは自分の事を話している事に首を傾げていた。

「わ……………ってる」

聞き取りにくいクロウの声。

「わかってないわ！ とにかく……………あの二人を黙らせるわ」

そう言つて、食器棚の一番上から中くらいの瓶を取り出したサラ。

セレンの部屋からは遠くて見えにくいのが、瓶の中は夜空の星を詰めたような、光を放っていた。

「現役の頃に集めてたピュアクリスタルよ……………最低でも十九万^{ゼニ}はする」

「ちよつと待つんだ、サラ！」

珍しく声を荒げ、サラの肩を掴むクロウ。

その腕をサラは振り払おうとする。

「あたしは、クロウみたいに賢くなんかないっ！ だから、あたしにはこんな方法しか思いつかないのよ！」

「だからって」

「あたしは……………昔のあたしに戻りたくないの！」

腕を離そうとしないクロウに放った言葉。

その言葉に何の意味が有るか、セレンには全く分からない。

ただ、その言葉を聞くや否やクロウの腕はするりと離れた。そして、それ以上、止めようとしなかったクロウ。

「……ごめんなさい」

そして瓶を抱えたサラは行ってしまった。

「母さん……」

隙間から一部始終を見届けたセレンは、静かに扉を閉める。

普段なら決して聞く事のない母の叫び。

普段とは正反対の威厳ある父の姿。

齡十才の小さな頭には、両親の話は難しく聞こえた。

【何で人と飛竜が仲良くしてはいけないのか】

そんな疑問が浮かび上がるセレンに、答えてくれる人は誰もいなかった。

第七十話：今宵は満月

あの晩からセレンはサラと会う度に顔を反らし、食後もサラを恐れるように部屋へと籠ってしまった。

そして、数日が経ち、夜空に浮かぶ月は満ちた。

『次ノ満月ノ夜、コノ河原ニ立ツテイロ。迎エニ行ク』

頭に響くコウの声。

毎晩、窓から月を観察したセレン。

真ん丸に太った月を見るや否や、セレンは寝間着を脱ぎ捨て、用意していた服に袖を通すと、腰に大きめのヒップバックを装着し、玄関へ足を忍ばせる。

静寂。

闇に紛れるように動く影。

「そつと……そおつと……」

物音をたてぬよう慎重にブーツを履く。

動く度に音を漏らすバックを押さえつけ、ゆっくりと事を進める。

「……………あつ」

何かを思い出したかのような小さな声。

そう……肝心の明かりがなかったのだ。

いくら満月で月明かりがあるとはいえ、深い森を明るく照らす程ではない。

唸り声。

暫しその場で立ち尽くし、腕を組みながら、手近にある明かりを探すセレン。

松明は火が飛ぶからダメ。

ランプは、幾つもあるのだが、全て目立つ所にあり、無くなるからすぐにわかる。

「アレも駄目、コレも駄目……」

セレンは考え事をする、どうしても口から言葉がでてしまう。

「何考え事をしているのかな？」

「！！！！！！！！？」

突如、背後にあらわれたクロウ。

驚きのあまりに、悲鳴が出そうになったが、両手で口を勢いよく押さえつけ、何とか堪えた。

「と、と」

唇に当たるクロウの指。

「しー……母さんが起きてきちゃうよ」

子供っぽく微笑み、小さくクロウは囁く。

「な、なんで父さんが起きてるの」

未だ落ち着かない心臓に胸をあて、囁き声で怒る。

「今日は満月だからね。寝静まった頃に森へ行くと思ったんだよ」

「……ガーン」

自分なりには万全を期したものの、既に出る時間帯がバレていた。

悔しいというか何というか……

何ともいえない気分に思わず漏れた声。

「あれま、シヨックだった？」

見ればシヨックを受けているのは一目瞭然。そんなセレンに、確認をとるようにクロウは呟く。

「うう……しどい《ひどい》」

とどめの一撃を受け、セレンは項垂れる。

「まあ、そんな事より、今日は父さんも話があるんだ」

「ふえ？」

そんなクロウの言葉に、セレンは素っ頓狂な声を上げた。

「セレン、病室で父さんに言った事覚えているかな？」

跳ね上がる心臓。

「その様子だと覚えているみたいだね？」

その時、自分がどんな表情だったのかは、何となく想像は出来た。

「あの答えなんだけど、父さん、セレンの友達に会ってみるよ」

「えっ？」

父の口から出た意外な言葉。

「あつ、学者としての興味じゃないよ。セレンがあんな笑顔を見せ
ている友達が見たくてね」

此処まで子供っぽく微笑む大人はいない。

だけど、それが父さんの美点。

「サラに見つかる前に会いに行こうか」

その手に引かれ表へ出ると、天高く昇った月が柔らかな月光で迎えてくれた。

そして、その傍らを夏の星座と流れ星が、夜の宴を催している。

感嘆。

こんな時間まで起きた事のないセレン。

その幻想的な世界に思わず感嘆の息を漏らしてしまう。

「さあ、セレン。案内を頼むよ」

「……っ！ はっいつ」

クロウの声で我に帰ったセレンは、大きく手を挙げ、小さく返事をした。

「あらー、こんな遅くに何処へお出かけ《…………》かしら」
「「っ！！？」」

背筋にはしる嫌な汗。

「酷いじゃない…………母さんだけ仲間外れだなんて」

口調はいつもと変わらないのだが、問題は肌からでも分かる強い視線。
線。

「すっかり忘れてたわ…………今日がその満月の夜だったなんて」

じわじわと近づいて来る足音に、二人は蛇に睨まれた蛙のように固まってしまふ。

「本当の事言つと…………あつ、セレンがいるから話せないわね」

「…………いつも話してる癖に」

ほんのりと頬を赤くするクロウが呟けば、黙らっしゃいと言わんばかりに視線がキツくなる。

「さてと…………」

「「ひやいつ！！」」

怒気の含まれた鬼の声。

裏返る二人の声。

「お仕置きしたい所だけど、あたしも着いて行くわ。セレンの母親としてね」

安堵。

その言葉に驚くよりも、自身の安全が保障された二人は、ホッと胸を撫で下ろした。

「クロウは帰って来たら、覚悟なさい」

「なっ！？」

「問答無用っ」

弁論の余地もなく、叩き伏せられたクロウを除いて…………

第七十一話：夜間にまぎれて（前書き）

更新が遅くなり、大変申し訳ないです。

合間合間に書いたため、誤字脱字があるやもしれません。

見つけましたら、ご指摘しいただけたら嬉しいです。

次話の更新については、また間が空くかもしれませんが、御容赦下さい。

第七十一話：夜闇にまぎれて

柔らかな月光を限りなく大木が遮断し、深い闇に閉ざされた夜の森。昼間は、活発に動きまわっていた生物達も、今では、その疲れた体を寄せ合い、床に就いていた。

その眠りを促すかのように、草むらでは、昆虫達が羽根を震わせ、心地よい子守唄を奏でている。

そんな森の中をうごめく蒼白い光。

「足下に気をつけて……」

その正体は、クロウが持っている大きなランプだ。

この気味の悪い光を放つランプは、火気を使っておらず、普段の生活にも使われている雷光虫達が、火にも劣らない光を放つ優れ物である。

「このまま河原へ向かえば良いんだね？」

「ふえっ！……うん」

辺りをキョロキョロと見回していたセレンは、驚きのあまりに声を裏返させると、力無く頷いた。

鼓動。

先程から、セレンの胸は落ち着かない。

それは無理もない……

光を消してしまえば、人間の存在自体さえも呑み込んでしまいそうな森の闇。

今のセレンには、その闇が獲物を待っているように思えてしまうのだ。

早くなる鼓動。

身体をゆらりと包む恐怖に、セレンはクロウの袖を力強く握り締め
る。

「大丈夫。怖くないから……」

その手を優しく握り締め、クロウはそつと諭した。

『……間ダ』

『三人……走ダ』

微かに聞こえる話し声……

コウのような澄んだ喋り方ではなく、また別のモノ。そして、聞き
覚えのある声。

脈動。

額から汗が流れ落ち、それと同時に心臓がドクンと強く打ち鳴らさ
れた。

「あのトカゲだ……」

コウに会いに行った時、自分を襲ったあの青トカゲ。

蒼い鱗に血走った瞳。

意地汚く涎を滴らす姿。

肩を裂かれた感触と痛みが蘇り、怪我をしていないのに、思わず顔
をしかめてしまう。

「クロウ、右に二匹……此方の足音に合わせているわ」

サラの警戒網に招かれざる客が引つ掛かり、辺りに張り詰めた緊張
がはしる。

「怖くない、怖くなんか……ない」

ひしひしと近づく恐怖に身体中の筋肉が固まりそうなセレン。

その頭の中では前の襲撃の一部始終が再生され、足取りは重くなっ
ていく。

「セレン、河原まで頑張る？ セレンの友達に会うんでしょ？」

「……………うん」

父の優しい言葉に、脳裏の記憶を振り払うと、セレンは小さく頷いた。

「来ると思うか……」

「さあ？ トカゲに聞いてみなさいよ」

クロウの深刻な問いに、サラはおどけて答えてみせる。

「真面目に」

「あいつらは人並みに頭が回るし、空気で獲物の心理を読み取る事だって出来るわ。此方が動揺を見せれば、向こうの思う壺よ」

元ハンターだけあって、動揺するどころか、敵の特性を良く理解しているサラ。

それ故に、その返事は簡潔且つ的確なモノだった。

先手を打たれてしまえば、圧倒的に此方が不利になるこの状況。

打たれる前に打つ……

それがクロウの出した答えであり、サラが暗示させた唯一の方法でもあった。

「サラ、いけるかい？」

意を決したようにぼそりと呟くクロウ。

「あら、誰に聞いてると思ってる？」

そりゃ失礼、と言わんばかりに肩をすくませ、クロウは手に持っていたランプを高々と宙へ放り投げた！

「セレン、しっかりと捕まってる！」

「みゆっ!?!」

体がフツと持ち上がり、小動物のような悲鳴を上げるセレン。

そして、持ち上げられている事を理解したのだった……それも俗に言うお姫様抱っこ。

風を切る音。

視界が暗くて様子はよく分からない。

しかし、耳から聞き取れる風の音で、その速さが伺える。

「父さん……くるひい……」

きつく抱き締められているおかげで、若干息苦しさを感じるセレン。それを訴えるべく、父の顔を見上げたが、凝視する事はしなかった……いや、出来なかったのだ。

何故かは分からない……

だけど、父の瞳は何かを纏っていた。

それが何かはセレンには分からないが、見てはいけない、そう父が言っているようにも思えたのだった。

無数の葉が擦れる音。

「何か数が増えてないか!？」

最初は二匹だったのが、今では六匹まで増えている。だが、奇妙な事に数が増えた事にも関わらず、彼らは襲う素振りを全く見せて来ないのだ。

「あたし達を河原に向かわせている?」

ふと漏れたサラの疑問。

だが、河原に近付くにつれ、それは確信へと変貌した!

「クロウツ! これは」

「河原へ出るぞ!」

時既に遅し。

サラが危険を伝えようとした次の瞬間には、森を抜けて、河原へと飛び出してしまった!

だが、先程のサラの考えとは裏腹に現れたのは、満月の月明かりに照らされた穏やかな河原だった……

第七十二話・蒼鱗の主（前書き）

思ったより早く文章が完成しましたっ。

このペースで書けたら、嬉しいに越した事はないのですが……

山を越すまでの辛抱ですなっ

それでは、本文をどうぞっ

第七十二話：蒼鱗の主

「はあ、襲っては来ないな……はあ」

森から出来る限り離れ、河原にセレンを降ろすと、その場でへたりこんでしまったクロウ。

「はあ……ひい……つ、疲れたあ」

年季の入った白衣は汗で湿り、いつもかけている色眼鏡は盛大にずれている。

その眼鏡をスツと元に戻すと、懐から取り出した小さな箱から、数粒の錠剤を手に取り、口の中へ放り込んだ。

「父さん……？」

心配そうに近づくセレン。

クロウは近づくセレンを手で制止する。

「っと……待ってて……ふうくっ！」

痛みを我慢するかのように呻き声を上げるクロウ。全身を震えさせ、行き場のない痛みを発散するかのように、河原の石を握り締めている。

呻き声。

幼いセレンが初めて見る父の苦しむ姿。

村に帰って来た時、いつも優しい言葉をかけてくれた父。

セレンのしょうもない話を聞いても、面白おかしく笑ってくれた父。

そんな父が今、苦しんでいる。

「……っ」

握り締めていた拳を緩ませ、スツとその手へ力を送り出す。

螢火。

暗がりの河原に淡い光が灯る。

河辺で飛び交う蛍のような優しい光が、苦しむクロウの背中にかざされた。

「セ、レン？」

淡い光と背中の中の暖かさに気付いたクロウ。

そつと後ろを見ると、小さく唸りながらも必死に治そうとするセレンの姿が見えた。

太古から治癒術の光には、術者の心を投影すると伝わっている。そして、クロウも幼少の頃に母親の光の感覚を覚えているのだ。治って欲しいという純粹な心。

痛みなんか飛んでしまえという優しい心。

そんな心を感じとるクロウ。

「ありがとう……もう、大丈夫だから」

薬が効いたのか、セレンのおかげなのか、ダルさだけを残し、全身の痛みは引いていた。

「本当に？」

「本当だよ、ありがとう」

額の汗を拭い、クロウは微笑むと、パアツと顔が明るくなったセレン。

「さて、後はセレンの友達を待とうか」

「うんっ！」

そのクロウの問いかけに、セレンは大きく頷いたのだった。

そんなやり取りが行われている一方、肩で息をしているサラは、終始険しい表情で辺りを見回していた。

微かな気配。

周囲の森からは無数の視線を感じとる事が出来る。

その数は、十や二十では済みそうにない。

闇に乗じて息を殺しているつもりだか知らないが、今のサラには無意味だった。

「……おかしい」
襲うつもりがなら、もう既に牙を剥いているはずだ。

それにその数で疲弊した獲物を狩らないなんて、あるはずがない。

「まさか……」

打ち鳴らされる第六感の警鐘。

サラは必死に辺りを見回し、退路を見つけようとするが、何処もランポス達が塞いでしまっている。

「囲まれている……!?!」

突如、森の奥から殺気が急激に膨れ上がり、此方の方向へ向かって来ている!

そして、殺気が膨れ上がると同時に、辺りのランポス達が、森の中から姿を現した!

「父さんっ!」

「セレン、父さんから離れるな!」

ふらりと揺れる体に鞭を打ち、セレンの手を引いて下流の方へ逃げだすクロウ。

しかし、その前方を十数匹のランポスが阻み、抜ける事が出来ない!

「河原の中心へ!」

サラの言葉を聞き、クロウはセレンを連れて河原の中心へと反転した。

「逃げ場は!?!」

「囲まれてるわよ!」

セレンを間にはさみ、背中合わせで警戒するサラとクロウ。

必死に打開策を練っているものの、二人の体からは冷や汗しか滲み出て来ない。

暗い森から飛び出す影。

それが飛び出すと同時に、二人の視線はそちらを向く。

「こりゃ、ヤバいぞ……」

「やっぱり親玉を待っていたのね……」

ドスランポス。

それが彼のモノの名前。

ランポス達の権力争いを勝ち抜き、その頂点に君臨するモノ。

体に幾筋も刻まれた古傷。何よりも目立つ大きな鶏冠とさかは、その長たる証。

月光に照らされるその爪は、まるで血塗られたナイフのように紅く、口元に生え揃った牙が鈍い輝きを放っている。

野太い鳴き声。

何処ぞで肥えた、その強靱な肉体は尾まで入れると、九メートルを超えている。

『サテ……ドレカラ味ワオウカ』

河原で固まる三人の姿を堪能する瞳。

その傍らで忙しく動いている鋭い爪は、獲物を引き裂いている様子を彷彿させている。

捕促。

『マズハ肉ノ柔ラカイ子供カラ』

目標が定まったのか、血走った瞳がセレンで止まり、カツと見開かれた！

「あ、あたしなんか美味しくないもん！」

『……ホオ？ 俺達ノ言葉ヲ理解出来ルノカ？ ナラ、サゾカシ美味デアロウナ』

驚嘆の声を上げると、更に滴る涎を舐めずり、恍惚の息を漏らす親玉。

その不気味な声を聞き、セレンの背筋には幾つもの汗が流れ出す。

「最近の不運を恨みたいものだ……」

「そんな事考えてる暇があるなら、何か考えなさいよ！」

絶体絶命とも言える状況で漏らされたクロウの言葉に、罵声を浴びせかけるサラ。

「クロウ……あの薬は!？」

「さっきで品切れた」

「こ……このバカクロオオツッ！」

最早万事休す……か

爆音。

諦めかけていたその時、三人を取り囲んでいたランポス達を数発の火球が吹き飛ばし、辺りを熱気が包み込んだ。

突風。

その熱気を振り払うかのように、河原へ吹き下ろす風。頬を撫でる力強い風……

風に混じる力強い羽ばたき……

セレンは、この風の持ち主を知っていた。

揺れる大地。

鈍い地鳴りと共に、大地に降り立つモノ。

フツと瞳を開けると、そこには彼がいた。

「デかい……」

三人の盾になるように降り立った雄火竜。

最早、壁と言っても過言ではないその巨躯に、クロウの口からは感嘆の息が漏れる。

月光を浴びんが如く広げられた巨大な翼。
美しい玉のような竜眼は、見るモノを震え上がらせ、その巨軀から吐き出される業火は、仇なす敵を焼き払う。
それが彼のモノが天空の覇者と呼ばれる由縁である。

咆哮。

大気を震わせる猛々しい咆哮。

それに半数以上のランポスは、ビクリと体を震えさせる。

『数デハ勝ツテイル。殺』

微塵の動揺も見せないドスランポス。

突然の来訪者に乱れた指揮系統を修復しようとするが、その意識も体を焦がす炎の中へと消え失せた。

落下音。

鈍い音を奏で、河原に落下した肉塊。

それはつい先程まで、ランポスの長だったモノの亡骸。

全身を包んでいた蒼い鱗は、見るも無惨に赤黒く焦げ付き、体からは血肉の焼ける異臭を放っている。

『命惜シクバ去レ！ ソシテ二度トコノ者達ニ近付クナ！』

轟っ！

猛々しく翼を広げ、雄叫びを上げる天空の覇者。

長が消え失せ、彼等に残された道は二つ。

一つは、このまま森へ引き返し、目の前の御馳走を我慢して、命を長らえる事。

そしてもう一つは、束になって襲いかかり、己の命を賭して、餌に

ありつく事。

長が居ようが居まいが、目の前の敵に勝てる見込みはない。それに命をかけてまで、餌にありつくこうなど、割に合わなすぎる。

腑抜けた鳴き声。

雄火竜の正面に立っていた群れが、何とも言えない腑抜けた声を上げ、大急ぎで森へと引き返したのだ。

それに続き、また一団、また一団とその身を翻し、夜闇の森へ逃げて行くランポス。

そして、最後の一団が消え去ると、辺りは何事もなかったかのように静まりかえったのだった。

第七十三話・月夜に舞う紅い竜（前書き）

プロット整理してから、執筆がスムーズに……この調子で頑張っていけます。

以上、放浪者でしたっ。

第七十三話：月夜に舞う紅い竜

河原に訪れた静寂。

その静寂の中に佇む三人と一頭。

雄火竜は黒焦げた死骸をくわえ、森の中へ放り投げると、その巨軀を揺らし、ゆつくりと三人に近付いてくる。

一步、また一步。

「んううう！ コーオオオ！」

待つのが大の苦手なセレン。

そんなセレンの堪忍袋の尾は直ぐに切れ、矢の如くに駆け出した。

足場の悪い河原などなんのその。

転ぶ事なく軽快に駆け抜け、その巨軀めがけて一気に飛び付いた！

「なああつ！」

「にゃああつ！」

人が飛竜めがけて飛び付く行為など、見た事もない二人は、獣人に似た悲鳴を上げている。

でも、そんな二人には構いもせず、セレンはその頬をコウに擦り付けていた。

「コウ、会いたかったよお〜！」

『久シブリダナ、セレン』

コウも嬉しいのか、声のトーンがいつもより高い。

『客人ヲ連レテ来タヨウダナ』

「えへへっ……誰だか分かる？」

顔にしがみついたまま、コウの大きな瞳を覗き込むセレン。

『セレンガイテ見エヌ』

「見ないで答えてよ」

悪戯な笑みをセレンは浮かべる。

『マア……大方、セレンノ親ダロ？』

「え、何で分かるの？」

悩む事なくピタリと当てたコウに、セレンは面白くなさそうに頬を膨らませる。

『セレンニ似タ臭イガスルカラナ』

自慢気に鼻息をフンと漏らすコウ。

「臭い嗅ぐなんて」

『見ルナト八言ワレタガ、嗅グナト八言ツテイナイゾ』

文句を読まれ、反論も出来ず、セレンは悔しそうに頬をひくつかせている。

「もおおおつ、コウの意地悪うっ！」

乱打乱打乱打。

セレンの短い我慢が爆発し、駄々を捏ねるようにコウの額を乱打しだす。

『コラッ！ 我ノ額デ暴レルナ！』

「やだやだやだあつ！」

コウが嫌がるのもお構いなし。

セレンの駄々は徐々にエスカレートし、勢い余り、コウの顔から落っこちてしまった。

「にゆう……いだい」

『今ノハ、セレンガ悪イ』

後頭部を押さえつけ、瞳に涙を滲ませるセレン。

一方、コウは呆れている様子。

そんな二人のやり取りは、端から見れば、セレンの独り言かもしれない。

しかし、セレンの問いに答えるかのように頷いたり、唸ったりする雄火竜を見ると、二人の間では立派な会話が成立している事を主張しているのだ。

「立派な……雄火竜だ……」

「それも金冠級に近い銀冠級よ」

全ての人間が同一の大きさではないのと同じように、雄火竜も個々の大きさは様々だ。

小さくしぶとい個体もいれば、大きくても柔な個体もいる。

ギルドは、依頼が入ると同時に独自の調査隊を編成、依頼対象の生態調査を実施し、その結果に見合った等級を定めているのだ。

その中でも、二十メートルを超える手強い個体は、金冠級と位置付けられ、上級ハンターの一部の者達への依頼へと回されている。

コウと呼ばれる雄火竜の場合は、金冠級はあってもおかしくない大きさであった。

「父さ〜ん、母さ〜ん！」

ただただ驚嘆していた二人に聞こえたセレンの声。

ふと二人はその方向を見てみると、雄火竜の隣を歩いてくるセレンの姿が……

そして……

「父さん、母さん、紹介するねっ！ あたしの大切な友達のコウだよっ〜！」

コウと呼ぶ雄火竜の前に立ったセレンは、大手を広げてコウを紹介した。

「ど、どうも……父のクロウです」

「……くんばんは」

恐る恐る礼をするクロウに対し、ぶっきらぼうに挨拶をするサラ。

「ほらっ、コウも御挨拶しなきゃ！」

『……………』

挨拶するよう促しても、その素振りを見せるところか、鋭い眼光でコウは唸っている。

そんなコウにセレンは小首を傾げた。

「コウ、どうかしたの?」

『……何デモナイ』

「じゃあ、御挨拶しよ?」

一向に挨拶する素振りを見せないコウに、セレンは挨拶するように促している。

唸り声。

「二人とも、今日は久々に会ったんだから、お堅い挨拶は抜きにして、散歩してきたらどうだい?」

コウの異変に気付いたクロウは、隣にいたサラを下がらせ、そう提案した。

『何ト言ツテイル』

「久しぶりだから、二人で夜の散歩でもしてきたら。だって」

『ナラバ、ソノ言葉ニ甘エヨウ。我モセレント共ニ夜空ヲ飛ビタイ』
セレンの服の裾を器用にくわえ、その体を背中へと乗っけるコウ。

「えっ、でも……父さんと母さんは……」

「二人で行ってらっしゃい。父さんとサラは此処で待っているからさ」

一緒に連れて行きたい、そう言わんばかりに言葉を濁らせるセレンだが、後ろに下がっていた母の肩に腕を回している父を見て、渋々と了承するのだった。

「分かった……コウ、父さんと母さんは此処で待つてらるって」

『ナラ飛ブゾ、二人ニ少シ離レルヨウニ伝エテクレ』

コウの言葉にこくりと頷き、二人を見やるが、そんな二人は既に離れていた。

力強い風。

閉じていた翼が広げられ、羽ばたきを始めるコウ。

その翼が巻き起こす風は、川の水を飛沫として巻き上げらせ、周囲の木々の木の葉をざわざわと騒ぎ立てさせる。

『飛ブゾ』

「行つてきまあすっ！」

巻き起こる風の中、大きく叫んだセレン。

その声が聞こえたのか、父のクロウは、ひらひらと手を振ってくれた。

飛翔。

コウの体勢が一瞬、屈んだかと思うと、その体は大きく揺れ、満月の浮かぶ夜空へと舞い上がった。

烈風。

セレンを飛ばさんばかり、吹き付ける荒々しい風。

それに振り落とされないように、しっかりとコウの体にしがみつくセレン。

「あつたかい……」

久しぶりのコウの背中。

背中から感じとれるコウの温もり。

『何カ、言ツタカ？』

「何でも……」

『ナラ、シツカリト我ヲ掴ンデイロ』

ほんのちよっぴり言葉は悪いけど、それを打ち消してしまうコウの優しさ。

その何もかもがセレンには愛しかった。

側にいるだけで早くなる鼓動。

一緒にいるだけで感じる安堵感。

もっと一緒にいたい……

もっと一緒に笑いたい……

もっと一緒に空を飛びたい……

そんな思いで、セレンの心は満ちていた。

そう……幼き乙女の心には、小さな小さな恋の花が、その芽を吹かしていたのだった。

第七十四話：決意を胸に……（前書き）

さてさて、何年振りに更新したんでしょうかね……

暇な時間に書けると意気込んだものの、意外と書けないモノでした

orz

プロットは、うる覚えですが頑張って完結できるようにします（汗）

第七十四話：決意を胸に……

コウの背に乗ってからほんの少し後。

二人……正確には一人と一頭を見送ったクロウとサラは、段々と小さくなっていく後ろ姿と、見事な満月の浮かぶ夜空を見上げていた。

「行ってしまったな……」

「……ええ」

ようやく平穩の訪れた河原に佇む二人。肉の焼け焦げた嫌な匂いや、鉄臭い血の臭いなどは、セレンを乗せた雄火竜、コウの巻き起こした風によって、辺りへと霧散してしまった。

騒ぎの収まったのを感じいたのか、小さな虫達も少しずつだが、羽を震わせて、音楽会を再開したようだ。

「あの姿を見ても、まだ反対かな？」

唐突に口を開いたクロウが出した質問に、サラは顔を歪めていた。楽しそうに話すセレンを危険から遠ざけるため、頭ごなしに言い聞かせるべきなのか……

まだまだ純粹な子供の心に、大人の言葉はあまりにも鋭利な刃物にかなりえない。それ故に言うに言えない状況に、サラは迷っていた。

「そういうわけじゃないけど……いつかあの子の身に何かあってからじゃ……」

遅い、と小さく呟くサラの肩をクロウはトンと叩く。

「確かにサラの言う事は正論だ。けど、あの子のあんな姿を見てしまえば、私は反対する気もなくなってしまうたよ」

元々、反対する気はあまりなかったが、クロウも不安を覚えていたのは確かな事だった。

理性よりも本能で生きる彼らにとって、人間であるセレンは、小さく幼い存在である。故にある一定以上の信頼関係が双方の間に築かれてなければならぬ。

しかし、実際に会ってみれば、セレンは彼と十分に意志疎通ができていた。

今では遺物からでしか当時の様子を分析することができない滅んだ文明の営みが、クロウの目にはとてもあたたかく見えたのだ。

「確かに私の中に流れている先人達の血は、今の世には過ぎたる力を秘めてしまっている。でも、それは共存関係にある竜種の矛先を人間側に向けてしまった時だ」

今でも文献だけで確認されている太古の秘技、竜操術。

その名の通り、竜に跨り、彼らと共に戦い、生活するモノ。

雄火竜の発達した体内器官で生成した可燃性物質を火球として吐き出したり、火山地帯に住まう鎧竜は、体内に籠もった熱を発散するために放射する灼熱の熱線。

彼らを狩猟する事で生計をたてているハンター達にとって、この二つは決定的な死亡要因として確認されているのだ。

しかし、それは彼らの生存本能であって、例外的に気性の荒くなる繁殖期を除き、不用意に縄張りを荒らしたり、攻撃しなければ、害意は少ない。

「竜種^{かれら}は、理性よりも本能が強いから、感情の起伏が人間よりも激

しいんだ。心を知ってしまったえば余計にね」

そして、夜空を羨ましそうに見上げて、ふうっと溜息を吐く。

「あの子の純粹な心に彼は惹かれているんだよ。興味本位……いや、あの様子だと保護欲かな？」

セレンはおつちよこちよいだからね、と笑いながらクロウは付け足した。

頬を撫でる柔らかな夜風。

そんな風が少しだけサラのもやもやとした感情を打ち消した。

「もしもの時は……」

「うん……全身全霊をもって相手するさ。あの子だけでも守ってみせるよ」

屈強な男ハンターには劣るかもしれないが、決して細くない腕に力を入れ、拳を力の限り握り締めたクロウ。

「この血に誓って……」

端から見れば、良い年こいたおっさんが気障な台詞を宣っているようにも見えるが、その周りには何か力強いモノが小さく渦巻いていた。

遠い昔、サラが生死の境を彷徨っていた時、薄れていた意識の中でクロウが纏っていたモノ。

サラを助けるためにクロウが行使した力の片鱗。

不安はまだ消えた訳ではないが、サラ自身もまた同じように拳を

握り締めたのだった。

第七十五話：少女の決意（前書き）

決意が題材の文章が連続で二本……

言葉のバリエーション増やしたいと願う放浪者です。

時間の割に短文ですが、ご容赦をorz

第七十五話：少女の決意

コウの背中に乗り、数分もすると、コウは赤褐色の翼を大きく広げ、羽ばたくのを止めた。

耳の側を轟々と音を鳴らせながら過ぎていつていた風も、乾いた風音となり、辺りを静寂が包み込んだ。

風を掴んだのだ……

『着イタゾ』

しっかりと掴んでいる甲殻の突起部分から手を離さないようにしながら、ゆっくりと体を起き上がらせると、そこには絵本で描かれたような真ん丸と太った月と、星達が煌めく夜空が広がっていた。

銀色に輝く満月の周りで輝くのは、数多にもおよぶ星達。その月明かりの下では、輝く星達の明かりも非常に小さなモノ。

しかし、その数が幾万幾億となれば話は別だ。その小さな体を煌めかせ、大きな月に負けじと輝いている星々。

地上からではあまり目立つ事のない星の輝きが、コウの背中に乗れば、こんなにもはっきりと見えるのだ。

手を伸ばせば掴めてしまいそうな大空に散りばめられた宝石。この光景を父さんと母さんにも見せてあげたかった。

『二人二モ見セタイ、ダナンテ思ッテオランヨナ?』

「見せてくれるのっ!？」

唐突に響いたコウの言葉に、セレンは身を乗り出さんばかりに声をはりあげる。

それに対して、コウの様子はやれやれ、と言ったように深くため

息を吐く。

『我ハ、セレンシカ乗セル氣ニナレン』

「ええ!？」

そんなコウの言葉にセレンは口をあんぐりとさせ、赤黒い甲殻の平らな部分を平手で叩きつけた。

しかし、鋼鉄の刃をも跳ね返す甲殻相手には勝算はなく、鈍い痛みと手が赤くなる始末。

「いだい……」

『セレンノ頭ニハ学ブトイウ言葉ハナイノカ?』

真つ赤になつた手に息を吹きかけ冷やしているセレンに、コウはまたも深いため息を吐き、呆れていた。

叩きつけた本人は頬を膨らませ、抗議をしているようだが、コウは何処吹く風といった様子。

「なんであたしは良くて、父さんと母さんはダメなのよお」

『子供ト大人ノ人間デハ勝手ガ違ウ。ソレニ……』

文句を垂れるセレンの問いかけに対して、コウは言葉を濁らせた。

「それに……どうしたの？」

『才前ノ母親カラハ血ノ臭イガシタ。体ヲ洗ツテイルダケデハ剥ガレ落ちナイ程ノ血ノ臭イガナ』

コウの言う言葉の意味がよく分からなかった。けど、ずっと前に母さんが私に話してくれた事を思い出したのだ。

悲しげな顔をしながら、どこかに懐かしさを秘めた話。母さんに

とって、始まりであり、忘れてはいけない過去の物語。

『少量ノ血デアルノナラ、体ヲ洗エバ消エル。ダガ、幾度トナク血ヲ浴ビテキタ者ハ、幾ラ体ヲ洗ツテモ落ちル事ハナイ』

私にわかりやすく説明しているコウだけど、淡々と語るその口調は語尾に近付くにつれて徐々に強くなっていく。まるで、自分の考えている事が固まっていくように……

『才前ノ母親ハ』

そして、コウは行き着いた。長い間生きてきた経験から導き出した答えに……

ハンターナノカ？

そう……私の母さんは元ハンターだった。それも名のあるハンターだったそうだ。自分の身長以上もある剣を携えて、数々の飛竜を討伐した。

そして、その余りある力が邪魔なモノとなり、ギルドナイトによって暗殺されかけたハンター……

私にとっては勝ち気の強い母さん。だけど、コウにとっては親の仇なのだ。

「……うん」

母さんがハンターであり、たくさんの飛竜を殺してきたこと《……
……》に変わりはない。

たとえば、ある村を脅かせる飛竜の討伐であったとしても……
たとえば、自分たちの生計を立てるためだったとしても……

いくら綺麗に言い直しても、その事実が消えることはないのだ。

『ヤメタトテ、ハンターニハカワラン。何故、我がハンターヲ乗セ
ネバナランノダ？闇雲ニ竜種ノ命ヲ奪ウ奴ヲ背ニ乗セルノハ我慢
ナラン』

「コウ……」

コウの言い分は正しいと思う……

自分の両親を殺した人と同じ仕事をしている人物に対して、何も
感じる事もしないでいる、と言っているようなモノだから……

『我ノ親ハ、ハンターニ殺サレタ。ソレガ摂理ダトシテモ、ヤハリ
抑エキレン』

分かってくれ、と最後に付け足し、コウは黙りこんでしまった。
まだ食い下がりたい気持ちもあったセレンだが、何やら分からない
モノがセレンに流れ込んできていた。

ふつふつとくすぶる怒り、澀んだ憎しみといった負の心。前に老
爺と会った時に触れたモノよりも弱いモノが、セレンの体に流れ込
んでいるのだ。

コレが……コウの心。

理由はわからないが、これがコウのモノだとセレンには理解でき
た。

会って間もない頃に聞いたコウの幼少期の話。その話を聞いた時、
噴き出したコウの激しい感情。

それと非常に似ているモノ。しかし、あの時よりもはっきりとそ
の心を感じとる事が、今のセレンにはできた。

やっとコウの心に触れる事ができた。

人が暗い部分を持つているように、竜も人と同じように暗い部分を持つている。

いつもはそれをセレンに感じさせる事なかった、いや隠し続けていたのかもしれないその心を知った事で、セレンは怖いと感じる事よりも嬉しかった。

いつもコウに思っている事を当てられ続けて、ちょっと悲しかった。それが自分から流れ出した心を見ているのはわからない。けれど、コウの心かもしれないこの感覚に触れられた事で、ようやく自分もコウの隣に立てたような気がしたのだ。

広い世界を飛び回り、多くの危険を払いのけ、今日まで生きてきたコウ。

自分の何倍もの時間を生きてきた中で刻まれた体のあちこちにある傷以上に、コウの心もまた傷ついていたのだろう。

その心の根幹に刻まれてしまった出来事。

忘れる事のできない記憶。

癒える事のない深い傷痕。

消える事のない暗い憎悪。

その感情が炎となり、いつまでも心の傷を焼き焦がし続けているのだ。

コウが抱え込んできたその苦しみが、どれほどのモノかは想像できない。けれど、もしその苦しみを少しでも打ち消せるのなら、私にも分けて欲しい。

いつも守られてばかりの私も、コウのために何か力になりたい。その傷ついた心を少しでも軽くしてあげたい……

だから……

「一人で抱え込んだらダメだよ……」

コウを抱き締めるにはあまりにも小さな体。なら、コウを抱き締める事ができる位の大きな心でコウを抱き止めてみせる。

口から出た言葉は、静かな風の音にも負けてしまいそうだけど、あたしの心に灯った炎は、どんな風にも負けやしない。

だって……

恋する女の子は強いんだから……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8822b/>

瞳にうつるモノ

2011年8月24日14時20分発行